
夜空の三重奏

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空の三重奏

【Zコード】

Z8100C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

中学一年生の美空葵は、夏休みを利用して一人旅に出かける。しかしそれは親に内緒の秘密の旅。思いつくまま気のむくまま。それは心に宿る負の自分を改める為に突き動かされたのである。そして、旅の途中でとんでもない事に・・・少年少女の出逢いと仄かなるロマンス。キャラクターの心の成長を描いた心温まるお話です。

#1 プロローグ

人の世の 名残惜しくは 繫がりを 無くして今も 誰ぞありな
ん

美空みそら 葵あおい 作

今日から新たなる旅立ちの道を歩むつもりだ。誰も知らない場所に、誰もあたしの事を気にも留めない場所に。あたしを、人として認識しない場所に。

産まれてこの方、人との繫がりに稀薄だつた事を何度もとなく突きつけられる場面があった。そりや、繫がりを絶つつもりなんて無いけど、自分に合つた人間を探すくらいなら、この世をおさらばしたい気分に駆られることが多い。

たつた一度だけを除いては。

例えば、同じ趣味の子と仲良くなる。音楽の話なら、その曲や、歌詞、アーティストの話。そういうお話ををして、そりや楽しいね。何時までもこんな話で盛り上がりたくなる。そして笑っていたいし、ふざけあいたい。

でも、気付くんだよ。この人達は、やはり自分とは死を直前にする時まで何時までも一緒にいられない人間なんだつて事に。小学生の時に痛いほど悟った。

そして気がつくと、往来の真ん中でも、教室の中心にいても、ボツンとただ突つ立つて傍観視している気分で、この世に自分の存在が在るのか無いのか?判らなくなる。

それがとても歪ひずみで、無味無臭の空氣の様な者である気がして、そこで息が詰まる。

言つなれば、ただの生きる屍しかばね。生かされてるだけの存在に感じられてしまうわけ。

だから、あたしが生きてる証を探しに旅に出ることにした。

十四歳。季節は中一の夏休み。性別女。名前は葵。美空葵。この夏、自分の価値を探しに旅立ちます！

旅の始まりに、あたしは一つの大きな鞄を手に取った。去年、警視庁で働く立派な、誰にでも自慢したくなる父に買って貰った、中学生になつたお祝いの鞄。あたしの自慢の愛用品。大きいから、旅行鞄としても役に立つのが売りだつたりする。

あたしはそれに必要な衣類や、非常食、旅行に必要な石鹼、歯ブラシなどを詰め込んだ。

こうしてみると、愛用品の鞄が、子熊のように丸々として見えるから不思議。そして、あたしは、必要な金品と、中学生になつてお母さんから渡されている貯金通帳とカードをショルダーバックに詰め込んだ。これが無いと、旅行をしようにもできない。とあたしは思っていた。

この世の中、お金が無ければ渡り歩くことが出来ないと、自ずと知つていて。ああ、こういう所、割り切りの仕方が中学生らしくなくて、夢も希望も無い人生を歩んでる気がするな。でも、それが現実なの。だからこの旅行に必要な物の一番はお金。手持ちは、五千円。通帳には残高一十万円がある。これだけあれば、何とか一ヶ月過ごせるだろう？

あたしは、素で勝手にしおり思い込んでいた。

誰にも居場所を知らせず、行き当たりばつたりの新たなる旅立ち。きっと、お父さんや、お母さんは搜索の手を広げてくるだろう。でも、そんな事は関係ないや。旅が終わつて帰ってきて叱られても、コースで取り立たされても、あたしはこの旅が、今、必要なのだ。親不孝者でごめんなさい。でも、今やらなくちゃならないんだって自分でそう考えたの。真剣に。

そう思いつつあたしは、皆が寝静まつたこの白い満月の夜空に煌く星々を眺めつつ、何不自由ないこの一戸建ての白い花が咲き乱れる

ガーデニングの整った家を後にした。

#1 プロローグ（後書き）

こちらでは「一作目です。

シリアルなんだけど、心温まるものを心がけて書いた作品です。
少年少女の心の成長を見届けていただければ嬉しいです。
もし宜しければ、感想など頂けると嬉しいです。v

さて、最寄りの駅までやつて來た。でも、もう、最終列車は過ぎ去つた後で、あたしは時刻表を眺めながらどうしようか?と考える。まず、宛所の無いこの旅なわけで……最終地点なんて何処にもあります。だから、時刻表に載つていて始発の時刻を見る。

AM5時20分が、この駅での始まり。それまで何処かで時間を潰そうか?と考える。この歳で、こんな駅で寝ていたら、家出してきた子として補導されるのがオチね。見た目からして如何にも中学生だと自分でも自負できる。

こういう時、少しでも大人っぽい容姿をしていたら、問題ないのに……なんて思うけど、今更言つても仕方がない。だけどそれも事実。そしてちょっとだけ、隣のクラスの佐伯さんを羨ましく思う。彼女は、高校生並みのプロポーションで、見かけも、考え方も大人だ。去年同じクラスになつたことがあり、少しだけ会話したこともあつたけど、自分と比べて大人の発言をしていた。

とかく、あたし自身、大人だと思つてた節があつたから、彼女の社会批判の現実論を聴いて、あたしは彼女に負けてるなつて思つた。その後、会話をする機会もなくそのまま一年が過ぎ去つてしまつたけれど。

そんな事を考えて、あたしは、近くに在る公園へと足を向けた。こここの公園は小さい頃からよく遊びに来ていたから、身を隠すことが出来る土管のある公園であることも知つていた。

土管と言つても、工事をする時に使うあんな物ではない。遊具としての土管である。

コンクリート製というのは同じだけど、大きく繰りぬかれていて、大人二人丸々入ることが出来るくらい広い穴。そしてその外壁は赤や青や黄色などカラフルな色をしていて横になつてたり、縦になつてたり。

その上には、雲梯があつて、ちょっと見、小型アスレチックのようになつたりする。

あたしはこの公園が大好きだ。ちょっと他の公園には無い遊具が一杯だったから。

滑り台も裾広がりの山のようになつていて、あたし達子供は、富士山と称していた。

その公園で、あたしは一夜を明かすため、土管の中に身を潜めた。まさかこんな所に子供が居るなんて思いもしないだろう。

土管に入つてあたしは鞄から、目覚まし時計を取り出す。そして、タイマーを五時にセットして、就寝に入った。旅立ちの第一歩の野宿。初めての体験だった。

耳元で『ジリジリ～～ン』というけたましい音で目を醒ましたあたしは、まだちょっと暗い中、公園の脇にある水道で顔を洗い歯磨きをする。タオルもちゃんと準備しておるし、万事朝は快調な滑り出しだ。

朝も早いし、人もいない。でも、後一時間もすると、この公園でラジオ体操に訪れる小学生達で一杯になるんだろうな～そんな事を考えながら、あたしは、鞄を背負い、駅へと急ぎ、改札の前で切符を買ってプラットホームへと歩いた。

始発の電車はまだ着いていなかつた。あたしは、ベンチに腰をかけて、周りを見渡した。人は疎らで、通勤のおじさんかなと思われる人が白線の内側で待機している様子を見た。

後は……酔いつぶれてるのか？変なおじさんを見た。後方のベンチに横になつて寝ていた。あたしはこんなだらしのない大人になりたくは無いなと心の中で呟いた。あ、これって大人に対する子供の偏見かな？後で気付くまで、あたしの偏見は続く事になるんだけどね。

時間になつて、電車がやつて來た。プラットホームも少し人が多

くなつてきて、あたしは負けじと、席を確保するために前に並んだ。他の乗客は殆ど会社勤めの方達だつたようで、きつちりとスーツを着込んでる。あたしだけ何だか此処にいてはいけない者の様に感じられて、それが逆に嬉しくてちょっとだけウキウキしていた。

さて、何処に行こう? 今年の夏は暑くなりそうだから、北海道にしようか? ラベンダー畑を見てみるのも一考だしなあ~なんて勝手な理想を思い浮かべていた。

直に東京駅に辿り着く。上野まで出ようかなと思った。そうしたら、北に向かつて一直線。でも何を間違つたか、品川へと向かう山手線外回りに乗つてしまつたわけだつたり……。こういつ間違いをしてしまつたのも、何かの縁かも知れないと、気のむくまま、品川駅で一旦下車し、東海道線に乗つた。

新幹線に乗つたのは、何時以来だろう? 小学生の修学旅行時以来の気がしたり? ワクワクしながら、席に着く。さてこれから何処に行こう? あたしは、北が駄目なら、南にしようといつ考えに至つた。沖縄も良いなあ~ 南国つて開放感つてのものを感じるし? 自分の中で楽園というイメージが湧いてくる。それに心を癒してくれそうだ。特別に疲れを感じているわけでは無いけれど、そつとつのもまたオツではなかろうか?

そんな夢心地の自分のその胸に魔の手が伸びるなんて、この時は一切考えてもいなかつた。あたしはのんきにそんな事を考えていた。

#3 盗難

新幹線の中であたしの隣に座ったのは、笑顔の爽やかな、紳士風のおじさんだった。

「あれ？ 一人で旅行？ 何処まで行くの？」

気さくに声もかけてくれた。あたしは安心し切っていたのだろう。何の不信感も抱かず、その人とお喋りをした。

「一人で沖縄？ 淫いね～『ご両親は？』

「え～と、沖縄に居るの。あっちで待ち合わせしているの嘘をついた。本当は違つけど、家出人なんて思われたらそこで最後だ。

「ふ～ん。おつきな荷物抱えて大変そうだね？ そうだおじちゃんが、その荷物、荷物棚に置いてあげるよ」
にこやかに対応してくれた。

「ありがとう～」

あたしは背が低いので、荷物棚に荷物を置くことができなくて、手荷物状態だつた。だから、おじさんに、荷物を置いてもらつた。
「おじさんは、何処まで行くの？」

今度はあたしが問い合わせ返した。

「おじさんは、新大阪まで行くんだよ。出張なんだ。君くらいの子が娘に居てね。今ちょっと顔を思い浮かべてしまつたよ」
につっこり笑いながら、そんな会話が続く。

列車は、凄い速度で過ぎていく。景色より、おじさんと話していく時間が増えて、のんびり見ていく時間はなかつた。ま、会話が弾んでるから、それはそれで良いのかなとも思つたりしたけれど。

そして、名古屋辺りであたしは朝早くから起きて行動をしていた為に、眠気に襲われて、おじさんに「『めんなさい』」を言い、一眠りすることにした。

それが間違ひだった。

新大阪を過ぎた辺りで、あたしは、眠りから一度覚めた。どのくらい眠っていたのだろう？もう隣のおじさんはいなかつた。その代わりにあたしの大きな荷物がその座っていた席においてあつた。

きっと、おじさんが下ろしてくれたんだろうと思つて、また一休みの睡魔に襲われ眠りこけて、気付くと終着点の岡山まで辿り着いていた。

そして、人間不信の泥沼の縁に落とされてしまつのである。

乗車確認する車掌さんが、切符の確認をするためにあたしを起こしてくれた。だから、あたしは、身につけているショルダーからその切符を取り出そうとした。花柄のお財布に入れたから、それを見せようと。しかし、そのお財布がどこにも無いのである。しかも、その財布には、カードも入つていたのに……

「どうしたの？お譲ちゃん？」

車掌さんは、にっこりと微笑んで、あたしに問いかけた。

「無い！あたしのお財布が無い！」

あたしは、パニックに陥つてしまつたのは言つまでも無い。これから旅も、全財産も此処にはもう無い。こんな事が起つて一体？そう考えて、あたしは、大きな荷物の方の中身を開いた。少し荒らされているのが判つた。あのおじさんだ！あたしが寝てる間に、奪つて行ったのだと。

「どうしたの？」

「盗まれてるんです。あたしの財布が！」

あたしは、車掌さんに向かつてそう叫んだ。車掌さんは、驚いて、あたしが慌てているのを察めるかのように事情を聞いてくれた。

「切符だけでなく、カードまで財布ごと盗まれたんだね？これから何処に行こうとしてたの？」

あたしは、取り敢えず、沖縄に行くだけ言つて、後は口を噤むしかなかつた。

余りにもショックを受けていると思われたのだろう。取り敢えず、あたしを落ち着かせるためにも岡山のこの地で駅員さんのいる窓口の部屋に通され、あたしはパイプ椅子に座らされ事情を話さなければならなくなつた。

勿論、警察の方もやつて来ることになる。口でさえ事情が事情だ。そうなると、名前がばれた時点での父さんの事を取りだたされると決まつている。

勝手に家を飛び出して、こんな所で旅行も終わりだし、カードさえも失つて……あたしは人生全てが終わつてしまつたのではないか？と言つような、この世の終わりを思い浮かべてしまつて、もう立ち直る気分になれなかつた。

「お譲ちゃん？お名前は？」

そう問われても、応える氣力が無かつた。もう、全て終わった気がしたから。

それに、ここで美空葵の名前を出して、父にバレるのも怖かつた。旅行から帰つてから叱られる覚悟はあつたのに。自分の意志は、今この時点で自分の冒していくことに対する負けを認めるようなことをしたくなかったのだ。

「うーん。黙つても仕方が無いよ？無錢乗車してるのは思えないから、ちゃんと應えてくれたら、ご家族にだつて連絡できるんだし？お譲ちゃんも安心できるでしょ？」

言つてゐることが理解できないわけじゃ無い。判つてることなんだけど、あたしは喋るわけにはいかなかつた。

「どうしましょうかね？警察が来るまで、暫く、このまま待ちましょうか？」

一人の駅員さんが言つた。あたしは、警察が例え此処に來たとしても話す氣は全く無かつた。

「お譲ちゃん？お匂い飯は食べたかい？お腹減つてない？」
減つても、空腹感より脱力感で何も感じない。だから、頭を垂れ、そして、首を横に振つた。

「何か訳ありなのでしょうか……？」

また別の駅員さんが、陰の方で囁いているのが聴こえた。あたしは、流石にまずいと思って、その場を立ち去ろうと、パイプ椅子を押し倒してこの窓口から飛び出した。大きな鞄を置き去りにして。後方で、大慌てで呼び止める駅員さんの声が響いた。そして、走つてくるその足音も聴こえていた。だけどあたしは振り返りもせず、走ることだけ考えていた。

#4 逃避と出逢い

駅構内は、人で溢れている。もう何処をどり走ったかなと覚えてちゃいない。取り敢えず、逃げ出さなきやならないと思い、それだけ頭が一杯だった。

あたしが、駅構内から外に出て、商店街を通り抜ける頃には、もう誰もあたしを追い掛けてくる者はいなかつた。あたしは、身体は小さいけど体育は得意で、五十メートル走を六秒台で走れると言う足の速さは自慢だつた。それに機動力がある。だから出来たことだと思う。

そして商店街を抜け、ちょっとした下町っぽい所まで来た時には、流石にもう走ることが出来なくなつていた。

仕方ないので、道端の縁の大きな石に座り込んだ。

「どうしよう……今頃、お尋ね者になつて、大騒ぎになつてしまつてるかも知れない……」

な

キューと、お腹が鳴つた。頼れる者がいない世界。本当に誰もあたしを知っている者がいない世界がここにあつた。望んだことだけ、望んでない世界。こうなつて初めて知つた。どつにかなる！なんて事は無いのだと。

子供なのだと知らされた。お金がないとどつにもならない世界が広がつた。夢も希望も無い。それが今だつた。

せめて、誰か知っている者がいれば、声を掛けることが出来るのに！そう思つて、道端の石の上で、脚を抱え込んで、体育座りをして、密かに泣いた。このまま誰にも知られずにお腹が減つて死ぬかな？そんな事を考えて泣いた。生きることがどんなに大変か？やつと判つた気がする。

つまり、保護下に置かれない世界。これがそれなのだと判つた。父親のいない家庭や、母親がいない家庭のグレてる子達の事を初め

て判る気がした。反抗したいんじゃなくて、構つて欲しいのだと。今の自分がそんな気分だから。

誰かに声を掛けてもらいたい。気付いて欲しい。やつらひ気持ちが心の中に溢れてきた。

そんな時、一人の少年が、あたしに声を掛けってきたのである。

「どないしたの？君？」

その子は、金髪の髪を靡かせて、あたしを不思議そつに見下ろしていた。フサフサした髪の毛が気持ちとは裏腹な快晴の陽の光の下煌いて、綺麗だった。

よくよく見て不良か？と思った。まだあたしと同じくらこの年頃に感じるのに、耳にピアスまでして……けど、そんな事は後回しなつた。何よりも、声を掛けてくれたことが嬉しかったのである。

「あんさん。泣いとるん？うち来るか？」

でもその後の言葉が、まるで新手の軟派の様な言葉だった。でも、あたしは、もう行く所もなければ、どうすることも出来ないので、「家は何処？」

と問い返した。一瞬、あの新幹線の優しそうなおじさんが頭に過ぎたから慎重に越したことは無い。

「そこ。この道真つ直ぐ行つて、曲がった所にあるんや」

自転車に跨つた少年は、わざわざサドルから腰を下ろしてスタンドを立てるごとに、あたしの手を取つて、立つように促した。

「まだ行くつて言つてないよ。あたし……」

「大丈夫やで、今のあんた、昔のオレと同じ目しとるもん」

どういう意味だろう？と小首を傾げたくなつたけど、あたしは黙つてその少年の後を着いて行つてしまつ形になつてしまつた。

着いた先は、まるで、何かの施設のような感じを少し漂わせた、木造の古びた建物だつた。

「子羊園？」

あたしは、建物の門の所にある、看板を見て言葉を漏らした。

「そ、此処がオレの家やねん。ええ所やで。入り～や？」

少年は、あたしの背中を押して、中に入るよう促した。

中は、まるで幼稚園生のお遊戯室のような内装をしていた。今日たつた今まで誕生日会でも有つたかのよつて、折り紙で出来た輪を繋げた物があつたり、薬玉くすだまを割つた後のような、紙が散らばつてた

り。

「此処が家？」

「そや。あんさん。家は？」

その質問には答えられない。だからジツと黙ってしまった。

「喋りたないんやつたら、聞きとうないで。ま、ええわ。」

すると玄関口で話しているあたし達の前に、一人の女の人が現れた。まるで、幼稚園の先生のように、おつとりとした感じの綺麗な

人だつた。

「延光君？さつき出て行つたんとちやうん？」

あら、お友達？初めまして！此処散らかつとるけど、ごめんなさいね？」

「母さんは？もう、出かけてもつた？」

「先生なら、さつき延光君と同じ位の時間に出かけられたわ。会わなんだ？」

「うにゃ、みいひんかつたわ。まあええわ。あんがとせん」

どうやら、この少年は、延光と言うらしい。で、この女の人は、お姉さん？にしては、歳が離れすぎてるよね？なんて人間観察をしてしまつた。

お母さんと呼ばれるそれを、この女のは『先生』と呼んでる辺り、此処は学校（幼稚園）なのかも知れない。

「延光君て言うんだ？」

あたしは、問いかけた。

「須藤延光すじゅつのぶみつって言うんよ。延光でええ。あんさんの名前は？」

「あたしは……葵」

思わず応えてしまつた。でも、流石に苗字は名乗らずにおいた。

「葵ちゃんって言つんや。よろしくうな？」

延光は笑つてそう言つた。特に気分を害してゐるよつこは見えなかつたので、ホッとした。

「今のは誰？」

気になつたので、訊いてみた。

「ん？ 亜希子さんのこと？ オレの姉さんみたいな存在みたいな存在。つて言葉は引っ掛けたけど、どうやら、お姉さんと言う事らしい。ま、あたしも苗字名乗つてゐるわけでも無いし、詮索するのは変か？ とそう割り切つた。

「今日、泊まるといふあるん？ その様子やと、あんせん、家出して來たやろ？」

「！」

あたしは、直球を投げられたので、思わず固まつてしまつた。何故判つたんだろ？ あの大きな鞄。お父さんから貰つた、大切な鞄が無いのにもかかわらず……

「どうしてそう思つの？」

「だつて、此処の土地の言葉使つてないしな～それに、顔に書いてるやん」

あたしは、鏡が無いか探しそつになつた。

「やつぱやうなんや～事情は知らんが、此処は自由やし、オレも勘織らんとつてやるから安心せえや？」

延光は、笑いながら思いつきりあたしの背中をバンバンと叩いた。「ちょっと、痛いつて！」

余りにも叩くから、あたしは悲鳴のような声をあげて非難した。

「すまんの～ま、取り敢えず、腹減つとる様やし、何か食べるか？」

あたしのお腹が、緊張から解かれてグーグー鳴つているのが聴こえたから延光はそう言つた。だから、あたしはその言葉に甘えて、延光の後に従つた。

「何か食べもん、ないかいなあ～？」

鼻歌を歌つようになつた延光。廊下をずっと真つ直ぐ行つた

所の突き当たりに、簡素な木であしらわれた部屋があつた。と言つ
か、この家自体木造ではあるけれど。

その部屋がどうやらキッチン仕様になつてゐるらしい。かなり広い
部屋で、テーブルも十人位が座れるのではなかろうかと思うほど大
きかつた。実際、椅子の数も多いんだけど。

そして、延光は普通の家庭に無いような大きな冷蔵庫を何の躊躇
も無く開いた。中には、ラップを掛けたお皿が沢山並んでいるのが
見えた。そして、その一つをつまみ出し、あたしの前に見せた。
「今、レンジで『チン』してやるから、その椅子にでも腰掛けと
り～や？ ご飯は焚けとるかなあ～？ この時間やしなあ～」

なんて呴いて、イソイソ動いてる。

世話焼きと言つか何と言うか……普通此処まで初対面の人間にし
てくれるであろうか？ あたしはそんな事を考えた。

きつとあたしが延光の立場なら、こんな世話を焼いたりしない。
それよりまず、あの自転車を漕いで、何も見なかつたことにして通
り過ぎてしまつてると思う。だって他人じやない？ もし知人、友人
だとしても……一步引いてしまつて声を掛けづらいと思う。特別な
友人付き合いをしたことの少ない自分がそう思うだけなんだろうか
？ 一般論はどう？

心の中で何度も呴く。でも答えが出るわけではなくて、より疑問
になつてしまふ。あたしは、非道な人間なんだろうか？ ど
「どないしたん？ そんな顔して……お家うちが恋しなつたか？」

どうやら、電子レンジで温め直しが出来たらしく、テーブルには
湯気のたつた野菜炒めと、お茶碗に入つたご飯があつた。
そして、目の前には家庭で使つてゐるのではなかろうかと思われるお
箸がお箸置きに添えられていた。

まるで、来客が来たときのような御もてなしの一つのよつとに思わ
れた。

「……本当に食べて良いの？」

あたしは、生睡を飲み込みながら一応問い合わせた。

「何言つとんのや？ 食べてええから『チン』したんやん？ 变なこと訊くなあ～」

延光は、あたしの目の前の椅子に腰を掛け、あたしの食べる所を拝見しよう！ みたいな表情で両肘を突いて覗き込んでいた。

それがかなり気になつたけど、お腹の虫は正直で、目の前の食事が美味しそうに感じられるから、何も言い返さず箸をつけた。

始めは、お行儀よく箸でちょっとずつ摘んでは口に頬張つて食べてたけど、その内その速度は早くなり、最後には集中して駆け込む感じで全部平らげてしまった。

「ふ〜〜〜う！」

食べた後、思わずため息交じりの感嘆の声が擬音として口から漏れた。もう満足だった。

何だらう？ この只の野菜炒めに隠されたスペイスつて物は？ 食感は何処で食べる物とも変わらないし、味だつて平凡。でも、今まで食べたことが無いくらい美味しい感じられた。

「どう？ 美味かっハキたか？」

延光は、クスクス笑いであたしを見ていた。

「ご馳走様でした……」

その笑い方が、余りにも子供っぽくて、そして意味ありげだったから、あたしはちょっとイラついてしまった。せつかく美味しい物を食べたつてのに。感想も何も言えないじゃないか……

「美味しいと思つたらな、素直に『美味しい』って言つんやで？ それが子供の常識やとオレは思つどるんやけど？」

意味ありげにあたしを見てそう言つた。

「…………美味しかつたです」

あたしは、言わざるおえない気分になつてそう言つた。そしたら、延光は、につこり目の端を下げて綺麗に笑つた。あたしはその表情が余りにも印象的で『ドキッ』として、目を見開いた。延光と言う人間にこんな表情が出来ると思ってなかつたからである。

そんな戸惑つてるあたしの顔を見ずに、延光は後片付け始めた。

流石に我に返つて、あたしは、

「手伝うよー！」

と、そのお茶碗とお皿とお箸を搔つ 撥つて流し台に向かった。

そして、お客様として招かれていたはずのあたしは、勝手知つたるこの家の子供の様にスポンジに洗剤をつけ、出来た泡を確認し、洗い物をしたのである。

洗い物も終わり、あたしはホツとして、後ろを振り返ると、延光がテーブルの椅子に後ろ向きに座つて後方の部屋に当たる居間のような部屋を覗き込むようして笑っていた。

「何してるの？」

あたしは、その延光がいる椅子の所まで足を運んで問いかけた。
「ん？ あ、洗い物終わつたん？」

延光が眺めている物を見た。それは、テレビだつた。

「あ、もうこんな時間なんだ？」

延光が見ている番組が、自分もよく観ているアニメだと判り、今が何時なのかに気がついた。

「この、悪役つて、馬鹿だよな～いつもやられて引き下がつてやんの！」

クククと延光が笑つた。あたしは、正義の味方より、この悪役の方が好きだつたから、

「そりかなか～こういうところが可愛いんじゃん？ 判んないかな～？」
なんてイラついて返答した。

「葵つちは、悪役の味方なんや？ 普通子供つて、悪役より正義の味方に惹かれるもんやで？」

『葵つち』？ その愛称でこの先呼ぶつもりなんだろうか？ と苦笑いしたかつたが、それより会話を優先させる。とにかくその言葉はどうだらう？ だつた。

「でも、実際悪役の方が、人の心に反映してると思つけど？」

「じゃあ何か？ 人間に良い奴はあらんつちゅう考え方か？ そりや変や
「何処が変なのよ？ それが人間でしょ？」

「う～ん。でも、皆が皆そう言つ考へしとるつちゅうのは、被害妄想やとオレは思うよ。確かに、中には嫌な奴とか、酷い奴あるけど、それが全てつて考えは……そつか、葵つちは周りにそう言つ奴が居お

らんのや？だから、人間不信になるんやな」納得

と言つて、あたしの目をジッと見詰めてきた。何かを探るような目だったので、あたしは目を背けた。あたしの心を読もうとした。そんな気がしたから……

「慣れてないんやな。人と接すると言つ事に。人つて、思ったより単純に出来るもんやで

？」

その言葉に、あたしはそうじや無いと思つた。複雑怪奇だよ。人間！だから、正直者のお人よしは損をするんだ。

「天然記念物の様な人には、あたしのような人間は判らないわよ！」思わずやけっぱちに喚いてしまつた。でも、延光は、それを気にも留めてないといった感じで、

「判ろうとは思わんけど、これから判ろうと思つで？ そうそう、行く所が無いんやろ？ そしたら、ずっと此処に居れば良いわ。此処は、そう言う人間が集まる場所やから」

そう言つて、また、につこり笑つた。

あたしには、この延光が判らない。普通、激怒するだろ？ こんな言葉投げかけられたら……もつと疑問に思つたのは、人間つてこんなにお氣楽で良いのか？ だった。そして、そんな事を考えている間に、気付いた時にはそのアニメは終わつて、無味無臭なＣが流れていた。

「ただいま」

あたしが、キッチンの椅子に座つて、これからどうしようか？なんて事を考えている時、一人の少年の声が聞こえた。

どうやら、ここに住む延光の家族の一人なのではなかろうか？ そう思つとあたしは此処を立ち去らないといけないと言つ衝動に駆られた。が、延光が、

「お、帰つてきよつたな～」

バタバタとその声を聴きつけると、すぐさまこのキッチンから飛

び出して行った。

何か、こう、仲の良い家族劇でも見ている気がして、またあたしは不愉快な気分になつた。今頃、お父さんと、お母さんは何をしてるんだろう？そんな事が頭を過ぎつた。

「今、珍客が来てるんや、おまえも挨拶しどきー。」

玄関の方からそんな声が聽こえて来る。珍客にはちょっとムツとした。が、逃げるわけにも行かなくて、あたしは黙つて椅子に座つていた。

「葵つち。オレの弟分の隆^{ロウ}や。仲良してやつてやー。」

延光とは違つて、引っ込み思案っぽい少し陰のある、色白の少年だった。あたしと同じくらいの歳に思える。と言うか、少年なんだけど、少女にも見えなくも無い？第一印象はそんな感じだった。

「こちら、葵つち。隆、挨拶しいや？」

その隆と呼ばれた子は、一瞬ためらつた感じで、一瞬だけあたしの目を見て直ぐ目を逸らした。

「ここにちは、初めてまして、須藤隆と言います」

それだけ言つと、黙り込んでしまつた。

「こいつ、人見知りするんや、でも、慣れたら人懐っこくて可愛い奴なんやで？」

言わなくとも、少なくとも延光に比べたら人間らしいわよーなんて思った。が、敢えて言わないでおいた。

「母さん、いつ帰つてくるんやろうなー？今夜から、葵つち此処に住むことになるちゅうのに？」

「え？」

あたしは、呆然と立ち尽くしてしまつた。

誰が何処に住むだつて？てか、延光あんた何を言つてるとか判つての？泊めるつていうだけの話なら尚且つ、住む？家出少女を引き取るなんて有り得ないだろ？に！

「え？って、そうしないと何処で寝たり起きたりするのさ？葵つち、この土地のもんや無いやろ？オレの勘だと少なくとも、東の人間

や。間違つとるか？

その質問には答えられない。あたしは、素性をバラす訳には行かない。ま、その内搜索の手が広がるだろつけど……

「のぶちやん？葵さんって、もしかして家出してきたの？」

「ほら～……普通そつまつ風に反応するのが当たり前なのよー」と言つてしまつといふで、

「ふ～ん。なら、お母さんに相談すれば良いよ」

つて、隆さんあなたも何を言つてるんだね？あたしが呆然としてしまつたのは言つまでも無い。

それからが大変だつた。引っ込み思案の人見知りをするとひつ隆が、あたしの目の前に座つてあたしをジツと見ていた。挨拶した時目を逸らした人間とは思えないほど、あたしをじっくり観察でもしている感じであつた。

でも、話そとはしないのよね？一体何を考えているのか、あたしには理解できない。だから、なるべく気に掛けないように努力して、延光と話していた。

「だから、あたしは、ここに住むなんて事は出来ないって！」

「じゃあ、帰るんや？家に？」

「帰れないのよ！無理なの！」

と言つ口論を延々とした。で、切り込み隊一番長つて感じで延光はこうつ言つた。

「んじや、帰れない理由はなんや？親と喧嘩した？嫌な目にあつた？オレは、葵つちの事は何も知らないわけやし。そつちから話さん限り判らんわけや。それが嫌なら、住めば良いつて言つたんや！おかしいか？」

結局そこに行き着いて、あたしはグウの音も出なかつた。

話してしまえば、きっと、家に連絡が行つて、あたしは家に帰らざるおえなくなる。だつて、あたしは家に問題を抱えて家出した訳じゅ無い。只のあたしの我慢に過ぎない訳で……勝手すぎる良い所

の家のお嬢様同様の家出である。

なら、お金を借りて、此処を出て、また、旅を続けると言つ手はある。が、そんなお金を貸して貰える訳がない。道理が通らない話だ。

こんな口論をして得られる物は、何も有りはしない。でも、此処を出でしまえば、あたしは路頭に迷うしかない。そう思つて、「判つたわ。取り敢えず今日は、此処に泊まらせて貰つ」とにする。

「……」
我が身可愛さ。の決断。でも、明日はどうする?全く先が見えないのよね?

「全く……強情やな~葵つちは。泊まるじゃなくて、住む。でええねん。なんも困るもんは此処の家にはおらんのやしな~な、隆?」
そう言つて、隆に話しを振つた。

「……」

何も言わずに、ジツとあたしを見て隆は、頭を縦に振つた。
ああ、よく判らない家だ。そしてこの連中は…
そんな事を思つていると、勢い良く玄関の引き戸が開く音が聽こえた。

「ただいま~」

凄く賑やかな声が聴こえてきた。何人いるんだろう?つべくら~ザワザワとして、また声も幼く感じた。

「ただいま!」

その後に、少し歳を取つた感じの女性の声が聴こえた。もしかして、延光や、隆のお母さん?とあたしは思い、身構えた。そんな状態のあたしを二人は無視して、

「おお~帰ってきたで~我らの主が~!」

延光は、隆を連れ立つてテーブルの椅子から立ち上がり、玄関の方へと歩いていった。

あたしは、この後に起こる事を考えて、そして身体を硬直させた。
きっと、非難の目で見られるんだと思つていたからだ。

でも、全く違つた。

「あら～珍しい。お客さん？」

老婆までは行かない、初老のおばさんは、微笑ましい珍客とでも見るよ「うに、あたしを見てそう言つた。

どう考へても、この人が延光や隆のお母さんだとは思えなかつた。一体どういう家庭なんだろ？とあたしの頭の中は想像を働かせた。そして、その前に並ぶ五人の五歳くらいの子供達。

「あんな、母さん。この子葵つちつて言つんやけど。今田から家の子になるんやで！構わんやろ？」

あたしの隣にやつってきた延光がいきなり説明し始めて、あたしは今があたしの立場というものが意識として戻つてきた。

「そうね～でも、葵ちゃん？お家はどうしたの？」両親は？」

その言葉に、あたしは何も言葉が紡げなかつた。この延光のお母さんと言う人のかもし出す雰囲気は、穏やかで、あたしを尋問しようと言つうような素振りを全く見せなくて……かえつてこういう大人は、苦手だ。

「そうね。何も言いたくないのなら良じわ。自分で決めることですものね？わたくしは何も言えないけど、葵ちゃんがそうしたいと言うのであれば、家においでなさい。歓迎するわ？」

そう言つて、目尻に皺を寄せながら微笑む。

何も言えない自分が腹立たしくなる。けど、それは延光のお母さんのせいではまったくない。自分自身に腹を立てていてる事に薄々気がつき始めていた。そして、きっとこの人には何もかも話さなければならぬ日が来るのではないだろうか？と言つ氣がしてくるから不思議だつた。

「済みません。何も申し上げれません。それでも、あたしは此処に居ても良いのでしょうか？」

か？」

あたしは、ただ一言最後にそう言つた。

「勿論よ。歓迎するわ」

そう言つて、延光のお母さんは、優しくあたしを包み込むよつて微笑んでくれた。

「おひしゃーーーんじゅ、『飯』『飯！』隆？ 優香と造りと凜と鈴音と涼に手を洗つよつて洗面所に『ゴー！ オレは、亞希子姉ちゃん呼んで来て、『飯の準備するよつて言つとくわ～！』

そう言つて、延光と隆達は各自自分の持ち場へと散つて行つた。

「どうぞ、お座りくださいな？」

後に残つたあたしに、延光のお母さんは隣の部屋の、さつき見た

テレビが有る居間の座布団に座る様に促した。そしてこいつ言つた。

「安心なさい。此處はね、家を失つた子達で一杯なの。だから、葵ちゃんがどういった経緯で此處に来たのかは判らないけれど、追い出すよつなことだけはしないと約束するわ？ でもね、葵ちゃん。あなたは家出をして來たのでしょ？ それも、お家に何か問題が有るとかではなく。今まで此處に來た子達と、あなたは似てるよつだけど、全く違うとわたくしはちゃんと判るわ……」

あたしは、その言葉でハツと氣がついた。この家は、養護施設なのだと。そして、それを見守つてゐる人が、お母さん役を買って出ているのであるのだと。この人の洞察力は鋭い。伊達に延光達の母親役をやつてるだけはある。全てお見通しなのであるのだろう。「あのね、一つだけ確認させていただける？ お家は、この辺りでは無いわね？」

あたしは、その言葉に素直に頷いた。

「そう。きっとお家の方は心配しているわ。もし宜しかつたら、連絡先を教えていただけるかしら？ わたくしがちゃんと、了解を得るから。どうかしら？」

そう言つたこのおばさんは、不思議な力を持つていてあたしは思つた。^{かたく}頑なだつたあたしが、この人には連絡先を教える気が起つたのである。

おばさんは手帳に連絡先の電話番号と名前を控えた。

「そう。ここね。ねえ、葵ちゃん？ どのくらい此處に滞在したい？

今は丁度夏休みである」ことだろうし、一ヶ月位ならわたくしも面倒見ることが出来るわ?どうしたい?それを決めるのは葵ひやん、あなたの意志よ?あなたの本当の気持ちを聞かせてくれたので良いのよ?」

おばさんは、あたしがどうしたいのか？それを考慮に入れると、う事を言いたいのだろう。

あたしは、どうしたいのであるうか？連絡を入れたら、あたしは家に帰らないといけないという気持ちに追い詰められるかも知れない。それに、カードも失った事を伝えないといけない。そうなると、家からお父さんとお母さんが此処にやってくるだろう。そして、この人に頭を下げるに決まってる。そう言つてには敏感な両親だ。

「あ、あのう……あたしは、今帰るわけにはいかないんです。まだ自分の旅を終えてないから。それに、お父さんと、お母さんがきつと連絡を入れると、此処に押しかけると思つんです。」迷惑をおかけするわけには……」

まだ纏まつてない頭で、言葉を紡ぎ出すのに苦労して、言いたい事がチンプンカンプンだつただろうに、

「そう。葵ちゃんの考へてる事は大体判つたわ。葵ちゃんは、今自分に必要なことをその手で掴みたいのね？ そう言つ時期が来るのが早すぎたの。それを悔いることは無いわ。大丈夫よ。きっとわたくしが上手くお話をし差し上げるわ。安心なさい。ここに『両親が来る』ことを心配してゐるのなら、大丈夫。おばさんが、上手くお話できるから。今日から、一ヶ月間は、美空の姓から須藤の姓を名乗りんなさい。葵ちゃんが探してゐる物をその中でちゃんと見つけるの。それが今のあなたのやるべきことだとわたくしは思う。大丈夫。延光達にこの事は何も言わないから。私の胸に仕舞い込んでおくわ？ それで良いわね？」

目の前の霧がスッと晴れていくような気がした。この人は、学校の先生なんかより人を安心させることができが上手い。お任せしても丈夫のような気がした。

「はい」

あたしは、躊躇することなく返事をした。そして、一つ言い忘れている事を言つた。今自分が無くしてしまった、手持ち金とカードの事を。

「それは、何処の口座？ わたくしが、指し止めするように連絡を入れるわ」

「え……と」

あたしはショルダーバックに手を伸ばした。そして一つのポケットに収まつた、唯一残つた通帳を見せた。

「判つたわ。安心なさい。カードだけ持つて行つたのなら、暗証番号が無いと引き出しさ

困難よ。今ならまだ間に合ひうと思つわ」

おばさんは、そう言つてあたしの背中に腕を回して抱きしめてくれた。少しあ香がかつた匂い。それが染み込んでいる衣服と、肌のぬくもりが、よりあたしを安心させた。

「明日の朝、こつそりわたくしの部屋にいらっしゃい。連絡の事後報告をしてあげますから。部屋は、一階の奥の間よ」

そう言つた時、延光が亜希子さんを連れてやつて來た。

「ご飯の支度、まだ出来てないんやつてさー亜希子姉さん何やつとつたんや？」ご飯だけしか炊けてないやないの？」

さつきの「ご飯はあたし頂いたんだけど、大丈夫なんだろうか？ そう思つて、心配になつた。只でさえ人数の多いこの家だ。炊いている「ご飯も限りがあるだろ？」

「あの……あたしはさつき食べたから、もう良いや？」

と、延光に言つた。此処に滞在することになるのなら、それなりに自分の立場も考へないといけない。

「葵つち～昼夜」ご飯やつたんやろ。わつきのせ？ ちやうの？」

延光はそんなの有り得ないとでも言つように皿を細めた。そりやそなんだけど、足りなくなるのは問題だ。

「葵ちゃん？ ご飯は余るくらい炊いてるから心配しないでね？」ただ、

おかげがね、ちょっと人数分無いかも……あ、延光君のおかず減らしちゃおつか！」

亜希子さんはそう言つて笑つた。

「おーおー！オレは食べ盛りの男なんやで？そんなん有りかいな！亜希子姉さんこそ少しダイエットしたいって言つとつたやん！そう、少しくらい減らしましょ？」

冗談言つてケタケタと笑つてる延光はキッチン内を怒つて追い掛けてくる亜希子さんから逃げ回つている。その様子を見ると、此処に居ても良いのかも知れないと思える。

何だろう？こういう感じの他人の寄り集まつた家庭。皆自分と他人を分け隔てなく見てるし、尊重もしている。ここには自由という物があるように思えた。

延光が、あの時、

『昔の自分と同じ目をしてる』

といった意味が判つた。延光の真の素性は判らない。でも、家を失つた＝親が居ないと取れる。両親を何故失つたのか？そして、此処に来た経緯さえも判らないけど、少しだけ、延光の事、ここに住む隆やその弟、妹達の事を知りたいと思つた。

これは興味というより、あたしが望んでいる事なのだと感じた。そんな時、隆と、その兄妹達も手を洗い終わつて帰つてきた。ワイワイと楽しげに、キッチンへと入つてきた。

その中にあの無関心でいた隆のあどけない笑顔を初めて見た。こんな風に笑うことが出来る子なのだと判り、それが意外で、今のあたしをとても嬉しいという気分にさせた。

夕飯は結局七時半頃に始まった。

こんな大勢で食べる夕飯なんて初めてだつた。

あたしの家は三人家族。そうあたしは一人っ子である。親戚の家は余り訪れる機会もなく、従兄弟と会話を交わしたのも余り覚えが無い。血筋関係と言う物に無縁だつた。

だから、この夕飯は不思議な感覚だ。これから一ヶ月こんな風に過ぎていくのかなあ、なんて考えると、とても心が和む。つまり、あたしはこいつのを望んでいた事になる。

「えと、葵……お姉ちゃん？一ヶ月だけなの？」

と、優香ちゃんが訊いてきた。この子は目が丸くって大きくて、五人の子供の中で一番人懐っこい感じの子である。多分、延光と隆の次にお姉ちゃんではなかろうか？ 実際歳を訊いてないからあくまで想像だけだ。

「うん。 そうなの。 短い期間だけ宜しくね？ 優香ちゃんは、あたしが居て不満？ 大丈夫かな？」

「そんな事無いよ！ 家族は多い方が楽しいもん！ わたしね、歳の近いお姉ちゃんって呼べる人欲しかったんだ～えへ」

お茶碗を持つて、自分の頭を小突く優香ちゃんの仕草は可愛かつた。あたしも欲しかつたよ妹。心で唱えると、

「あおいおねえちゃん。わたしもうれしいよ～ゆうかおねえちゃんつて、ときどきいじわるするからきらい……」

おいおい～。鈴音ちゃんは言った。この子が一番年下のかも知れないな。色白でほつそりとした身体からは考えられない一言が飛び出した。嫌いって……

「でも、なかがわるいわけじゃないんよ～ゆうかおねえちゃんはじこしゅちょうがつよいからこいつなるだけだから、ね、ゆうかおねえちゃん？」

「やつぱり」と…

おおつと、こんな幼い鈴音ちゃんが自己主張つて言葉を知つてるとは……しかも、それを理解した上で、優香ちゃんと会話をしている？中学生も敵いませんわ。

お隣どひじで座つているこの一人の間には仲が悪いじゃなくて、どこかでちやんと繋がつてゐるんだと知つた。うん。言葉で好き嫌いが良い合える同士つて、本当は仲が良いのかも？なんて思えるくらい、この一人は心の奥底で繋がつてゐるんだろう。目の前の一人を見てそう思った。

すると、はす向かいの方で、喧々囂々の会話が始まつた。あたしは何となし気にその方を見た。

延光が熱弁を奮つていたのである。

「だからやな！オレはこの夏に、絶対四国回りをしたいねん！」

あたしの隣にいる隆はその言葉を聴いてるのか聴いてないのか？黙々とその熱弁を無視し、おかげのほうれん草のお浸しを箸で摘んで口に静かに運んでいた。

話の相手はどうやら隆では無いらしく。浩一君と、凜君、涼君であるみたいだ。

自分より歳の離れた子供相手に熱弁を奮つというのが凄く子供じみてるけど、あたしは、会話の内容に耳を傾けずにはいられなかつた。

「母さんには了解とつとるんやー何か文句あるか？」

「ひでーよ。オレら置いてこいく気が？延光兄ちゃんが、そんな冷酷な奴やなんて知らなんだわ！」

浩一君が箸をブンブン振り回して抗議してる。それを、

「箸は、振り回すものじゃないよ？浩一？」

と、隆が見てるのか見てないのか判らない表情で言つた。

「いつから行くの？」

凜君が、ボソッと訊いた。浩一君と違つて、聞き分けの良いようなどちらかと言つと、隆とよく似た雰囲気を持つてゐる。

「せやな〜おい、隆！ いつこりから行くか、考えたか？」

あ、何？ 隆も行くわけ？ それにしては、隆ってかなり淡白な表情でいる訳で…… あたしは延光だけが行くのかと思ってたからこの話に参加してないと思われる隆は、関係ないと思つていた。

「う～ん。どうじょうか……」

「隆兄ちゃんも行くの？」

言葉を濁らせている隆の言葉に、涼君が割り込んできた。涼君は、活発な延光や、浩一君寄りな感じなのに、どうやら隆に浸透している感じで、意外だった。

「お前な～隆！ 一度決断した限りは、ちゃんと最後まで考えんかい！ お前のその態度つて、

見てるこっちが萎えるわ～」

と延光はお茶碗を叩き下ろす様にテーブルに置いた。

「いやつて改めて見ると、自己中心的で、物事に真正面から向かう延光と、何を思つているのか理解不可能で静かな隆の全く違う個性が此処にあるんだなって思った。でも、決して仲が悪いわけではなくて、それぞれがちゃんと主張はしてると思えるから不思議だ。「はいはい。そこ。延光と、隆？ お静かに。わたくしは、許可しましたが、計画性のある旅をしなさいと言つたでしょ？ まだハッキリしていいのであれば、お互いきちんと話し合いなさい。浩一、凛、涼？ そう言うことだから、お兄ちゃん達は旅行する予定なの。妬くことは無いわ？ あなた達は、わたくしがちゃんと旅行に連れて行つてあげますからね

？」

この家の主人の言葉で、今までのやり取りは静まり返った。流石、主だ。延光も何も文句を垂れずに、今度は違う話題を弟達に振りまく。一家団欒の席はいつやつて過ぎて言つた。

「「めんなさいね？ 葵ちゃん。」こんな寝巻きしか用意できなくて……」

…

お風呂に入つたあたしは、亜希子さんに手渡されたパジャマを着た。あたしの背が小さいから、袖を通してみるとブカブカだった。「いえ。勝手にお邪魔してるのはあたしなんです。それに、服の替えが無いのもあたしが全て悪いのですから、亜希子さんにそんな事言われると、辛いです」

あの大きな鞄を、何故持つてこなかつたのか?かなり悔やまれる。あれには色々とあたしの大好きな衣類が収まっていた。

だから明日、おばさんに理由を話して、岡山駅に取りに行つてこよつと思つてゐる。今そう決断できた。

「もう言つてもらへると、良かつたわ。寝室は、此処しかなければ良い?私と一緒に狭くなるけど……」

亜希子さんの部屋にあたしは間借りすることになった。木造作りのこの家だけど、亜希子さんが色々改良を加えているみたい。質素だけど、モダンに感じる部屋。壁紙なども拘つてるようで、色はアイボリーを基調にしていて亜希子さんの性格を現している様に清潔感があつてあたしは好きだ。

「あたし小さいですから!狭くなんて無いと思ひます。すみません。亜希子さんに迷惑掛けちゃって……」

一人、畳の上に敷いた布団の上に正座してまるで新婚夫婦のような挨拶をしている感じだつた。そう思つてあたしはクスッと笑つた。

「あ、変ですよね?こんな挨拶!」

「そうね!」

亜希子さんも笑つた。きっとあたしと同じ事を考えたのかも知れないな?そんな事を考えてあたしは布団に横になつた。そして電気を消す亜希子さんに言つた。

「亜希子さんは、此処の人なの?え……と、おばさんを『先生』って呼んでたのを聽いたから、判らなくて……」

「氣を悪くするかなと思つたけど、

「先生は、あたしの小学生の時の担任だつたのよ。だから、思わず今でも『先生』って呼んでたりするの。この年じゃ『お母さん』つ

てどうしても言えなくって」

亜希子さんは別段不快な気持ちは無いようだった。ま、この暗闇で表情を読み取ることは出来ないけど。

「葵ちゃん。先生に此処の事大体聴いてるんでしょう？……私は、高校の時に親が離婚してから、グレちゃってね。で、先生に再会してから、ここに住むようになったの」

「亜希子さんが、グレてたんですか？」

布団に一人横になつてこうやつて話してるのを考えると、何だか変な気分。小学生の時の友人とお泊りじつこをした時以来の様な気がした。自分の秘密を打ち明ける。そんな雰囲気だ。夜つてそう言う開放感つて物があるのかも知れないな？なんて思う。

「そう。この私がグレてたなんて思えないかも知れないわね？めちゃくちゃだったの。あの当時は……警察沙汰までやらかしたわ。レディースのヘッドなんてやつてたしね？」

そう言ってくすくす笑つた。あたしはレディースつて物が何なか判らなかつたけど、警察沙汰になるんだから、凄いことしてたんだろうなと思った。

「でもね、先生に再会して、話を聴いて貰つて、今の私は存在するの。もし再会しなかつたら、どん底の人生歩んでたと思つ。つて、葵ちゃんには過激かな？」

そう言って亜希子さんはふふっと笑つた。

「幸せだよ。という感じの笑い方だつた。

「葵ちゃんも、一ヶ月間だけだけど、此処で色々見ていくと良いよ？何かが見つかると思うからね？」

そう言つた亜希子さんは、布団の中にあるあたしの手をギュッと握つてきた。あたしはドキッとしたけど、それが心の触れ合ひの一つだとも言えるようなものだったので、あたしはギュッと握り返した。深い眠りがあたしを包み込む。

明日の朝、あたしはおばさんの話を聴きに行かなければならない。それでも、亜希子さんの話を聞いた今、安心して眠りに就くことが

出来
た。

#7 隆の生い立ち

「」両親と連絡が取れましたよ。葵ちゃん。あなたの思ひよひ出すように。との事でしたよ。だからこの一ヶ月間、思うどおりになりました」

朝起きて、あたしは、一階の奥の部屋にいるはずのおばさんに会いに行つた。そして、まるで書斎のよひなその部屋であたしはその言葉を聴いた。

どうやって、あの両親を納得させたのか？まるで、魔法をかけたかのよひ……かなり疑問だけど、きっと、このおばさんの持ち味があたしの両親を納得させたんだと思ひ。

「怒つてましたか？馬鹿な娘だと……」

「親が、子供を心からそんな風に思う事は無いと思うわ。葵ちゃんが子供を産んで育てたら判ることでしょひけど。確かにこの世の中に馬鹿な大人は沢山居るわ。でも、わたくしは、信じてるの。そんな大人ばかりで成り立つてることは無いって。ね？」

おばさんは少し辛そうに微笑んでそう言った。

「そう、ですね。あ、その……あたし、岡山駅に荷物を取りに行きたいんです。昨日……

「あたしは、昨日岡山駅で自分が仕出かした事を包み隠さず洗いざらしに話した。

「まあ、それは大変ね。わたくしが、駅の方に連絡を入れておきましたね……そうね。お昼はわたくしが行く事はできないから延光か、隆と一緒にお行きなさい。あの子達は岡山のこの地に詳しいからそう言って、微笑んだ。あたしは、この土地には不案内だから、誰かに来て貰うのは確かに心強い。だから、おばさんとの話を終えると、一階の、皆が集まっている談話室兼居間に足を伸ばした。

「よひーおばよひさん！」

延光は歯ブラシを口に含んだままあたしを見てそう声を掛けた。そして、洗面所に駆けて行った。遠くでグルグルガラガラ音を立ててゐるのが聽こえる。暫くすると帰ってきた。

「葵つちの歯ブラシ、昨日渡されんかった？」

「あ、うん。貰つたよ。亜希子さんに……」

なんのこっちゃ？

「歯磨きせえへんの？」

「え？ ご飯が終わつてからするよ？」

ふうん。という風にあたしの顔を見てきた。

「歯磨きつて、起きたらするものやと思つとつたんやけど、ご飯食べたらするものやろか？」

全く訳が判らない……

「どつちでも良いんじやないかしら？」

「あ、そうやな？ 人それぞれつちゅうもんやしな~」

でも納得がいつてないみたいな表情に、納得出来てない気がするのはあたしだけか？

「顔は洗つたん？」

「うん。洗つたよ？」

全く何考えてるのやら？ 延光の思考回路があたしには理解不可能である。でも、こいつって憎めないんだよね？ 意志がハツキリしてるから、嘘つくタイプに見えないし、此処に連れて來たのもこいつだし。ある意味有り難い存在なのかも知れない。

「あ、今日、岡山駅に行きたいんだけど、延光君か、隆君のどちらが自由利く？」

「岡山駅？ オレは大丈夫だけど？ 暫もてあましてるしさ~」

夏休みの宿題はどうしたんだね？ と言いたかつたけど、あたしも同じだし言える訳なし。

「お~い！ 隆？ お前は今日空いてる？ 葵つち岡山駅に用事なんだぞ？」

すると居間の中心に居る隆に向かつて延光は問いかけていた。

「うへん……大丈夫だけど？」

隆は、余り関心がないような返事をした。

ちょっとあたしはそれが気に入らなかつたけど、まあ、そんなものかもね?と思つた。まだあたしはまともに隆とお話したことあるわけでも無いんだし?

「んじゃさ、ご飯食べて、勉強終わつたらお風から行ひいや?あ、そう言えれば、葵つちつて何年生?」

勉強?こいつからその言葉が出てくるとは思えなかつたから、少しだけ見直した。

「え? 中一だけ?」

ま、隠すことも無いからそう応えた。

「ラツキー! オレ、一年生なの。勉強教えて?」

前言撤回。小首を捻りながら可愛く頬もうとするな!あたしは苦笑いしながら『良いよ』と言つた。

「ばか者~! 何でこのくらい解からないの?」

あたしが答えてばかりじゃないか~!」

数学の勉強を見ると言つ事で、あたしは勉強室に通されて、座椅子用の机に向かつている延光の頭を今にも殴りそうな勢いで怒鳴つていた。一年下なら、何も怖い物がなくなつたのも手伝つて、言葉もさばけてしまった。

考えてみれば、男の子といつこう会話をしたこと無かつたな~とは思うけど、何だか延光の場合、出逢いが出逢いなだけに、男の子という印象が無い。何だか気が知れた友人のような感じ?

「数学苦手なんだよ! 素数とか、方程式とか……チンパンカンパンなの! 将来こんな物必要なのか? 足し算や引き算、掛け算、割り算が出来たら十分じゃん!」

つてそんな事言つても、数学勉強してるんだから仕方ない違う! 文句なら文部省に言つてくれ!とも思つたが、あたしだつて数学は苦手なのよね。実際……

「延光君？勉強はちゃんとやらなこと、後で痛い目見るよーと誓つ
事で、このXを、ここで移動させて……」

あたしは、ま、判る範囲の事を教えるしかなかつた訳で？一番苦
労した数学の勉強は終わつた。

丁度その頃には、お昼ご飯の時間になり、あたしは、延光と共にキ
ツチンに向かつた。

食事を終えたあたしは、部屋に戻らうとする延光を捕まえて、
「時間大丈夫？」

と、聞いかけた。

「あ、そうや、岡山駅だつたよな？んじや、隆呼んでくるわ！」「
延光は、ニッと笑つてバタバタ隆を呼びに言つた。

隆は、一分後に延光と一緒にやつて來た。余り浮かない顔をしてい
たので、嫌なら来なくても良いのにと思つたけど、延光が背中を押
してゐるからあたしは何もいう氣がしなくなつた。延光の強引さつて
一体何処から来るのかしら？と思つよ。ホント。

あたし達は、自転車で岡山駅まで行く事になつた。といふか、結
構距離があることを知つた。あたしは、駅員さんから逃れる為に無
我夢中だつたからそんなに遠いと思わなかつた。が、改めて地図を
見てゲッソリしてしまつた。もうこの距離を走るのは勘弁……

「自転車、亜希子さんの借りたから……」

延光が自転車置き場で自転車のチェックをしていると、隆があた
しにボソッといひほした。

「あ……ありがとう」

前籠のあるママチャリという物だつた。でも、綺麗に磨かれてて
あたしはありがたかつた。

隆は、青い自転車で、ギア付きのを用意していた。どうやら私物
のようだつた。

延光は、黄色の昨日あたしと出逢つた時に乗つてたのと同じ物を
用意して、一番先頭を切つて走り出す。

「んじや、行きますか？」

「ううして、のんびりとあたし達は田的の地、岡山駅へと向かつた。景色は流れゆく。東京のあたしの家の周りと変わらない家々。でも、一戸建ての家が多いなーなんて思つた。それに縁も多い。住みやすい環境がここにあるなと思つた。

少し行くと公園が有つた。あたしの大好きな公園より広い気がする。遊具も沢山有るし。でも、あたしの好きなあの公園みたいな富士山は無かつた。滑り台は「ぐく普通。

何て事を考えて、あたしは周りを意識しながら走つた。

あの時は、一気に走つて来たから、周りを見るなんて事が出来なかつた。ううして落ち着いてみると、色々な発見が出来るのに……。そつ思つて今を楽しんでいる自分に気が付き、不思議な気持ちになる。

そこから十分ほどしたところにて、商店街があつた。

「なあ、何か買つて行かんか？おやつの時間に食べたいしな～」
自転車を急停止して、延光があたしの前で止まつた。

「あ、うん。でも、あたしお金持つてないよ~」

「う~ん。そなんや……」

「じゃあ……ボクが買つてあげるよ。のぶちゃんはお小遣い決まつてこるだろうし？」

と、隆が初めて気が利いた言葉を発した。

あたしは、驚いて、

「え？ い、よ……あたしは、食べなくても平氣だし……」
と躊躇つた。

「良いわけは無いでしょ？ 一人だけで食べる訳には行かないもの……」

隆は、ちょっと不機嫌に言つた。あたしにはこの隆の事は本当に判らない。何故、不機嫌な顔したんだろう？

「んじや、決まり！ そこ駄菓子屋さん美味しいの沢山有るから、買つて行こうやないのー！」

…

と言つて、お店の前に自転車を止めると一目散で延光は中に入つていつた。あたしは、少し躊躇つてたけど、隆が延光の後に従つて自転車を止めたので、あたしもそつせざるおえなかつた。

駄菓子屋さんの中は、テレビで見る浅草みたいな下町のお店屋さんみたいな雰囲気だつた。あたしは初めてこういう店に入った。表に並んでいるのは、延光が言つにはガチャガチャと言うカプセルの中に玩具が入つた物だそうだ。中は中で、金平糖や、鳥賊の薄っぺらいお菓子や、丸いガム。色んな大きさの飴や、チョコレートなどが並んでいた。あたしは、暑い夏に備えて、ナイロンに入つたジユースのようなアイスを買つた。延光は、レモンシロップのカップに入ったカキ氷のアイス。隆は、色つきの大きな丸いガムを五個ほど買つた。

後で気がつくことになるが、この暑さで、カップ入りのカキ氷アイスを買つた延光は泣きを見る羽目に合ひのだけどね。

そこから、また岡山駅に向かつた。二十分ほどで、あの商店街に着いた。あと少ししたら、岡山駅。昨日の駅員さんに会うのが少し怖いけど、ここは腹を括るしかない。と言う事に今更気がつくあたしも、ちょっと鈍感だつたかも知れない。なんて反省してみる。そして無事到着。あたしの大好きな鞄を返してもらつべく、岡山駅構内、あの、駅員さんのいる部屋へと足を向けた。

「あ、隆？お前、葵っちに着いて行つてやつてくれへん？オレ、ちと野暮用～」

「え、良いよ。あたし一人で行くからさ～」

つて言つてるそばから、延光は一人で勝手に行動してしまつた。

残されたのは、勿論あたしと、隆。

「あ、隆君？あのさ、あたし一人で大丈夫だから～」

ちょっとさつきの不機嫌顔が頭に焼き付いて忘れられないあたしは、隆にここで待ててもらおうと思って、話し始めたんだけど、

「……ん。じゃあ行こうか？」

と、あたしの前に一度はだかってから、ズンズンと、駅構内と入つて行つた。

「あの、ちょっと！」

あ～ん。よく判らない！この隆が……と思いつつ、あたしも負けじと後を付いていったのである。何だか、立場無いじゃない。あたし……とも考えながら。

駅構内は、人で混み合つていた。あたしは、隆がその波をスルリとすり抜けて行くのを後ろから眺めた。何だか慣れてるとでも言う感じだった。あたしはモタモタと人にぶつかりながら、その波を超えようとして、隆の後を追つた。そして、終にあの場所に辿り着いた。

「此処からは、あたしが行くから！」

でも、隆は、勝手知つたる。と言つ感じで、その部屋の中に入つてしまつた。

「……」

変な子だ。全く……

先に入った隆は、その部屋で、結構年を取つたご年配の駅員さんと仲良く話していた。

「よつ、隆君やないか！久しづりやな～大きくなつて！」

一体どういう繋がりなんだろうとも思つたが、あたしは、今は隆の事より自分の事に集中しようと思い、昨日の侘びも込めて、「済みません。昨日、此処に来た者ですが！荷物を取りに来ました

！」

裏返りそうな声を抑えつつ、頑張つて大きな声で言つた。

「ああ、昨日のお譲ちゃん～」

と対応してくれたのは、あたしの切符が無いと公言したその駅員さんだつた。

「須藤さんから電話で聞きましたよ。切符の件は、もう良いですかね。そうそう、荷物

は此処にちやんと保管してますから、一応署名だけ下さいね?」
と言つて、あたしにその紙を渡した。

「名前……書かないと駄目ですか?」

「うへん。『じめんね。書かないと、この荷物の受け取りがちやんと
なされました。』と言つて證明にならないからね?」

訳ありなのだと聽かされてるんだろう。だから、あたしは、迷つ
たけど、実名の『美空葵』といつ名前を書いた。

「それじゃ、この荷物、ちやんと返したよ? 良い鞄だね。これ?
駅員さんは、自分も欲しいといった感じでそう言つたみたいだつ
た。あたしは、

「そうでしょ? あたしの宝物なの!」

と、笑顔でそう言つておいた。そして、その駅員さんを捕まえて、
あたしはコソッと問うた。今、この部屋の者達が、隆君に田が行つ
ていたから。

「あ、……あの。隆君つて此処の人達と仲が良いんですか?」
すると、駅員さんが、

「え? あ、うん。彼は此処の申し子だから
?」

あたしには意味が判らなかつた。申し子つてなんじょつか? よ
く利用してるとか? でも、JRでしょ? この駅は……ますます隆の
事がわからなくなつた。駅員さん達と、隆が話を終えると、隆はあ
たしの存在を思い出したかのように、

「葵ちゃん? 行こつか?」
と言つた。

「あ、うん……」

あたしは、先に出て行く隆の後に続いた。

「驚いたよ。隆君つて、駅員さん達と仲が良いんだね?」

あたしは、隆の気持ちを察することなく、そう言つた。

「……葵ちゃん。隠す事は別に無いんだけどね。ボクは此処に捨て
られてたんだよ……」

あたしは、その言葉を聞いて、一の句をつげれなかつた。今、何て言つたの？

「産まれて、三ヶ月くらい経つた朝、此処の駅員室の前に捨てられてたんだって……名前だけ書かれてた紙がダンボールに一緒に入つてたそうだよ。ま、今では関係ないことだけね」

捨てられてた？それをまるで何事も無かつたかのような冷静な表情で言つこの隆は、一体どう言つ人間なんだろう？と思つた。

「別に、不思議じや無いだらう？この世の中、そう言つた事件つて多いんだしね？それに、コインロッカーに捨てられてた。と言つよりかはまだ、マシだよね？」

そして、すゝつと先を急ぐよつに隆は歩き出した。

「コインロッカーつてのも酷い話だけど、此処に捨ててゆく親も親だ。その事をどう思つてるんだろう？もう人間なんか信じられないだろうに……」

「ねえ、隆君？人間不信にならなかつた？」

あたしは必死で後を追いかけて、問いただした。何でこんな気持ちになつたのか判らない。こんな風に人のことを詮索するようなことをするなんて……でもあたしにはそう言つ状況が判らないから。「ボクは、恨むより、情けないと思つたから……それに、物心ついた時には、もう、『子羊園』の住人だつたしね。寂しい思いはしなかつた。お母さんや、亜希子さんが居てくれたし……それに、一つだけボクはツイていた事がある。このボクにちゃんと、お金を支払ってくれてる人物が居るつてこと。多分親じやないかなつて思うんだけど。顔を出さないから、もう、会うつもりも無いんだろうし、このまま利用させていただくことがボクにとって、一番良いかなつて感じかな？」

凄くサバけた返事だつた。

こんなに長い事言葉を紡いだ隆を見たのも初めてだ。

「隆君はそれで良いの？会いたくないの？」

その答えに、冗談だらう？つて表情をした。あたしはそれを、ど

う受け止めて良いか判らなかつた。

「そりだよね……育てる資格の無い親だもんね？逢いたくないか…

…」

お金だけ仕送り。それ以外は、音沙汰なし。お金が全てだとあたしは今の今まで思つてた。だけど今は心の問題だと氣付かされた。そして動搖する自分がいる。

お金が全てだと思つていてる自分が、否定しなければならない状況を今、この話の中で作り上げてしまつた。それが尾を引いたから、だんだんこの世の中が虚しく感じられて、そして、愛が欲しいなんて事も考えて、訳が判らなくなつた。だから次のように考えた。

もしかして、世間体が悪いとかそう言つた内容で捨てられたのかも知れない。そこまで考えて、あたしは、隆に話すのを止めた。

あたし達はそんな雰囲気のまま駅構内を出て、そしてお日様がサンサンと照りつける駅前に辿り着いた。

「お～い！隆に葵つち！どう？荷物はちゃんと返して貰えた？」

元気の良い声が周りに響く。今の今迄真面目な話をしていたのに、ガラツと世界が反転した気分だつた。延光が、自転車に跨つて、手を振つている。それを見て、一瞬あたしは、野暮用だと言つて去つていつた延光が、実は、そんな物はなくて、ただ、隆に機会を与えてあげたのかなと思つてしまつた。

頭、悪いけど、こう言う事に敏感なのかも知れない？

そう言えど、岡山駅に行くつて言つた時、迷わず隆を誘つたし。あたしは、延光を見直してしまつた。もしかして、こいつはあたしよりもずっと大人なのかも知れない。人のことを考えられるなんてとても凄いことだよ！

同じ『子羊園』で育つたなら、知つてゐるはずだよね？隆の過去の事も。だつたら、そんな捨てられてた場所に誘うだろ？普通可哀相だからとか、思い出したくも無い場所だろ？とか。そう思つて避けるはず。でも、分かり合えてるから、こうやって誘うんだ。凄すぎるよ。延光！そして、こうしてやつて来て、駅員さんと会話を

する隆も強い！

あたしは、今日一日で、この二人に好意を抱けると思つてしまつた。

「帰りに、岡山城行かね？」

駅のロータリーの所で、あたし達は、おやつの時間と称し、途中駄菓子屋さんで買った、お菓子を袋から取り出した。

あたしのは、もう溶けてしまつて、ただのジュースになつてしまつてたけど、延光よりかまだマシ。延光のは、食べることが出来る状態じゃなくて、カップの中でレモン色の水がチャポンチャポンと鳴っている。仕方ないので、一回家に戻つてから、冷凍庫で冷やし直し。だから、隆のガムを一個ほど貰つて食べていた。

そんな時思い付いたらしく、延光の発言。

「岡山城？」

あたしは、素っ頓狂な声を上げてしまった。

お城なんて見て面白いんだろうか？が本音だった。

「隆、どう？」

「うん。ボクは別に構わないよ？今日は特別用事も無いことだし」無表情にそう言った。

「葵つち、岡山は初めてなんじゃないの？良い所やで此処は！歴史に触れて見るのも一興やと思うー。オレ、詳しいんやで？岡山城は！」そう言って、シラシリと、歴史を語りだした。あたしは、それをふんふんと聞いてみた。

どうやら、岡山城は別名、鳥城。金鳥城。といいうらしい。時代は南北朝時代からその城は有つたとされているらしく、歴史深い。その時の当主は神高直で、その後、戦国時代に金光氏が居城としたらしい。その後また城主が変わり、宇喜多直家がなつたとか。

お城も、名古屋の白鷺城と比べられるらしく、漆黒の板張りで有名で、今年、国にも認められて、日本百名城に選定されたとか。聴いてると、色々有るみたいだけど、行って見ないと良く判らないと思った。

「のぶちやん？そんな説明より、行って見てみるのが一番だと思つよ？」

隆は、小難しい事より、まず見ることを勧めた。うん。あたしもその方が良い。

細々としたことをまだ言つつもりだった延光だつたけど、二人の意見ももつともだと感じたらしく、直ぐにこの場を離れて、岡山城へと自転車で向かったのである。

岡山城は、平地より少し高い所にあった。そして、思つたより小さかつた。

でも、あたしは、この場所に相応しいお城だなと思った。白鷺城のよつに白を基調とした、綺麗なイメージは無いけれど、こいつ言ったお城もまた良いなと思う。

本丸の金の鯱(しゃあい)には驚いたけどね。名古屋の物よりは立派じゃ無いらしいけど、これが有るのとないのとでは、格式はまた違つてくるのではないか？そんな事を考えてあたしは、延光と隆の二人と一緒に色々と見て回つた。

こいついう時間つて今まで取つた事が無くて、ちょっとした、歴史に触れてロマンという物があたしの心に広がつた。

岡山は最高だよ！此処の土地を愛した人達の心が時代を重ねて有るのだと思った。

あたし達が、岡山城を見て回つて、帰宅したのは、夕飯時刻くらいで、丁度良い時間帯だった。

夕飯は、カレーライスだつた。鶏肉のカレーライスというのは初めて食べたけど、牛肉とは違つて、あつさりしてて、肉の厚みもあり、あたしはこれも有りだなと思つた。

そして、今日もまた、延光が四国巡りの話を延々としていた。隆はまたもや無視を決めきつてしまつてゐるけど、あたしは逆に聞き入つていた。どうして、そんなに四国巡りに拘るのか？それが気にな

つて仕方が無かつたからだつた。

「はいはい。延光？ その話は、隆とゆつくりなせい。今は、もつと違つ話をしても下さこね

?
終におばさんは、微笑んで嗜めた。

あたしは聞きたい事が沢山ある。もしかすると、あたしもその旅行に参加したい気分に襲われ始めていたからかも知れないな」と今は思う。そう、この時は、この一人に便乗して四国に行く事になるとは思つてもいなかつたけれど……

夕飯後に、延光は隆と居間でゆつくりこれからのお話を始めた。

あたしも何故かそれに加わることになる。優香ちゃん達と遊ぶのも楽しいんだけど、延光達と話してる方が、歳が近い分何だか落ち着くからかも知れない。

「んじや、取り敢えず、高松までは電車に乗つて行くつてのはどうや？」

延光は、心に描いてる旅行という物があるらしい。で、隆といえば、

「高松までつて、その後はどうするつもり？」

四国は香川県、愛媛県、高知、徳島つてあるんだけど？」

あたしは、四国の名前を全部言えるかといふと、言えない訳で……

「この一人の会話に出てきた県名を覚えるのが精一杯だつた。

「そんな所まで考えてないわ！」とにかく回りたいんや。絶対に！」

「はいはい。のぶちゃんの気持ちは判つた。でも、お小遣いが決められてるでしょ？ それに見合う旅行を考えなくちゃ？」

隆は、行き当たりばつたりの旅行はNGだと言つてゐる。計算できない事はしないタイプらしい。実に堅実的である。

「んじや、お金なくとも、ヒツチハイクすれば良いじゃん？」
うわつと、凄い発言……

「却下！ お母さんにどう説明するつもつ？ 納得してくれる訳がない

でしょ？全く、のぶちやんは、『当たつて砕ける精神』なんだから……

あ、それは隆の言つてることが正しい。ヒッチハイクなんてそんな事して上手く行く訳がない。あたしは、隆の良識に相槌を打つようになって聞いていた。

「そりか～？ 良いやん。バレなきや……それに、オレ達は子供なんや。そんなコトで上手く行かない旅行つて何や？」

でも、延光は引くことが無かった。頑固者だ。あたしは苦笑いでしまつた。

「あ、今笑つたな！ んじや、葵つちはどうすれば良いと思つんや？ 「お小遣いでいける所を考えたら良いじやん？ 延光つて無鉄砲すぎるよ～」

あたしは、自分の事を棚に上げてそう言つた。あたしは今、無一文……なんですか？

「んじや、葵つちも一緒にくれれば良いやん！ お手並みでの見見てみたいね～！」

それには承服しかねた。だって、あたしは無一文。そして、『厄介の身の上ですが？』

「あたしは、無理。無一文ですから～」

何ておどけてはぐらかそうとした。が、延光は許してくれそうも無く、

「隆？ 旅費はお前の方はどうや～？」

まさか、隆？ またお金を出そうなんて言わないよね？ あたしは引き攣つてる顔を戻す事が出来なかつた。

「う～ん。何とかなると思つけど～」

おい！ 男一人と少女の団つてやばいんでないかい！ 突っ込みを入れようとした時、おばさんが、居間にやつて来てあたし達の会話に加わつた。

「あら、旅行に葵ちゃんも行きたい？ なら、いらっしゃりで出すことが出来ますよ？ 優香達の旅行も有るから、どうひりに参加するか？ 考えて

みて。この家を少しの間空けないといけませんしね?」

と、それだけ言って、微笑んで去つていった。これには閉口してしまつた。だつて、一人この家で留守番なんて出来ないじゃないですか?

といつことで、あたしは、どちらか一つの選択に迫られたわけである。

「どうするの? 葵ちゃん?」

寝る時、亜希子さんが真つ暗なこの部屋で問いかけてきた。でも、あたしはその答えを出せずになっている。

「悩んでるの? どうしたいかは、自分で決めることなのだから、こいつは時悩んでおくのも良いわ。優香ちゃん達と、先生と、私と一緒に来るか? それとも、延光君、隆君と一緒に行くか? 一つに一つ。二者择一なのはまだ良い方よ? 色んな道を模索するより、限られている道を選ぶのはまだ簡単」

その言葉に、確かにそうなんだけど……

まず、優香ちゃん達と一緒に行くとする。小さい子達と話を合わせられるほど、あたしは子供慣れしていない。でも、亜希子さんや、おばさんが一緒なら大丈夫かなとも思える。で、延光達の場合、男一人に女のあたし一人。と言う形になる訳で……確かに優香ちゃん達よりは話は合うだろう。がしかし、この歳の女の子が、男の子と一緒に旅行なんて考えられない。修学旅行だって、女の子は男子と一緒にの班になるなんて事はありえないし……言つなれば、どちらも何かが引っ掛かるわけである。

でも、どちらかを選ばなければ、あたしは一人此処でお留守番。そんな大役なんてあたしには無理。

だから、どちらかを選ぶことに自動的になるのだ。
でも選べない。何故だろう?

「あの、亜希子さん達は、いつから旅行に出るんですか?」

そう、期間を訊いてなかつた。その事にハツと気が付き問い合わせ

た。

「月曜からよ。だから、明後日からって事になるわね？」

明後日から？そんな……考える時間がもつと有ると思つてた。なのに、一日？

「どのくらいの期間、旅行する予定なんですか？」

そう。期間も大事。

「そうね。一週間くらいかしら？その辺りは先生が取り仕切つてるの。わたしもハッキリしたこと聞いてなかつたりね」

「そうですか……」

あたしはちょっと頭を抱えてしまつ状況である事にやつと気が付いた。

「ねえ。今の自分に、どちらが必要か？考えてみたらどうかしら？葵ちゃん。悩んでるんでしょうか？」

「え？」

それは勿論、悩んでます……

「時間と言つ物はね。一定方向に時間軸を作つていて、決して平行線を歩く事は出来ない物なのよ。で、後になつて気が付くんだけど、あの時にひしてれば良かつた～なんて事が沢山出てきてね？」

「はい……」

「よくよく考えてみると、必要だつたのは、あつちだつたつて事がよく有る訳なのよ」

「はい……」

「それだけ……」

オチはそれだけ？何て思つてると、隣の布団から寝息が聴こえて来た。

亜希子さんの言いたい事。それを考えた。今日は眠れそうにない。あたしにとつて後々大事になつてくる事。それは、どちらだろうか？

あたしは、一人旅をしたくて此処まで來た訳である。それなのに、お金を盗まれて、旅行が出来ない。あたしは何故一人旅をしたのだろうか？その論点がずれてしまつたら、意味が無いのだ。

あたしは、人との繋がりを絶ちたかった。そう言う場所に訪れて、一人自分と向き合ったかった。でも、自分はその事態に陥つて、他人を求めた。そう。その原点が、延光だった。

そこまで考えて、一人が三人になつてもおかしくは無い。よね？
男とか女とか……そう言うことを考えてしまつたら、人間と言つ物
がわからなくなつてしまふ訳で……

だから、あたしが選ぶべきは、延光達ではなかろうかと思う。人
間として、向き合うべき場所がそこに有るのではなかろうか？
と言う決断があやふやながら出来上がつたような気がする。その
時ふと眠気が襲つた。寝ても大丈夫な気がした。安心して眠れる気
がしたのである。

#9押入れの星

ピチピチといつ鳥の轉る声で田が覚めた。

頭の中はスッキリしていて、何だか昨日の夜悩んだと言つ感覺など微塵も無い。実に爽快な気分だ。

隣に眠っていたはずの亜希子さんは、先に起きたらしく布団はもう、片付けられている。朝御飯のために、亜希子さんは大忙しなのである。そんな事を考えて、今日ハツキリさせなければならぬこと言つ意欲で一杯であった。

「おはようございます～」

あたしは、着替えると直ぐに洗面台に行き顔を洗った。そして、キッチンくと足を伸ばす。

お味噌汁の具を亜希子さんが大鍋に入れている所だった。

「あら、早いのね？葵ちゃん、おはよう～」

亜希子さんは、何も変わりがなかつた。昨日と全く同じように接していく。出逢つて三日目。考えてみれば殆ど初対面なんだけど、昔からあたしと言つ存在を認めているかのような対応。だからまた安心できた。

「昨日の夜、色々考えてみました。初めは寝るコト出来ないくらい悩むのかなって思つてたんですが、亜希子さんの言葉で、自分で選ぶ事が出来ました」

そう言つたあたしの顔は晴れやかだったので、亜希子さんは、

「そう。良かったわね～で、どちらを選んだの？」

きっと、亜希子さんは判つてるのである。訊くまでも無いけど、訊いてみようかしら？と言つ無邪気な微笑をあたしに返してきた。

「はい！延光君達と一緒に旅行しようと思います！」

まるで、これでは宣言だな～なんて返事だったけど、

「そうね。それが良いわ？」

と、亜希子さんは、また子供のような笑顔であたしに笑いかけた。

あたしにはその言葉だけで十分であつた。

「あ、あたし、何か手伝いましょうか？」

早く起きた事だし、あたしも何か手伝いたい気分。亜希子さんに助言して頂いた御礼もあるしね。

「あら、お願ひできるかしら？そうね～今お味噌汁の方終わるから、今冷ましている卵焼きを切つて貰えるかな？あ、包丁氣をつけてね？」

亜希子さんは、助かるわ～と言しながら隣のコンロに水を張った大鍋を置いた。

「何作るんですか？」

あたしは問いかけた。

「ほうれん草の和え物よ。ほうれん草は身体に良いの。茹でてからゴマと和えようかな」と思つてね？」

そうか。そう言えば、此処に来た夕方もほうれん草のおひたし食べたな～なんて思った。この家ではほうれん草は付き物なんだ。何を納得したり。

しかし、亜希子さんって器用なのよね。この歳で、つて言いながら実際の歳はわからないけど……和風の料理を作るのが得意だな～なんて思つ。味付けもあたしの口に合つし。

つてのは、うちの母が洋食派だからそう思つのかも？家で、いついた物は一切作らないな～考えてみたら。カレーとか、ハンバーグとかばかり。というのも、子供のあたしの口に合つようになつて配慮がその背景にあるのかも知れなけれど……実際、母が何を考えて料理を作つてるかなんて知りはしない。

それに、あたしは余りキッチンに立つたことがない。母は手伝つて？なんて事は自分からは言わない。専業主婦だからか？それとも、あたしにキッチンに立たせたくないからなのか？全くと書いて無い。

だから、あたしは学校の授業でしか包丁を扱つたことは無い。で、家庭科の成績も余り芳しい物はなかつたり。唯一、洗い物くらいは完璧に出来るぐら이다。

もし、旅行を終えて、この一ヶ月を終えて、家に戻つたら、母に問い合わせてみようと思う。母の事、そんなに理解出来てない自分にまた一つ課題が出来たな。そんな事を考えてしまった。

「この位の幅で良いですか？」

あたしは、亜希子さんに切つた卵焼きを見せた。

「うん。大丈夫だよ～均等に切れてて良いよ。口に入れるサイズ的にもバツチシ！」

そう言いながら、亜希子さんは、鍋にほうれん草を入れていた。「じゃあ、人数分のお皿に盛り付けてくれる？お皿はその水屋に有るから。小皿で良いわ。そうね、一段目の棚に有るので良いよ。いつも使つてるし」

人数分。つて言葉で一体何人この家にいるのか？考えた。まず大人が一人。子供が、延光に、隆に、優香ちゃんに、鈴音ちゃん。浩二に凜に涼。の九人か。

「九人ですね？」

あたしは指を折つて数えた。そう九人。

「何言つてるのよ～葵ちゃん、自分をちゃんと入れた？」

その言葉に、と自分を忘れていた訳で……

「そうですね。十人ですね？」

あたしは、自分を入れ忘れていることに気が付き、情けなく笑つた。亜希子さんは、自分がいつも作つてる人数を理解してるから、あたしが自分を入れるのを忘れてるんだと思ったんだろう。

「葵ちゃんは、面白い子ね～」

ほうれん草が茹つた頃に亜希子さんはスッとそれを取り出して、クスクスと笑つた。あたしは、へへっと、照れ笑いをした。

「あ、もうこんな時間！葵ちゃん！皆を起こしに行つてくれるかしら？」

七時を回つた頃に、亜希子さんは大変と言つた様子で、取り皿をテーブルに並べているあたしに言った。

「おばさんですか？」

「先生は、もうちゃんと起きていらっしゃるから、子供達の方をお願いするわー」

あ、おばさんはもう起きてるのか。此処にいないと書いた事は？書斎に籠つてゐるのかも知れないなーなんて思つて、一階の優香ちゃん達、ちびっ子の部屋をまず覗きに行つた。

一階と言つ事に関して、子供達は、一階は流石に危険だからと言う配慮なんだろうと思う。

あたしも、小さい頃は一階で寝ていた。一階に部屋を移して貰つたのは、小学生になつた時だつた。自分の部屋が出来るとかなり喜んだ覚えありなんだよねー何て言うのかな？大人の仲間入りつて感じでしょうか？自分の部屋を持てると言つのもまた秘密基地みたいだし。或る意味凄く新鮮ですな。

そんなことを思いながら、優香ちゃん達を起こしに行く事にした。廊下は板間になつていて、壁も木の板で出来ている。均一に窓があつて、外を覗くと、それなりに大きい校庭が広がつていて、一瞬此処は施設じゃなくて、本当の幼稚園校舎つて感じである。あたしはその風景を見ながら廊下の突き当たりの部屋に着いた。

亜希子さんの話だと、ここが優香ちゃん達の寝室になつているらしい。

あたしはこの中を覗いたことがなかつた。

この廊下から見ると、そんなに広い部屋と言つ感じはしない。こんな部屋に五人の子供達が本当に眠つてるのかしら？何て思った。あたしは引き戸をガラッと開けた。

中は、雑魚寝状態で、布団が五人分敷き詰められてて、とても窮屈そうに感じられた。が、皆を起こして、布団を畳み終えると、ガランとした部屋がそこに在つた。幅はそう無い。奥行きがあるんだなと思つた。

「葵お姉ちゃん？おはよー」

欠伸をしながら、零れて来たまだ眠いよー状態の涙を「ゴシゴシ、

パジャマの袖で拭きながら優香ちゃんはにっこり笑いかけてきた。

「おはよつ。優香ちゃん。昨日はちゃんと眠れたかな? 遅くまで起きてたら駄目だよ?」

「うーん。寝たのは早かったと思うんだけど、まだちょっと眠たいな~って感じです~」

あらあら。

「朝御飯、もう出来るから、着替えたら顔洗つておいでよ。皆も、早くね~」

ゾロゾロと動き始めている子供達は、あたしの顔を見て「コソ」と笑った。人懐っこくて皆可愛い。此処の子達は、施設だと知つてもこれだけ明るく生きてられるから不思議である。でも、それは、あたしにとつて、良い傾向としての日常風景。この世も捨てた物じやないと思えるのだ。

「あ、あおいおねえちゃん。じょじょはびづするの?」

あたしが引き戸を閉めようとした時、鈴音ちゃんがあたしの脚に纏わり付いてきて問い合わせた。まるで、子犬のような眼差しで問い合わせられたから、あたしは返事に窮した。だって、あたしは鈴音ちゃんとは違う旅行を選んでしまったのだから。

「……うーんとね。まだ考えてないの。決めたら鈴音ちゃんのお母さんに言つつもりだから。ね?」

と、取り敢えず誤魔化しておいた。だつて、この小さな手を振りほどく事が容易に出来なかつたから。でも、今日皆判つちやうんだよね? あたしは、引き戸を閉めながら頭を下げた。「ごめんね? と、心の中で呴きながら。

さて、あの二人。延光と、隆。

まず、あの子達が起きてるかどうか? 二人は、お互に違う部屋をあてがわれてるらしい。そう言う部屋に土足で入り込むと言つのもちよつと大胆かも何て思つ。これが、姉弟と言つのなら全く問題ないのだけど……一応他人な訳だし? 一人っ子のあたしには免疫がないわけで……つて、旅行の時は? 何て考えて、ちょっと頭を抱

えた。今から免疫付けるべきかも？

ま、先にキッチンに戻つてみようかな？そしたら起きて来てるかも知れないし？と思つてキッチンに戻つた。

しかし、キッチンには亜希子さんの姿しか見受けられない。うむ……やはり行くしかないか！と決心し握りこぶしを作つてあたしは、軋む木の階段を一步ずつ上つた。

階段を曲がつた所で、あたしは、隆と鉢合させた。

「あ、おはよう……今起こしに行く所だつたんだけど……一人で起きたみたいで良かったわ。もう朝食の用意殆ど亜希子さん済ませてるから、支度してね？」

あたしは、ちょっと引き攣つた顔でそう言つたのかも知れない。隆が、ちょっと考えるようなそぶりを見せてクスッと笑つた。此処に来てから、こういう隆の笑顔を直にあたしにしたのが初めてだつたから、あたしはちょっと頬を染めてしまつた。

「な、何か可笑しかつた？」

あたしは、氣を逸らす為につつけんどんな声で膨れて見せた。

「あ、うん。困つてたんだろうな～なんて思つて。ちょっと可笑しくなつただけ。のぶちゃんは多分爆睡してると思うよ？今頃」見抜かれてしまつてたか……と思つて苦笑いしてたんだけど、延

光が今頃爆睡？と言う言葉を反芻してあたしは、

「ちよつと！それつてまさか、寝てなくて、今頃寝ちゃつたつて事……じゃないわよね？」

あたしは、ゲッソリしてしまつた。

「あ、多分そう。のぶちゃん、時々徹夜してるから……この時間に起きてないと言つ事はその可能性大だな～と思う。いつもボクより早く起きて起こしてくれてたりするし？」

てことは……隆の言つとおり、今頃徹夜疲れで寝てるつてことか

……
「あ、起こすのだったら、氣をつけてね？かなり寝起き悪いから。

……
「あ、起こすのだったら、氣をつけてね？かなり寝起き悪いから。

のぶちゃん

あたしは、その言葉を聴いて、げつそりしてしまった。どう起こそば良いんだろうか？

「何か良い方法無いかなあ～？」
隆なら何か知ってるかも？何て思つてあたしは縋りたい気持ちだつた。

「それじゃあ……一緒に行こうかな？ボクも？」

と言つてくれて、あたしはホッと息がつけた気がする。
階段を上りきつた所を右に折れ、一部屋目が延光の部屋だった。
一体どういう内装なんだろう？何て事を考えて、男の子らしく汚れてるんだろうな～何てこと思いつつ、隆が開けた引き戸の先を拝んだ。

でも中は至つて整つていた。で、注目すべきなのは、壁や天井に貼られた無数の天体？の様なポスター。机の前には、天体写真が沢山、コルクボードにピンで留められていた。

延光は天体マニアなのかしら？そう思わせるだけの部屋だった。そして、あたしは、何処に延光がいるのか？それを捜した。部屋にはいなかつたからだ。

「ねえ、のぶちゃん。起きてよ～」

あたしは、隆が何処に向かつて言つてるのか判らなくて、一瞬この部屋を見回し、そして、隆の視線の先みた。

まさか……そう、隆は、閉められた押入れに向かつて声を発していたのである。

「ちょ……ちょっと、隆君？もしかして……延光君て、押入れの中で寝ているの？」

恐れ恐れ問い合わせた。在り得ないよ！

「うん。そうだよ。のぶちゃんは、徹夜した時は大体押入れで寝てる

る

「何で！」

何でと言われても……判らない。みたいな隆の表情だったが、

「多分、のぶちゃんは押入れが、好きなんだと思つ」「は？」

訳が判りません。つて。隆ももつと、不思議に思えよー思わず突つ込みを入れたくなつたり。

でも次の瞬間、

「のぶちゃん開けるよ~」

と、隆は押入れの襖をそつと開いた。何……これは？

ほんの少し開いた時点で、光が中から溢れ出た。そして、収まる。何があつたのか、あたしは不思議で仕方なかつた。ので、襖の中を思いつきり覗き込んだ。異様な好奇心と言う物だと自分でも思う。

「……眠い。あつと！」

延光が、あたしの顔が目の前にあつたので驚いたんだろう。ガバツと起き上がり、頭を天井にぶつけ抱え込んで落ち着いた。

あたしも、初め何が起きたのか、判らなかつたけど、ふと気がついて、バツと後ろに引き下がつた。

「起きた？ のぶちゃん？」

頭大丈夫？とは訊かずに、隆は笑いを押し殺して起きたかどうか？を問い合わせた。

「これで起きんかつたら、どんな人間や！ 隆～の、ボケ～！」

つて、あたしを非難している訳ではなさそつた。あたしは、隆の影から、

「ごめん……大丈夫？」

つて問い合わせた。

「あ、うん。平氣や……別に葵つちが悪い訳や無いから、気にすんなや？」

「ほう、ほう

隆が茶々を入れてきた。が、あたしは、さつきの光が何なのか？

それに心が揺れてて、思わず問いかけてしまつた。

「ねえ、ねえ？ さつき、光が中から溢れたんだけどー何？」

そうすると、ああ、と言う表情をして、

「これが？」

と何だか凸凹した球体の…… そうそ、言つなれば地球儀みたいな物体を、押入れの奥から取り出して、延光があたしに手渡した。

「何？これ……」

あたしは、間の抜けた声で訊いた。

「ああ、これが何かわからんないんや？「これはな……あ、そいや、隆も一緒に中に入りいや？勿論葵つちも！」

と言う事で、説明は抜き！ みたいな表情で延光は、狭い押入れにあたしの手を引き、引きずり込んだ。全く強引で、マイペースな奴だなと思う。

中に隆も入った所で、襖を閉めた。暗いなーと思つたけど、暫くして延光がさつきの地球儀みたいなもののスイッチを入れた。その瞬間、あたしは幻想的な気分に襲われた。

「な？判つたか？プラネタリウムやねん！」

狭い空間に、キラキラと光が散りばめられていた。何て言うんだろう？ こんな星空を見た事なんて無いあたしには、凄く新鮮で、無限な可能性を秘めた空間を感じた。

「綺麗……」

「そやろ？これ、玩具みたいな物やけど、オレ、頑張つて買つたらや。此処つてそう田舎と言う訳や無いしな。こんな星空拝めんやん？ 気休めやけど、これで満足やつたり」

そう言って、延光は狭い押入れの天井に映つた星空を眺めていた。「のぶちゃん。押入れじゃなくても、部屋に暗幕つけてそれ使つたら良いのに？」

あたしは、そんな事を考へていた隆に、確かに広い空間の方が良いんじやないかって、思った。

「それも考えたんやけど、押入れの方が、秘密もつとる様で良いやん？ 秘密基地みたいでな？」

それも一理有る。あたしは思わず自分の事のよつて眉間に皺を寄せてムムムと唸つた。

「さて、あんま寝れんかったけど、そろそろ起きるとするわ。明日には、旅行開始やしな? その事考えてたら、寝れんかったわ……」

その言葉を聴いたあたしは、先の考え方をしてて、うつかり言葉を見落とすところだった。

「…………？」と、待つて？延光君達って、明日から行くのー！」

確かに亜希子さん達一行は、明日から出発って事だつたけど、延光達が明日つてのは聴いてなかつた。それに、どうするつて話が出たのは、少なくとも一日前……

かなり焦つてあたしが問い合わせたので、

「葵ちゃんには、話さなかつた？かな……亜希子さん達と同日同じ事にしたんだよ」

旅行に出かけると、延光や隆は旅行支度を始めてるつて事？

「いつまで？つて言つのは、延光がまだ考えてないから、判らないんだけれどね？」

つて落ち着いている隆も隆だよ……

延光の事だから、とんでもない事考えて、その果ての旅行つて事になるんじやないの？あたしの背中に冷ややかな汗が伝つた。

「あ、そう言えば、葵つちはどつちの方に行くん？もう考え終えたん？」

ええ。考えましたともさ。でも、かなり不安だよ……あんたと一緒に言うのがさー、ブチブチ言いたくなつたけど、

「延光君達と一緒に行く事にした」とハツキリ言つた。

「…………けど、ちよつと不安だよ。けやんと旅行出来るつて、あたしが言える立場じや無いけどね？」

一度失敗してますから、あたしは……

「そつか。オレらと一緒にちゅうことかい。歓迎するし、無茶な事は……」

で、止まつた。何が言いたいんだ？

「ま、何とかなると思うから、葵ちゃんは安心してて？」
隆が言い添えた。不安材料は残るけど、この隆が一緒なら、旅行
は無事終えるか？と、心のどこかで心配事有りのあたしは、自分
を納得させておいた。

「そう。判つたわ。それでは、延光達と一緒にいくのね？葵ちゃんは」

朝食を食べ終わつたあたしは、亜希子さんの片付けを手伝い終わり、おばさんの書斎に向かつた。そして、明日からの旅行の自分の身の振り方を伝えたのである。

おさんは、特に注意をする事はなかつた。逆に、

「あの子達となら、葵ちゃんの探してるもののが見つかると思うわ？」
と言つて、微笑んだ。何故、延光と隆との旅行の方を選んだ事が、あたしの探すべき物が見つかると言うんだろうか？なんて不思議に思いもしたけど、自分もやはり、同年齢の子達との方が、馬が合つし、それに話も合つ。ま、延光とは、悪役と正義の味方の意見が食い違つたかも知れないけれどもね？

でも、話す事は沢山あるだろ？し、同じ物を見て、共感できる環境づくりってのは必要だと思う。

例えば、延光の部屋の秘密の部屋。

延光にあんな口マンを感じる趣向をする所がある所なんか見て、実際共感できたし。隆は、あたしにとつて、信頼できる人間であり。時々延光に毒されてる所有するなつて思つたりするけど……でも、二人とも良い奴である事は、間違いない。

「それでは、これ。葵ちゃんの旅費ですよ。余り、うちの施設も余裕が無いものだから、大した金額にならないけど。使ってね？延光と同じだけ入れておいたから」

と、一通の茶封筒を渡された。中には、福沢さんが十枚入つていた。

「え？でも……」

あたしは、これを手渡されて、焦つてしまつた。が、

「東京に戻つたら、返してくれて良いから。気にしないで使って？」

と、おばさんは、別段何事も無いかのように笑つた。

「おばさん。此処の住所教えてください！必ずお返しします！書留で送りますから！」

あたしは、自分を信用してお金を貸してくれたんだとそう判断し、言葉を返した。

「ええ。待つてるわ。このメモ帳に、書いておいてあげるから、無事自分の旅を終えて帰つてからしゃいーそれをわたくしは祈つているわ？」

「ありがとうございます！」

あたしは、おばさんに感謝の気持ちを込めて深々と一礼し、書斎を出た。

「葵つち～！旅行の用意は出来たんか～？」

あたしが書斎を出て、一階に下りた時、そんな呼び声が響いた。どうやら、延光があたしを捜しているらしい。あたしは何だう？と、急いでその声の方へと小走りで駆けた。

延光は、自転車置き場に居た。隆もそこに居た。

「葵つち？自転車、これ使えや？」

と、指差したのは、ちょっと古い型のギア付き自転車だった。

「これって、何処から？」

「奥の倉庫探してたら出てきたんや。オレも、このギア付き五足の自転車使つつもりなんよ。だから、葵つちも使えや？」

つて、それに跨りつとしたりが、ママチャリに慣れてるから、こう言つたギア付きの自転車つて跨るのが難しくて、片足付いてよろけた。

「女の子乗りしても駄目だよ。」いつまでて、後ろから前に脚を回す感じで……

と、隆が実際解説してくれた。

うむむ。これはスカートつて訳には行かないな……つて思った。この旅は、ジーンズか短パンしか着れそうにないや。

ちょっとと海辺でスカートが靡いてる自分の姿とか思い浮かべたが、全て煙のようになってしまった。

「ま、もう一回乗つてみろや？練習しどき？自転車で、瀬戸大橋付近まで出るんやから！」

「ん？今、何と言つたかね？延光！

「ちょっと待つて！列車での移動じやないの？隆君ー延光君が何を言つてゐるのか？あたし理解不可能なんだけど…」

あたしは、グラグラする頭をどうにかしたかった。何を言つてゐんだ？この男は！

「うん。どうしても、四国四県回りたいから、予算が足りないんだつて。だから、ヒッチハイクすることにした

ヒッチハイクー！だとー！

足先まで響くくらい頭を殴られた気がした。

「隆君ー止めてよ！延光君を…」

「てか、有り得ないから！」

「だつてさ。諦めなよ、のぶちゃん？僕も無謀だと思つよ？」

隆は、だから言つたでしょ？つて表情で延光を見た。が、延光は引かなかつた。

「んじゃ、他に何か良い方法有るか？無いやろ？」

と言つ事で、また話が行き詰つた。

「あのさ、何で四国なの？他に近場でも良いじゃんー海渡らないで、済む所とかさ？」

あたしは、何故こんなに延光が四国に拘るのか？それが理解出来なかつた。

「四国四十八箇所。お遍路さん回りしたいんよ？」

と、言つてニチヤつと笑つた。どうもそれは何かを隠す口実のような嘘のよつに感じられて、あたしは疑いの目で見た。

「まあまあ、落ち着いてお一人さん？」

隆が慌てて、あたしと延光の間にに入った。

「葵ちゃん？祐ちゃんは四国に行かなきゃならないんだよ？どうし

てもね？」

と耳打ちした。

「取り敢えず、ヒッチハイクは無しにしないかな？堅実的では無いとボクも思つ。海を渡るのには、橋。または……」「

と言つて、そこで区切れた。

「そつか、船つて手が有るんか！」

「そう言つ」と…

と言つて、隆は指を一本立てた。

もしかして、隆はこの事に気がついていたのか？とあたしは薄々感じたが、どうしてもっと早くに言ってあげなかつたんだろう？と腑に落ちない。ま、あたしはこっちの方がまだ健全だと思って何も言わずにいたけどね？

「んじゃ、近場の港探さんとな？何処か在つたか？」

自転車置き場の内の一つのサドルに一枚の地図が載せてあつた。それを延光は手に取ると、地面に置いておつぴろげてしまった。

「あ、宇野港があるな。」これで、高松まで行けるんか？この航路使えたなら、乗せてもらうんも良いし？どうやろ？

田ざとく見つけた延光は、勇気ランランな感じでそう言つた。

「問い合わせてみたら？」「

隆は、そつけなく言つた。さつき底かばつたのに、今度はそんなにあつけなく突き放す？あたしはこの一人のちぐはぐな所が気になつてしまつた。

でも、それには何か理由があるはずだとも思つ。さつきあたしに囁いた、『四国に行かなきゃいけない』と言つ理由。そこに、延光という人物に係わる何かが有る訳だ。でも、その旅に同行しても良いつてこと？まあ、隆も行くんだから、それに關して隠し立てをする必要は無いつてことよね？

「そうするー！」

延光は、一目散で家の中に飛び込んでいった。

「ねえ、隆君……四国に何があるの？」

あたしは、今この場で聴きたかった。今なら延光は居ない。機会は今しかないと思う。

「追々、判ると思うよ？ ただね、のぶちゃんの前では余り四国を非難するようなことは言わないでおいてくれない？」

事実は結局判らずじまい。でも、延光にとって、四国は大切な場所なのだと判つた。それだけでも、良いよね？ 何て考えてる自分がいた。

十分後位に、延光は戻ってきた。

「一百円で行けるやん！ 自転車は、別に三百四十円掛かるみたいやけど！」

「どうやら、何とかなるらしい。それも、一時間弱で着くなんて凄いことだ。

「後は、時間やな～何ていうか、便は結構有るみたいなんやけど、こつちは自転車で宇野港まで行くわけやろ？ 途中どういつ事になるか判らんしな～」

なんて、延光らしくない言葉を吐きやがる。言いだしつぺが、張り切らんでどうするよ？

「それだけ判れば何とかなるよ。のぶちゃん？ その後は、やるだけやってだから、大丈夫だと思うからね？」

ああ、今度は隆の優しい言葉ね。呆れるわよ。何て思つてた、あたしは浅はかだった。その時は……

旅費が浮いて、後は四国一周に掛かる食事代や、宿代。

結構な金額の旅費を持つてるわけで……次は気をつけなければならない。もう、失う訳にはいかないのだから。そう思つと、あたしは、旅費を、色々な所に隠し持つことにしようと思い立つた。

「夕食も終えて、皆、明日からの旅行に心躍ってるね？」

あたしは、朝の自転車練習を終えて、少しだけ疲れ気味だったが、隆のその言葉に、確かに皆ウキウキしてるのが判つた。優香ちゃん

なんて小躍りしながら足が地に着いてないような感じ。開放感一杯である。

あたしも、一人旅をしようと一夜野宿してから、此処にたどり着くまでは、端から見るとあんな感じだったかも知れないな、なんて思う。で、つけ込まれた訳だ。あのおじさん……

気をつけよう。何処で何が起ころるか判らないのだ。旅行つて物は、なんて考えるにちょっと悲観的か？思わず苦笑いした。

「隆君達は、荷造り終わつたの？」

あたしは、余りバタバタしていない隆に問いかけた。
「うん。もう、支度は昨日終わらせたから。ただ、のぶちゃんは未だみたいだけね？」

用意周到！流石、隆つて感じ。

「手伝つてあげないの？」

「うん。のぶちゃんは、自分でしたがるだろうから。手伝わなくても大丈夫」

心配をしてる風ではない。また、突き放してる風でもない。全く何を考えてるのやら？

「んじゃ、あたしも、少ない荷物を纏めて来るね。色々女の子は大変なのよ？」

クスクスと笑つて、あたしは居間を出た。

二階に上つたあたしは、早速お父さんに買つて貰つた鞄の中の服を整理した。タンクトップと、Tシャツ、ジーパンと半ズボン関連を全て取り出して、綺麗に畳み直した。

後は、ショルダーバッグの中身も必要な物とそうでない物との仕分けをした。通帳なんかは必要ないし、お財布は取られてしまつたので、亜希子さんにがま口財布三個と、普通の財布を貸してもらつて、お札を入れ、色んな所に別けた。

一つにしてしまつたら、それこそ落としたら最悪。なので、ショルダーの中身は、一万円しか入つてない状態。これでも結構な額だ

と思つたけど、今はそれも仕方が無い。福沢さんが一枚ペロリと入つてゐる状態だ。

「もう、旅行の支度は出来たの？」

やつと片付いた所で、亜希子さんが入ってきた。

「はい。今度は完璧です！」

まるで、一度と失敗しないように気を付けました。みたいな良い回しだなと自分で言つた後に気がついた。

「そう。良かつたわ。あ、お風呂沸いてるから、入つてらっしゃいな。延光君達との旅行でゆつくりお風呂が入れるかどうか？な旅行になりそうですものね？」

亜希子さんは、これから荷造りを始める所のようだつた。でも、きちんと整理されたこの部屋を見たら、亜希子さんの用意なんて直ぐ出来てしまふだらうな~なんて思う。

「じゃあ、あたしお風呂借りてきます！」

ゆつくりと、あたしは腰を上げて、此処であつらつて貰つたパジャマと、下着関連を持ちお風呂へ向かった。

ゆつくりのんびり入るお風呂は、今日から一週間ほど出来なくなるのか~?何て思つて、髪や身体を洗い流した後、湯船に浸かつた。決して広くはないお風呂。換気扇の無いお風呂。ジエットバスでは無いお風呂。血圧とは全く違つてタイル張りのお風呂。初めは驚いたけど、こつやつて入つてみると、凄く落ち着く。ごく普通のお風呂つてのも良いものだ。

湯気で雲つて、設えているガラスは自分の顔も映し出れない。それを、手で拭つて露を取る。髪。切つてきて正解だつた。なんてことを思つ。

実の所、夏休みが始まつて、この旅行を切つ掛けに、長い腰まで有る黒くて艶のある白慢の髪を切り落としてきた。

只でさえ、子供体系なのに、髪の毛を切つて、より幼くなつた。ところが、もう、少年と同じじだ。

此処に来てから、陽に晒される事もあって、顔が小麦色に変色してきている。

きっと、明日からの旅でもっと色が黒くなるんだろうな～なんて考えると、夏休み明けには誰だか判らない別の誰か?になってる事だろう何て考えておかしかった。

まあ、それも良いか?ひと夏の、良い経験と言う物だ。

あたしは、湯船から出ると、一流しし、少し日焼けした少しパサついた髪をタオルで巻くと、気持ちを切り替えて、お風呂を出た。そして旅行当日を迎える事となる。

#1-1 こわい出発！

朝、五時起床。

昨日、延光達と考えたプリンで行くと、この時間に起きて、六時に出発と言う寸法だった。

「あ、おはよー」

洗面台には、隆が居た。あたしも、

「おはよー」

と、普通に返した。心は旅行気分で盛り上がってるんだけど、それを悟られるのもちょっと恥ずかしいので止めておいた。隆はいつも通りだから、それが無難だ。

「のぶちゃん、見かけた？」

あたしと入れ替わる時に、隆は問い合わせてきた。でもあたしは、まだ延光の顔を見てなかつたので、

「つうん？ 見かけてないけど？」

否定の言葉を返した。

「まだ寝ているのかな～？ ちょっと、見てくるね」

隆は、のんびりした口調で、延光の部屋へ行くと言つて、この場から去つた。

あたしは、昨日徹夜状態だったみたいだから、まだ寝てる感じがないかしら？ 何て思いながら、歯磨きをした。

でも、どうやら違つたようであつた。隆君が、バタバタと、一階から下りてきたのである。

「のぶちゃんが、部屋にいないんだ！」

「は？」

と言つ事で、あたしにとつての始まりの旅行は、延光捜しから始まつたのである。

まず、家の敷地内を隆と手分けして捜した。

隆は、建物内を。あたしは、校庭や自転車置き場を捜した。が、

しかし、延光の姿は無かつた。

「居た？」

「ううん。居ないよ……何処行つたんだろ？……まさか、先に出発したなんてことは無いよね？」

落ち合つた玄関であたしと隆は、お互いの状況を話し合つた。

「まさか……延光君が先に出るなんて事ないでしょ？家の中に居なつて事は、どこかに出掛けることになるよね？」

この旅行の首謀者が、そんな事をする訳無いと思われる。それに、あの延光が、だ。

「じゃあ、自転車置き場、もう一度行つてみよう。出掛けるなら、自転車置き場に戻つてくる可能性あるからね？」

あたしは、姿を見たわけじゃなかつたから、自転車が有るかどうかまでは見ていない。なのでそう提案した。

自転車置き場にあたし達は何も喋ることなく、揃つてもう一度見に行つた。

「あ、のぶちゃんのいつも使つてる自転車が無い……」

着いて隆は直ぐに気がついた。あたしは、どれがどれやら……これだけ沢山有ると判らなかつたので、見分けられる隆には違和感があるのだろう。

「てことは、何処かに出掛けてるつてことだね？こんな朝にビリに行つてゐるのかしら？」

その疑問に、隆が応えてくれると思つてた頃に、延光が、自転車を押して建物の側から顔を覗かせたのである。

「お！おはようさん！元気か？」

延光は、あたし達が捜し回つてたこと等全く知らないので、いつもの調子でにこやかに笑いながら、自転車を押して來た。

「ちょっと、延光君！何処行つてたのよ！心配したんだが……つて何？その大荷物！」

あたしは非難するつもりでそう言い掛けた言葉が、目の前の大荷物に目が行きすっかり忘れ去つた。

「のぶちゃん……もしかして、廃材置き場にでも行つてきたの？」

何、それ？廃材置き場？

「」名答！ん。丁度、手のひらなキャンプにでも使えるテント見つけ

てきたから、持つて行こうかなと思つてな」

かなりな」「満悦状態ですけど、それつて、かなり大変じゃ無いの？何てことを考えて、

「そんな物を、自転車の何処に積むつもりよー無理でしょ？」

あたしは、有り得ないから！つて言つてしまつて、
「三人で、別けて積めば良いやん？そしたら、そんなに荷物になら
へんで？」

いともあつさり返してくれやがつた。しかも、この荷物を三等分
？ちよい待ちやがれ！延光の勝手さにも呆れてしまつた。

「ちょっと、延光君！それを三等分にしたら、あたしの自転車に重
りが付くって事だよね？」

あたし嫌だよ！それ！」

はつきり言つてやらないと、ここは絶対譲らないだろ！と思つ
たからあたしは言つてやつた。

「のぶちゃん。確かに、葵ちゃんの言つ事は正しいと思つよ？勝手
に持つてきて、皆で持つてだなんて虫が良すぎるよ……」

隆言つてやれ！あたしは心中でそう呴いた。が、

「ボクとのぶちゃんで持つと言つ事で良いじゃない？それで決定と
言つ事で。ところで、のぶちゃん。いつから起きて廃材置き場に行
つてたの？……」

あれ？つてことは、あたし一人が持たないつて事？隆は延光の方
を持つつて事？何だか仲間外れみたいじゃ無いか……そう思つたけ
ど、今自分が発した言葉を引っ込める事なんて出来無いし、もう、
なるようになれて事で、あたしは一人の会話の後姿に着いて歩く
だけになつてしまつた。

「そんでは、いってきま～す！」

あたし達三人は、おばさん達より先に旅立つ時間になつたので、まだ休んでいる子達には挨拶できなかつたけど、行つて来ますと書いて家を出た。

「気をつけてね？」

そう言つて送り出してくれたのは、亜希子さんだつた。

昨日の夕飯の残りを朝御飯として用意してくれたから、亜希子さんは本当に感謝！ 実の所を言つと、朝飯抜き。覚悟の旅立ちだつたのである。でも、腹が減つては戦は出来ぬ！ ですからね～なんて言葉が頭の中に浮かんでたり……ありがたく頂戴致しました。

さて、自転車置き場に到着。天候良好！ 全く良い感じの滑り出しだ。

「おい！ 喝入れていこやー！」

「何？ その喝つて？」

突然の延光の申し出に、あたしは首を捻つた。

「はいはい、手を出して！」

延光は、あたしの質問なんか無視して、腕を掴んでそう言つと、三人が輪を描くよつになつた形になつた。これつて円陣つてやつですか？ あたしは、この体育会系という言葉に並ぶよつな事をやらされるとは思つてなかつたので、一瞬身を引きそつになつたが、

「葵つちー逃げんなよ？」

て、肩を掴まれて、結局、

「レツツ・トライ！ ネバー・ギブアップ！」

「おー！」

延光の言葉に乗せられて、掛け声掛けちやつてた。全く乗せるの上手いやこいつは！

各々の自転車に荷物を載せ。そして、跨ると、取り敢えず、延光を先頭に自転車は出発した。あたしは隆の後ろを着いて行く形になる。そして、昨日延光が地図を見て考えたルートとして、岡山駅を取り敢えず目指すと言つてた事を思い出した。

そこから、宇野港とやらを目指す事になる。

地図上で見た限りでは、一十キロ以上あるとみなされる。

「は～」

ま、体力無しって訳でも無い。まだ若いあたしが溜息ついてらんないんだけどね？そこで思わず苦笑いしてしまった。

景色はドンドン過ぎていく。流れ去る時間が止められないように、まるで、景色も止める事が出来ないので無かるうか？そんな事を思つ。

帰ってきたら、この街並みの何処かが変わってしまったのではないか？常に変わらないものなんて無い。緑の木の枝から零れてるキラキラ光つた光を感じながら、あたしは過ぎ去る光景を目に焼き付けていた。

岡山駅まで南下した頃にはもう、陽も完全に昇っていた。あたしは、此処から先、どんな事が待つてるのであろうか？なんてちよつとワクワクする気持ちを抑えて、隆の後ろを走つた。

そして、左手に岡山城を、遠めで見ながら自転車を漕ぐ。ああ、あの場所に一度訪れたんだなあ～なんて感慨も有つたりする。

街中のゴチャゴチャした道をあたしと、延光、隆は時々信号を気にしながら走つた。

延光はこう言いながら信号待ちをしていた。

「一号線を出てから、三十号線に入ろうと思つんやけど？それでええか？」

岡山の地図を片手に持ち田でその地図を追つ。

「それで良いと思つけど？のぶちゃんが良いと思つんなら？」

隆はそつけなく言つた。あたしには訊こうとはしなかつた。そりやそうだ。岡山っ子である延光と、隆はまだ土地勘というものがある。しかしあたしはどうだ？全く無い。だって、あたしはこの土地の人間ではない。二人ともそれを良く知つてゐるから、問い合わせないのだろうと思つた矢先、

「葵つちは着いてくるだけでええよ。道なら何とかこのオレが把握

してるんやからな」

仲間外れをしてる気がしたのであらつか？一言添えてきた。

「あてにしてるから。宜しくー。」

あたしは、気にしてないよ。と言つた所で信号が青に変わつた。

その瞬間また自転車を走らせ始めた。

黙々と走る。景色は街中からちょっと離れたところを走つてるのが感覚的に判つてきた。

建物の様子が変わつてきたから。

もう、陽は完全に昇りきり、背中も腕も汗だく。気持ちが悪いよーなんて言葉が口から漏れ出てきそうだつた。真夏の陽差しが強い。こんな事なら、薬局で陽焼き止めクリームの一本でも買って来るべきだったか？なんて思う。

あたしは、焼けると赤くならず、直ぐに黒く変色する肌の持ち主だ。塗つても意味無いかも知れないけれど、女子として気にならない訳もなかつた。昨日お風呂に入つた時それも当たり前の事として考えていたんだけど、実際この陽射しは脅威だつた。

あれからどれだけ走つたんだろう？腕時計は持ち合わせていない。時間といつもの感覚が判別できなくなつてきた。今は宇野港までの道のりのどの辺りを走つてるんであろうか？そんなことが頭を過ぎり始めた。

と言う事は、もう、走りたくないと言つ事になる……まあ、あたしは長距離より短距離向きの性格だ。だからちょっと弱音を吐きたくなつてきていたのだろう。

でも、前を走る荷物の多い延光と、隆はスイスイとペダルを踏んでいる。それを見ると負けたくないと言つ気持ちも出てきた。

あたしつて意外に負けず嫌いだつたんだなつてこの時やつと自覺したりして。そう思つて笑いが込み上り、そして、あいつらに続く勢いでペダルを思いつきり踏み込んだ。

景色はどんどん変わっていく。変わらないのは、頭上有る青い空

だけ。

そして、潮の香が鼻につく頃、あたしはやつと海が近いことを語ったのである。

児島半島。その山並みを見ることができる場所に、宇野港は存在した。

潮の香りがあたしの心を驚づかみ。そして、東京では見たことの無い海が田の前に広がっていた。

「瀬戸内海を見るのは、初めてやないんか？葵つちは～？」

そう、初めてなのである。

それに、海に来る事なんて、どれだけ振りなのだろうか？幼稚園生の時、両親に連れ添つてもらつて、太平洋側の湘南の海に行つた事くらいしか記憶に無い。友人と行く事もなかつた。海なんて、映像や、印刷物の中の物としか理解して無かつた。

「キラキラしてて、綺麗だね～」

沖縄や、ハワイなどの南国の海に比べたら、綺麗だね。なんて到底思えないものだつた。どう考へても、一般にあるだろう海の碧さではなかろうか？それに、珊瑚礁も無い、平凡な港の海。だけど、今のおたしの瞳には、これほど無いくらい、眩いくらい綺麗な物に映つた。

「そう思つてもらえて嬉しいよ？」

隆は、あたしの顔を見て、こじやかにそう言つた。この海を見せたかったんだとでも良いたそうな、表情だつた。それがこそばゆくて、あたしは、ちょっとはにかんだ笑顔で隆を見た。そんな時、

「さて、そろそろ時間がくるやん。切符買つて用意せなあかんわ～

！」

のんびりしてる場合では無いと慌てて、この港のフロリー乗り場へと、自転車を移動し始める。二十八分おきの航行のことだから慌てる事も無いはずなのだけど……その辺りは延光らしい計画性の無い発言だ。

それがあたしはもう笑つて促した。だつて、それがこの旅の醍醐味だと知つてしまつたからである。一人旅では出来ない面白さ。そして、計画性の無い旅。どちらも、今あたしは体験している。それも、自分の足で培つている物だ。移動しながらあたしはそれを、じつくりと噛み締めたのである。

船内は、一時間旅行の間に必要な物しか置かれてなかつた。と言つても、船旅に必要なものが何なのか?なんて知りもしなかつた訳だけど。色々探索して気付くこともある。

まつたりとくつろげる船内と、ちよつと遊ぶ」との出来るゲーム機の置かれている船内。

そして、香川で有名な讃岐うどん。それを食べる事が出来ると言う船内は、この船の売りなのではなかろうか?

ちよつと食べたいなあなんて思つたけど、やはり、ここで使うと、お金の無駄使いになるのではないか?と思つて我慢しようと思つたが、

「なあ、葵つち?食べてかん?」

何て延光は平氣な顔をして言つた。

「それ、良いと思つ。食べよつ食べよつ」

隆までそう言つた。

「でも……」

あたしは、まだ考へてゐる訳である。だつて、これから旅を考えると、ここでそんなお金使う事が出来るのか心配だつたから。

「お腹減つたやん!此処で昼飯や!讃岐うどんやで?食べな損々!」つて言いながら、すでに注文している延光。そんな時しり込みしているあたしに隆が、あたしの背中を押してきた。

「何なら、僕が出そつか?」

なんてボソッと言つて來た。それは勘弁!だつたので、付き合つた。

讃岐うどん。初めて食べた感想は、コシが有つて、歯^いたえが良

「うどん。それだつた。

汁もあつさりしてて、スルスルと喉ごしも良い。お腹の減つたあたしの胃袋はうどんで満たされ、心地良い満腹感という物を味わうことが出来たのである。

その後もあたし達は船内を歩き回つた。そして見尽くした時、「なあ、ゲームしてもええ?」

全部見終えた所で、いきなり延光は提案してきた。

「のぶちゃん……お金の無駄使いはしない方が後々良いよ?それより、外に行こうよ!瀬戸大橋とか鬼ヶ島とか見たいよ!」

なんてことに話を振つた。

『鬼ヶ島』?って、確か、桃太郎に出てこなかつた?何てことがあたしの頭に浮かんだ。

「ねえ。桃太郎に出てくる、あの、鬼ヶ島なの?」

早速問い合わせた。

「うん」

隆はあっさり肯定した。

「葵つちは知らなかつたん?桃太郎伝説の元は、岡山では有名なんよ。岡山駅の前に銅像もあるし、きびだんごでも有名なん。桃太郎大通りもあるし、お祭もある!」

延光も、ゲームの事をすっかり忘れたかのよつこやつて割つて入つた。

「あ、ごめん……全く知らなかつたよ」

あたしは、自分の知識の無さにちょっと恥らつたが、

「普通知らないんじゃない?ボクも、小学校上がつて知つたくらいだもの」

と隆は言った。

「ふふふ〜〜〜ん。オレなんか、幼稚園上つた頃には知つてたわ。駄目やなあ〜お二人さんは!」

なんて、『今の今までゲームを口にしていた者の言葉かい!』突つ込みを入れくなつたけど、ま、延光に言葉では適いつこないか

ら止めて置いた。

「んじゃ、外行こうか？瀬戸内海に、イルカとか居るかも知れへんし？ゲームでお金くい潰すのもどうかなあ～やしな？」

馳洒落かとも思つたが、延光の一声で、三人揃つて、室内を出た。空は、青々と広がつて、旅日和。本当に出だしの良い天候に見舞われた。

雲はゆっくりと形を変えながら東へと流れている。様にあたしには見える。こんなにじっくり空を観察することなど無かつた。こういう時間もまた必要なかも知れないなあ～なんて思う。

風は適度に吹いていて、心地良い。あの髪の長かつた頃の自分だつたら、仄かな潮の香と、シャンプーの香りが混ざつて凄く複雑な物を感じたかもな？と思つ。髪を切つていて正解かも？そんなことを考えた。

「ほら、あれが、瀬戸大橋だよ！」

隆が、指をさして言った。

「大きいね！」

「それだけで驚いちゃあかんで！これは鉄道・道路併用橋としては世界最長つて言われとるんや！」

「へえ～」

あたしは、色んな島をまたいで架けられていくこの橋に見入つた。そして、大変詳しく述べている延光にも感心した。

「のぶちゃん。よく調べる時間があつたね？いつ調べたの？」

その言葉に対して間髪入れずに、

「昨日！」

あ、ははは。一夜漬けかいな……隆の問いかけに、ふんぞり返るよう答えた延光を見てあたしはなんのこっちゃと、今感心したばかりなのにと、ちょっと苦笑いした。

あたしたちは、その後何も言わずにジッとしたままその光景を見ていた。

風があたし達を包み込む。周りの観光客を取り残したかのように

そして、時間はただ一定方向にのみ過ぎて行く。あたし達は、このまま香川県、高松港へと運ぶこの船の上で、それぞれの思いを抱えて乗つている。それは、今この時点では計り知れない物だつた。

「あ、鬼ヶ島や！」

高松港に近くなつてきた頃、延光が今までの沈黙を破つた。三人三様、手すりにもたれ掛かつて、思ひに耽つてゐる時の事だつた。

「どれ？」

あたしは目を凝らして、あの童話に出てくる鬼ヶ島を是非見たいと身体を前に乗り出した。

「ほら！あれや！」

ぱうつと見えてゐる小島がそれなのかしら？と、あたしは興味深々だつた。

「通称鬼ヶ島。でも、本当は女木島と言つらじいんや。あと、男木島も並んで在るらじいんねんけど……どっちがどっちかまでは判らん！」

つまり、見た事は無かつたわけね？あたしは、また乾いた笑いをした。だけど、

「……鬼は、本当に人間に悪戯をしたかつたんやろか？ただ寂しかつただけや無かるうか……？」

延光はボソツとそういぼした。あたしは耳を疑つた。だつて、あの、延光が、悪役である鬼に対しても『寂しかつた』何て言葉を吐くとは信じられなかつたからである。

悪役を卑下すると思つてたのに、この言葉は違和感が有りすぎで、あたしは思わず、

「鬼は悪人でしょ？桃太郎は正義の味方じゃない！何言つてるので？」

らしくないから、そう問いかけた。

でも、延光は、それに対して、何の返事も返さずに、寂しそうに

笑つて、

「そいやな……」

とだけ言つて、笑つた。

何か言いたげなのに、何を言いたいのか判らない。だつて、あたしは表面上の延光しか知らないから……延光が、一人になつたところを見たことが無い。一人でいる時の顔を見た事がない。だから、あたしはその後何も言い返せなかつた。

「後少しだ着くね？見るものも無くなつてきた事だし……」

隆が、そこで雰囲気を変えるように、言いかけた瞬間、『バシャン』と言う物音が聴こえた。

「何？今の音！」

あたしは、不思議になつて周りを見渡した。すると、音の原因がわかつた。

「イルカだ～～！」

隆が、凄く嬉しそうに、乗り出して見ていた。あたしも、それに便乗して慌てて身体を乗り出す。

イルカの群れが、船の周りで飛び跳ねながら泳いでいるのが判つた。水族館で見るイルカじやなくて、自然に生きている野生のイルカ。いるんだ、本当に！何て思いながら見ていた。すると、

「ほらほら～のぶちゃん、見なくちゃ～！」

まるで、延光の心にある何かの不安を癒すかのように現れたイルカだよ？みたいな言い回しで、隆は、延光の肩に腕を回して言つた。延光は、その事を理解しているのか？いきなり、

「おっしゃ～！着いて来いや～！」

なんてはじけて言つた。

あたしはそれを微笑ましいとも思つたし、あたしの知らない何かが進行してるとも思い、嬉しいのか寂しいのかはつきり判らない複雑な心境で、高松港に着くまでイルカ達を眺めていたのであつた。

船は、程なくして高松港に辿り着き、下船の時間が来る。あたし達は、手荷物を持つて自転車の有るところまで降りていく。

船の旅もここまで。これからは、また過酷な自転車の旅が始まる。全く見知らぬ土地に終に来てしまった。

本土を離れたことの無いあたしにとっては、凄く不思議な空間。別に、ここ高松が、田舎だな何なんて事を思った訳ではない。けれど、また本土とは違つ雰囲気がある。これが四国と言つ所なのだと知つた。

同じ空の下。ここは日本なのに、何故こんなに違つ雰囲気があるのであるつか？不思議に思つけれど、それは、不安ではない。あたし一人での旅なのは無いのだから。

それにしても、のんびりしている。岡山の人もそつ、慌てる事をしてなかつたけど、ここ高松もそんな感じである。

あたし達は、これから旅行のために、下船後一度地図を見た。地図を広げた瞬間、延光は予讃線が通つている道を行くと言つていた。まず、香川県の地図を広げた時判りやすい道がそれであった。「高速道路で自転車が乗れたら良いんやけどな～何で駄目なん？」

それに関しては、全く大とと思うけど、無理でしょ……という気持ちもある。だって、車は百キロ近くで走る。そんな所を自転車が通れば大事だ。事故が起こること請け合いで。そんな危険を冒せる事は国土交通省だつて首を縊に振る訳が無い。だから、あたしは、「下から行つても良いんじやない？危険な事は嫌だわ。地道に行こ

うよー」「

と言つた。それが始めの旅行プラン。

「葵ちゃんの言つとおり。確実に地図を見ながら行こうよ。のぶちやん！」「

「…………うん。せやな。目的は、四国回り。そして、お寺回りやもん

な……？まずは、八十番所の国分寺かな？通りがけに行けそうやし
？」

つて、本気でお寺回りをするつもりだつたのか！とあの時[冗談で
流しておいた事を、穿り返したい氣分にかられ、

「冗談じやなかつたの？何故お寺回りなのさー。」

と突っ込んだ。が、

「お寺が好きだから！それに、弘法太子の縁の地やん？変か？」

と、延光は何を言つとるんや？みたいな目で見た。言つたやろ？
と言いたいみたいだつた。それをまさか、本当だと思えるわけ無い
でしょ？お遍路さんなんて、こんな年齢の子がするなんて思えな
いし……

あたしが余りに有り得ないと言つた表情をしたものだから、延光
は不服なのか？と、ちょっと不機嫌な顔に早代わりした。

だけど隆はその会話を挟んで、と黙つたが、延光に贅同するかのよ
うに、

「んじゃ、国分寺に走ろつよ？まだ昼間だし、何処まで行けるかな
んて判らないけど、ボクは、ここで迷つてるより良いと思つ

「そう言つて、自転車に跨つた。

「ちょっとー！隆君！」

あたしは訝然としない。そのまま走る氣になれなかつたので、隆
に駆け寄つた。

「ごめんね。のぶちゃんは、四国にそのために来てるんだ。葵ちゃん
は旅行気分かも知れないけれど、これだけは譲れないことなんだ
よ、のぶちゃんにとつて。ボク、初めに言つたよね？四国を悪く言
わないでつ……」

「別に悪口は言つてないよ？納得できないだけだよ！一体何が有る
つて言つの？何も言つてくれないと、あたしだつて困る！」

余りにも突つかかつたから、隆もちょっと怒つてるようだつた。

「詮索されて、嬉しい人つていないよね？葵ちゃんだつて、自分の
事話さないでしょ？それと同じことだよ。他人を知りたくば、自分

の事をちゃんと話さないとね？」

それって、駆け引きって事？あたしは、確かに自分が何者で、何故家を出たのか？なんて事は話してない。確かに平等ではない。

「でも隆君は話してくれたじゃない！それはどうして？」

「そうなのだ。隆は自分の事をあつさりと言つてのけた。それなのに、延光の事に関しては一切言わない。まるで、守秘義務があるような感じだ。

「それは、ボクは自分で話しただけだから。それに隠す事なんてボクには無い。人それぞれ事情や、考え方は違うでしょ？その違いが判らないと、人と係わる事は出来ないとボクは思うよ？」

もう話す事は無いと、あたしから田を背けて、

「それじゃ、行こうよ。のぶちゃん？」

話をもう切り替えて、隆は延光の方に向けた。

「何よ！あたしが心を開かない限り、延光の事は理解出来ないって事？そんなの……」って思った時、自分だって話せない事情と言つ物が有った。それを振り返った。

詮索しない。

つて延光と出逢った時言つた言葉を思い出した。そして、あたしは今まで何も話さなかつた。もしかしたら、延光にも詮索されたくは無いのかも知れない？それが延光とあたしの見えない壁なのだとやつと判つた。

自分から壁を作り、それを叩き壊すと言う事は、それだけ自分を知つてもらいたいと言う事の表れ。そして、相手を知るための手段。話さないと判らない領域。

一人で居たいけど、誰かと心を交わしたい。なんて事を今更ながらに考えていた自分が、愚かしく思える。

だつて、あたしは今、延光と言う人間を知りたいと願つてる。そういう。願つてているのだ。

まだ時間はある。もしあたしが洗いざらい、話をしたら、延光はその話を聞き、そして、自分のことを話すのだろうか？否、それは

判らない……隆とはまた違う。でも、隆は知っている。そつ。知っているのだ。それは家族だから？それとも、ちゃんと向き合って話をしたから？

頭の中はそれで一杯になつた。

だから、決心した。

あたしはこの旅行で、自分の事をちゃんと話そうつて。そうしたら、今の自分が変えられるのかも知れない。

そう、あたしの旅の目的を果たせるかも知れないんだ！そこまで考え、急いで自転車に跨り、二人が走つていく道を走り始めたのである。

自転車で走る事五時間。もう街中を走つてゐる。陽も傾きかけた夕方間近い時間帯。

これつてどの辺りなのだらうか？何て事を考えてみるが、はてさて？

とにかく標識を見て、ここがどこだかの見当だけつけてみる。高松市内だけは間違いなさそうだった。

そんな時、走らせている自転車を止め、延光が、後方を着いて走つているあたしに言つた。

「汗かいたやん。一つプロ浴びたい気分とちやう？」

あの一時沈んだ表情はそこには無かつた。いつもの笑顔がそこにはつた。あたしは少しだけホツと胸を撫で下ろした気がする。

「ねえ。国分寺つて、今日中に着く？あたし、無理そうだと思うからさ、この街の中でホテルなり探した方が良いと思うんだけど？」と一考を投じた。このまま夜まで走り続ける気分にはなれない。だつて、夜まで走り続けて、着きませんでした！なんて……馬鹿げている。それに実際この汗は気持ちが悪かつた。

「のぶちゃん？おなかも減るし、今日は市内のどこかに泊まろう。その方が良いのかも知れないよ？ちょっと、ハードスケジュール過ぎると後半が持たないと思うしね？」

隆も、いつもの隆と変わりがなくて、あたしはホッとした。険悪なままで居るのは勘弁だつた。

「うん。近くの安い旅館みたいな所に泊まる」とこするのも一考やな？民宿みたいな所とかないやろか？」

と言ひ事で、あたし達は、カプセルホテルみたいな簡易的などころを捜し始めた。

が、せっかく見つけた処は中学生お断り！みたいな事で、追い出されてしまった。

「うーん。この際、普通の旅館探そつか？在るんかいな？オレ等が泊まれるような所つて……」

てことで、やつと見つけた所は、古びた年代物のホテル。宿泊料も高くなくて、それなりにしつかりしたところを選んだ。

「やはり、中学生だけで、アボ無しに泊まるのつて、世間では通用しないもんやな～」

つづづく、世の中つて子供に優しくは無いものだ。

「でも、何とか安く泊まるんだから文句言わない！明日からはこんなに上手くは行かないと思うよ？これからドンドン泊まる所なんてなくなるつて僕は思う」

その言葉で、あたしは余計心配になつてくる。見知らぬ土地で、自転車旅行。この年で出来る事なんて限られてくる。しかも、お金は余り使つことは出来ない。無駄遣いは禁物！なのだから。

「それもそうやな？何のためにテントなんか運んでるんか判らんもんな？食べ損なつたらまずいから、これからは非常食として何か買い足していくか？でも、「コンビ」くらいは在るやろか？」

何て会話に繋がつた。きっと延光も現実世界つて物を理解し始めたらしい。つて遅いわよーそんな風に愚痴りたくなる気分だ。

何にせよ、今日は高松市内の、そのホテルに泊まることとなつた。夕飯込みで、三千円は丁度良い気がする。五千円も使つたらそれこそ問題である。でも、三千円もきついところだつたり？何て事を考えながら、三人一緒の部屋を取つた。始めは、あたし一人別部屋

にしようかと思つたけど、兄弟と言う事で、家族旅行へ何て事を打ち立てるものだから、別部屋を取るわけには行かなかつた。

ああ、無情……

男の子と相部屋だなんてマジ寝れそうにない。って、思つてしまふ。が、延光はそう思つてはいないらしい。隆も平然としている。あたしがて、女の子と思われてないのかしら？つてまた愚痴りそうになつた。

「先に、風呂行けよ、葵つち？オレ等、番しておいてやるから！」つて、こい、ユニットバスなのですが？番も何も無いじゃん！あたしはまた突っ込みを入れたくなつた。しかし、

「女の子優先しなきやね？」

隆がまるで補足するように言つた。それで、そう言つことかと渋々ながらも、先に風呂を預いた。

シャワーだと、お風呂に入った気がしない。それに狭いものだから、着替えも、持ち込むスペースを作るのがかなり難しい。ここに泊まる人達つてどうしてるのだろう？何て事を考える。でも、シャワーを浴びて、少しだけだけスッキリした気がした。あの汗を洗い落とせる事がこれほどとは思わなかつたさ。

シャンプーもリンスも備え付けだし、石鹼も有る。至れり尽くせり。

終わつたところで、新しい寝巻き用のTシャツと半ズボンをはいて出ることになる。

結局次に入つたのは、隆。あたしは、テレビも何も無い所で、肩にタオルを引っ掛け、延光と話をする体勢を取ろうかどうしようか迷つて、そして、結局何も話せ無いままで、隆が出てきた。

「早かつたんやな～どれ。オレも入ろうか！」

と言つ事で、ユニットバスは延光の番をむかえる。あたしは、鼻歌交じりに入つしていく延光の背中を見送つて、今度は隆と向き合つた。

「あたし、ちゃんと、延光くんに話するからーそれだつたら、应え

てくれる?」

率直に言った。だつて、風呂の時間つてそんなに長くはないのだから。

「良いんぢやない? そう言つた事なら、のぶちゃんもきっと話してくれると思う。のぶちゃんの傷は深いけど、それを全部話すのつて嫌な訳ではないみたいだしね?」

余り、関心は無さそうだつたけど、隆の場合、嘘はつかないし、こういう話を真剣にする事を望んでいるみたいだつた。

傷……

それはあたしにも有る。今迄誰にも話せなかつた傷。延光にも、隆にもそれぞれ違つた傷。人にはそれ持ち合わせている傷があるけど、そう見せない演技が必要なのだ。

判つてゐる。そして生きていかなきやいけない事も。

「出たよ～ん! さて、飯食いに行こ～や!」

ジーパン姿にTシャツの延光は、もつ、腹ペコみたいな表情で、カラスの行水並みの速さで出てきた。

「何だらうね~ご飯つて!」

「さてな～うどんやつたら勘弁。昼食べたもんな?」

「葵つちも支度していくで~乗り遅れたら損や!」

そんな感じで、まず風呂に入つたあたし達は、バイキング形式の軽めの洋食風の夕食に有りつけたのであつた。

朝は、六時に起きてチェックアウトを済ませ早々に旅立つた。

昨夜は、皆疲れが溜まっていたのか？確かに筋肉痛だけど……直ぐに就寝に至った。おなかが膨れたのも手伝って、気持ちの良い睡眠。同じ部屋のお年頃？の男女とかそんな事も考えずに、バタン・キューって感じだった。

近くに、スーパーを見つけて、お惣菜や弁当類。ドリンクを詰めるだけの物達を搔き集め、そこからまた再出発をした。

そして分かれ道に到着。道は、右と左。

「さて、どうしましょ？ 右に行けば愛媛県。左に行けば徳島県。つて、国分寺って決めてたんやから、右かいな～」

あやふやではあるが、結局流れ的に愛媛県に決定。あたし達は、キロキロと自転車を漕ぎ続けることになる。

お昼時、栗林公園への道はまた違う道にそれた所。その辺りまで漕いで、一旦自転車を降りる。

「飯食つ～ オレ腹減つたんにゃ～」

お前は猫か！『にゃ～』って何だ！突っ込みたいけど、あたしも実際おなかが減つてその位言いたくなる気分だつたり。只でさえ朝早くに起きて、止まることがなく自転車を漕ぎ続けているのだもの、おなかが減らないわけは無い。

「栗林公園にでも行つてみるか？」

隆は提案した。だけど、脇道にそれでたら国分寺にいつ着くかなど判りはしない。だから、結局、もう少し行つた所のちょっと休憩できる所で昼食を探つた。

「今日中に着けるんかいな？」

休憩時に、ボソリと延光は言葉を発した。何だか焦つてる？そんな言い回しだった。

イライラしてる感じは微塵にも見せないけど、あたしは感じた。

「何とかなるわっ！」って言つてたのどこの誰だつた？何とかするしかないんだよ？のぶちゃん！そう思つんだつたら、夕方までに到着する意欲を見せようよ…」

隆は黙々と「飯を食べる様だつたのに、どうやら一言一句聞き逃してはいなかつたらしい。隆には恐れ入りますよ。本当に延光の扱いに慣れてる。

「そう言えばさ？隆君つて、何歳なの？あたしと同学年？」

そうそう。考えてみれば、隆つて年齢訊いてなかつた気がする。一見人と余り係わりたくない風に見える。突き放したクールな面を持ち合わす隆の年齢をあたしは知らなかつたわけだ。

「ボク？あ、言つてなかつたかな～そう言えば。小学六年生だよ？」割り箸を置きながらそう言つた隆は、不思議そうにあたしを見ていた。それを訊いてどうするの？見たいな目。

「え？小六？つて、延光君より年下な訳？嘘だ？」

あたしは、つい思つたことを口に出してしまつた。だつて、間違つたらあたしより年上に感じられるんだもん……

「ひつで～オレの方が年下つて思つてたわけなんや？葵つちは！」

延光が、男の沾券に係わる！みたいに、あたしの言葉で突つ掛かつてきつた。

「いやさ、小六には見えないんだもん～別に比較してそう言つてるわけじや無いんだよ？誤解しないでよ～」

あたふたと、言葉を編み出して、あたしは何とか延光の頭に昇つてる怒りを取り除こうと必死だつた。が、隆が、

「二人とも、ご飯食べ終わつたんなら行こうよ？のんびりして場合じや無いと思うけど？」

当の本人にそう言われて、延光とあたしは残つてゐおかずを全部平らげ、「コミを搔き集めて、また自転車に跨つた。

三人の中で一番隆が大人なのだなど、この時悟つた瞬間であつた。

時間が経つのが早いのか？それとも、あたし達の自転車を漕ぐ速

度が速いのか？大きな通りをひたすら走り、国分寺へ夕方前には到着した。

「着いたね？どう？目指してた所にたどり着いた心境は？」

あたしは、晴れ晴れとした気分で問いかけた。

「うん。最高やーさて、これからお参りしてこないとなあー？行こうやー！」

延光は、先頭を切つて走り出した。

実際には第八十番札所『白牛山 千手院国分寺』と正式名称があるらしい。寺の中は意外に広くて鳩が一杯いた。

松が綺麗に整えられた仁王門。入母屋造り九間四面という本堂。その右手に在る大師堂は一重の塔みたいな感じで白く綺麗な壁で出来ていた。

その塔の前には、千体の水子地蔵が祭られている。

「可哀相にな。生まれて来ること適わんかったんやろ？それを考えると、オレらは幸せなんよな……？」

自分を指して言うのか？それとも、身近に居る隆に対してそう言ったのか？それは判らないけれど、その言葉に隆はこう応えた。

「そうだね。こいつやって生きて、色々なものを見れて。幸せだよね？」

「食べてつてのも有るな？」

「それはのぶちゃんが特に！でしょ？」

「あははは～」

一人の会話に入つてるわけでも無いのに、あたしは思わず一緒に笑つた。

そして、金堂跡礎石を見て、梵鐘を見て周り、あたし達は静かにこの国分寺を後にした。

国分寺を離れたあたし達は、次に何処を回るかの計画を立てるため、近くの『ジャンボうどん』と言つお店に入った。夕食も兼ねである。

あたしは、釜あげジャンボを頼む。延光と隆は、冷やしジャンボを頼んでいた。

名前の通り、凄い量で、あたしは満腹感一杯で、食べ終わると思わず背もたれに寄りかかるくらいだった。

「でど、これからやけど? もうホテルなどは無いと思つてくれた方が良いかもや。つて事は、自動的に、野営。覚悟はええか?」

それについては、もう、判りきつているよ。とあたしと隆は頷いた。そして、夜半近くまで走る事になると云つ事で、七十九番札所の天皇寺を日指す事になつた。そこはもう坂出市に入るかは入らないか? の所である。

「そこで、密かに一旦野営をせてもらつて、大きな通りで行くとやな……この辺りかな?」

三人で地図を覗き込む。あたしにはちょっと判りづらいけど、県道三十三号線から天皇寺を少し戻つて、十一号線とやらを、ひたすら走るつもりでいるらしい。

「明日は、お寺周りはしないで、一気に愛媛県へと突っ込んでいくつもりでおこりや? ま、寄れるんやつたら、曼荼羅寺にでも寄りたいなあ~思つとるんやけど? どうや?」

曼荼羅寺まで縮尺で換算すると、約十六キロ。いけない距離では無いと思う。途中何かアクシデントが無い限りは。だつて、一時間余りで人は四十一キロ近く走れるんですけどものね? 無理じゃない無理じゃない!

「それじゃ、そろそろ、プランも立つた所だし、出ようや?」「あたし達は、ゆっくりと立ち上がつたのである。

天皇寺に辿り着いたのは、一時時間後くらいだった。自転車の電気をつけて走らないと危険だつたりしたので、思つたより時間が掛かつた。でも、無事辿り着けたので良かつたと思う。

第七十九番札所、『金華山 高照院 天皇寺』歴史としては、崇^{とく}す徳上皇の縁の地だと云う事らしいが、歴史に疎いあたしにはチンプ

ンキャンプンであった。

もう、夜になってしまつて、周りが余りはつきり見えない。こんな感じで、本堂まで行き、あたし達はお祈りをした。

「さて、寝るところ確保やな？」

そう言つて延光は、張り切つて、お寺の中の木々が有るところを探し始めた。

「ちょっと待つた！お寺の中で寝る気なの？それは罰当たりだよ！…あたしは、余りに非常識だと思つた。だけど、そのほかに何処？と言われても、余り意見出来ないんだけれどもね？」

「良いんじゃない？罰は当たらないと思うよ？だって、ボクら一応お遍路さんしてるんだものね？その位、仏様も見逃してくれると思うんだけど」

隆まで、そんな事を言つ！全く呆れ果ててしまふわよ～でも、二対一の意見で結局この地にテントを張る事と相成りました。

「葵つち！その杭、きちんと持つてや～今これで打ち込むんやから！」

あたしは力仕事をしないで補佐役に回る。そりや、力仕事よりもちらの方が楽だけど、こき使われる気がしてちょっとムツとしていた。隆は隆で、飄々と、テント張りしてゐし。慣れてきたとは思つても、やはり変な一人だと思つ。で、三十分後には初めて張つたテントが完成した。

あたしは、早速中に入った。

「ねえ、これつて三人ちゃんとは入れるの？狭い氣がするけど？」

そう、中に入つて初めて氣がつく事はそれ。

体を密着させないと、絶対入れない広さ。

「入れる、入れる！氣にするんやない！」

延光は、何も氣に止めてない様にして中に入つてきた。

うわつ。汗臭い～ってあたしもか？と思つて、鼻を腕に近づけて臭つた。

「うつ！」

自分も臭い。みんなの事言えないんで、じつと我慢してたら、
「何か臭うね～あ、消臭剤持ってきたから、振りまこうね？」
凄い！そこまで考えてたのか隆は？あたしは隆に感謝したい気分
になつた。

本日は、お風呂に入れない事決定。もう、後は寝るだけ？だな～
なんて事を思い、あたしは、タオルケットを握り締めて、テントの
一番奥に引っ付く感じで寄り添つた。

「さて、明日の事もある、寝よか？」

そう言つて、延光は付けている懐中電灯の明かりを消したのである。

#14葵・過去の傷

朝は澄んだ空氣の中田を醒ました。

窮屈で、暑くて仕方なかつたこのテント内。しかし、横になつて暫くすると眠りに入つてしまつたのだから不思議である。

お寺に有るお水を頂戴して、あたし達は歯磨きと、洗顔をした。まだ白んでいる空の下、さっぱりして気持ちが良くて仕方が無い。

「昨日はよく眠れた？」

あたしは、延光や隆に問いかけた。

「うん。よく寝れたわ。隣で凄いイビキかきよるんがいても平氣やつたもん」

「そつそつ。ついでに寝言まで言つんだもんね？」

「え？ それって誰の事かな～？ あたしは一の句が告げなくなつた。

「ま、でもすつきり快眠だよね。気持ち良く寝れたよ？ 誰かさんと同じくね？」

「う～。これは、よほどだつたと言つても過言ではないのかも知れない……つて思つてみても、詮方ないが、頭を不意に横から殴られた氣分だつたり……言葉が胸に刺さります。

「と言つ事で、テントを畳んで直ぐに出発！ 朝御飯はもう少し待つて貰う事になるけどええか？」

そりや、先にテント畳まないと、場所が無い。あのテントの中で食べる」「飯なんて嫌だ～つとも思う。

なので、直ぐ様テントを畳み終えて、非常食のカロリーメイトを食べた。しかし、食べたつて気がしないのは？ 何で？ これだけで事足りるものなのに……

「それはやな？ 今旅をしていて、十分身体を使つてるからや！ 酷使した身体に、必要なご飯つて物は有るんやからな！」

と、延光は応えた。そうなのね……今まで気が付かなかつたあたしも間抜けだけど、いうこう機会が無かつたし？ だから余り感じた

事がなかつたのかも知れない。

「さて、行くか？」

「はへい」

「うん」

皆賛同して、自転車に荷物を詰め込むと、十一号線まで引き返し、そして、一先ず曼荼羅寺へと向かつたのである。

過ぎ去つていく風景が、あたしの脳裏に焼きつく。全く知らない場所を走っている自転車。そして、乾燥している空気があたしの体を擦り抜けて行く。

香川県は、池が多い県として有名らしい。あたしはその光景を目見たかった。淀む池に張った水。しかし、その水嵩は雨のないこの時期にはカラカラに乾いてしまいそうな気がした。実際そう言う所もあるのかもしれない。

あたし達は、何も会話を交わさず、ひたすら自転車を漕ぐ。これは或る意味仏に仕える苦行僧の様にも見えるし、思える。

今日は、雲ひとつ無い空。それが心にどう響くのか？気持ち良いとも取れるし、また、真っ青な空が冷たくも感じる。

この空は、どの地方にも繋がっている。そう考へると、今、あたし達以外の人達もこの空の下、何かに打ち込んでいるのだろうなと励まされた。

三時間後、回りは田園地帯。そこにあたし達は、曼荼羅寺を拝した。

第七十二番札所『我拝師山^{がはいしさん} 延命院^{えんめいいん} 曼荼羅寺』西行法師も訪れたことが有ると言われているお寺。弘法大師の先祖を祀るお寺。それがここだった。

山門をくぐると、石橋があり、境内に入る。

三百七十枚の格天井と言う物は、内陣と、外陣の二つで構成されてて、まるで、この世の真理を莊厳に映し出しているようである。内陣は天空を意味する『一十八宿』の星座を描き、星座中央には、

『法輪』を、四隅には『羯磨』が配されていた。外陣は、緑色を基調とし、仏の世界で語つところの莊嚴花である『量綱の花』が一面に描かれていて、それに見入ってしまった。あ、このガイドは、延光が持つている本で、知ったことだけ。

そして、このお寺には桜の木が沢山植えられていた。もし今の時期ではなく、桜が咲く春ならば、とても綺麗だろうなーなんてことを考え、あたしは今見れない桜を想像して、目の前の桜の木を拝んだ。今は青々とした葉が莊嚴と目に映っている。

ここでのお参りも無事終わり、あたし達はさらに先を急いだ。

何処までも続く道。

途中、昼ご飯を食べる時間を取らないといけなくて、標識に有る豊中町で、一時休憩した。道端だけど、この旅で培つてきたことが役に立つているのかいなか?恥をかき捨てて昼食の非常食を頬張る。

「凄く喉が渴くよね?自販機無いかなあ~?」

あたしは、お腹も減つていたけど、それより何より喉の渴きが気になっていた。

「あそこに自販機があるみたいだよ?買つてきたら?」

隆が見つけてくれたその場所に行き、あたしは小銭を取り出して、ペットボトルのお茶を購入した。

「延光君や隆君は喉渴かないの?」

帰つて来た時に一人に問い合わせた。だって二人とも喉を潤わそつなんて考えは無いようだったから。

「う~ん。喉は渴かないなあ~その代わり、マジお腹が減つた」

だとさ。汗として排出した水分を取り戻した方が良いのに?変なの!

あたしはそんな事を考えてしまった。

そして、食べ終わると、

「このまま愛媛県へと入るまで、突き進もうと思つたやけど、異存ないやろか?」

地図を片手に延光はそう言つてのけた。

「こことは、ここから一十七キロ弱だね。川辺江と言つ所に入ると
言つ事なのかな。このまま行くと、海岸線が見える行路だね？」

隆は、十一号線を手でなぞつてそう言つた。

「海が見えるの！素敵～ねえ、泳いだら駄目？凄く泳ぎたい気分なんだけど～」

あたしは、今、泳ぎたい気分に襲われていた。だつて、本当に暑いんだもの……

「葵つち、水着持つて来とるん？」

延光は、凄く用意周到だなあ～みたいな目であたしを見ていた。

隆も、驚いてるような目で見ている。

「水着なんか持つて来てないわよ！ただ、この格好で入つたつて何も変わらないじゃない？汗でびしょびしょなんだもの～」

「なんや。そう言つ事か～ええよ？海岸線で泳げる場所があるようやつたら、泳ぎや～昨日風呂も入れへんかつたしな～オレらも泳ぎたいし～」

皆考えてる事は一緒かも。

こんな感じで、またプランは立つた。あと少しだー県境まできたら、楽しみがまた増えると言つものさ。

あたしは非常食を鞄の中に仕舞うと、また、長く続く道を自転車で走り出したのである。

道をただただ進む。

真夏の太陽が照り付ける。慣れたはずの肌が、ジリジリと音を立てるかのように焼けていく。その肌に汗が流れ、まるで、サウナに入っているかの様な感覚を覚えてしまつ。

さつき飲んだお茶の分だけ汗が流れた。

なるほど、汗をなるべくかかない為に、水分を採らないようにしていたのか。延光と、隆は……そう思い、あたしも必要以上は採らない様にしなくちゃと思った。

脚はもう、筋肉が痙攣を起こしそうなほどパンパンに張ってしまった、自分の脚の様に感じない。だから、漕いでいる感覚も希薄。

ただ、前に進むために勝手に脚が動いている感じである。

今しなくちゃいけないこと。それはペダルを踏み、前を見て走る事。それだけだ。

そうして、あたし達は二時間後位に、香川県と愛媛県の県境についに到着した。

潮の香りが鼻につく。港と変わらない潮の香り。時々右側をチラチラと見る。寄せては返す波が見える。

テトラポットが遠くに見えた。

「海だよ～～！」

あたしは思わず声を張り上げて、延光と、隆にこの喜びの気持ちを伝えようとした。

すると、延光が、キキ～～と、自転車を前方で止め、そしてそれに気がついた隆も止まった。

「うわ～～と、急になんで止めたのや～～」

「いや、どの辺りだと泳げるんやろか～何て思つてやなあ～」
なんて言いながら、瞳はランランと輝いてる。気になつてたのに、そう見せないで置こうつて事だったのかな？なら、素直にそう言えば良いのに～あたしはクスクスと笑つた。

「何笑つとるねん？あ、あの辺り砂浜あるで～はよいこや～～！」

もう心が躍りまくつてるようですね～つていうあたしも、はい。

同じですが？

「早く走らせなさいよ～～は・や・く～！」

前方が詰つているものだから、あたしは思いつきり声を張り出して先を促した。

満潮では無い様子な海。

砂浜がとてもサクサクしていて、靴を履いているあたしの足音は、心地良かつた。綺麗な砂浜。ちょっとだけ荒い石もあるけれど、そ

れでもこの砂浜は綺麗だ。

そして、荒い波の無い海は穏やかで、寄せてくる波から逃げるよう足を運ばせ、そして、返す波に向かつて挑むように走る。

そんな遊びを子供みたいにしていたら、延光が、靴もジーパンのズボンも脱ぎ捨てて、ザバザバと波の中へと入つて行つた。あたしはモロに、延光のトランクス姿を見てしまつた。

「ちょっと~女の子の面前でそんな堂々と脱がないでよ~! 恥ずかしいなあ~もう! 何て思つてると、「..

その後を続くかのように隆まで飛び込んで行く。まあ、隆の場合、半ズボンだから脱ぎはしなかつたけど....

「葵っちはこんかいな~! 気持ち良いつてよ~!」

沖の方へ泳いで行く延光と、プカプカまるで波に身を委ねるかのように浮かんでいる隆を見てると、あたしだつて入らいでか~何て負けじと靴を脱ぐ。そして、パシャパシャと、波際から海へと入つて行つた。

あ、気持ちが良い!

膝丈まで入つただけでも判る。この海水の冷たさ。そして、焼けた肌に少しだけ沁みる。

でもそれが心地良い。

こんな良い天気に、そして、こんな旅の間に海水浴が出来るなんて思つてもいなかつた。

あたしは、さらに沖へと足を運ぶ。

そして腰まで浸かつた時、思いつきり腕を上げてクロールの体勢に入つた。

「さて、鬼ごっこだよ~あたしこれでも水泳得意なんだからね!」

あたしは、延光目掛けて言い放つた。体が凄く軽い。これなら誰にも泳ぎ負け等しない気がする!なんて調子に乗つてしまつた。

「おつと~そうきたんかい!捕まえられてたまるかい!隆!~鬼ごっこや、葵っちに捕まるなよ~! 岡山県民の意地にかけてや~!」

なんて、罵声を上げて沖へと逃げてゆく。

ふつと笑いがこみ上げた。だつて、こんな事言つて、遊びに誘うのなんて、有つただろうか？無かつたはず。あたしの記憶の中を探してみた。誘われた事はあつた。だけど率先して行動に起こした事など無い。だから、凄く新鮮で、こんなに楽しいなんて思つてもいなかつた。これつて病み付きになりそつゝ何て事を思う自分に、新しい自分を見つけた気がしたのであつた。

時間は、遊んでいるあたし達を置き去りに過ぎていき、太陽はゆっくりと傾き始める。

こんな時間は直ぐに経つのだと知つた。このまま時が止まればいいのに？なんて思う自分。過去に有つた思い出が蘇つた。もう忘れてしまつたと思つていたこと。本当は心のどこかで忘れられてなかつたのだとこの時痛感して、そしてふと我に返つた。

まだ、忘れられないんだな……と。

「葵つか？そろそろ上るで～」のまま川之内の何処かで飯食わんと

！」

既に砂浜に足を着けている延光の声で今に戻つた。

「あ、うん。今行くよ～」

あたしは振り切るように急いで、砂浜に戻つた。

「あ～あ、気持ち悪～う

延光は、ジーパンを履きながらそう言つた。

下着が塗れたその上に乾いた服を着たからである。

「どうせなら、少し乾かしてから行く？少ししたらもう少し乾くと思うよ？」

隆はクスクス笑いながらそう言つた。

あたしは、空笑いしか出来なかつた。面白いんだけど、思い出しつしまつたことが頭から完全に離れなかつたからだつた。

そして太陽は、そんなあたしの心を知らぬ振りして、サンサンと照らし続けていた。

川之江市内で、あたし達は少し早い夕食を食べた。

そうそう、ここ川之江市は、今では四国中央市と言われているらしい。地図が古い物だったから、その事を知らないあたし達は、一瞬突然としてしまった。が、道行く人に尋ねてやつと理解した所。どうやら、最近やたらと多い市町村合併と言うものが有つたらしい。東京でもあつた。色々な大人の問題？で、行われる物。でも、それってあたし的には良い事だと思う。けど、郵便屋さんは大変だらうなつて思うけどね？

そして、あたし達は先を急ぐために、食事を終わらせると直ぐ新浜市と言う所へ向かつた。この分だと、夜九時ごろには着くだろうという計算の元に決断付けられたのであつた。

新浜市には予定通り九時頃に到着した。

さて、泊まる所を探さなければ。と言つ事で、ウロウロと街中へと移動。しかし、田舎のようで、泊まれそうな所が見つけられなかつた。が、一軒だけ、旅館を見つけることが出来て、あたし達は急いで飛び込む。

「お願いします！そこを何とか！」

初め不審げに見られた。確かに潮の香のする服を着た、汗だくの子供達三人を、不審に思わない訳がない。

「でもね～」

そんな感じで渋つておじさん。でも救いの神が現れた。

「どうしたの？」

若女将なのか？ほつそりとした優しげな女性が着物を着てホールから現れたのである。

「若女将？この子達が一晩泊めて欲しいと言つて來てるのですが…

…

なんて事をいった。完全に怪しまれている。

しかし、その若女将は、

「良いじゃないの。何か問題があるの？確かに幼い子達だけど、泊まる所が無いのに追い出すの？それの方が問題だわ？」

「そうですが……」

「ねえ、君達、きちんと泊まれるという保障があるのよね？」

と、訊いて来た。

「勿論です。先にお支払いしても結構ですよ？」

隆が、クールに返した。

「なら、良いじゃ無い？お泊まりなさい。そうね。奥の間はまだ空いてる筈よね？そこは安く泊まれるし、宜しいわよ。まあ、お入りなさいませ。夕ご飯は食べられて？」

なんて感じで、カウンター奥にあたし達を通してくれた。

狭い廊下。そして、木張りのそれは『子羊園』を思い起した。

奥に行くと、八畳くらいある畳が襖の向こうに広がっていた。

「どうぞ。夕飯食べてらっしゃるのでしたら、お風呂ね？その格好だと」

といつてクスクス笑つて、あたし達を見た。潮でバリバリしたＴシャツを見たのだろう。一日ぶりのお風呂！ そう考えると凄く嬉しい気分になる。

「お洗濯はその時した方が良いわね。今日の夜も良い天気みたいだから、外の物干しに干せば、乾くのも直ぐよ。では、ゆっくりなさつてね。お風呂は一階の右奥にあるわ。では、わたくしはこれで。『ゆっくりなさいませ。小さなお客様』

と言つて、若女将は去つていった。

「捨てる神なんて居ないのやな？ホッとしたわ」

襖を閉め終わつた瞬間延光は零した。

「助かつたね。若女将さんが良い人で！」

あたしは、世の中本当に捨てたものじや無いと思つた。

さて、お風呂借りるか～久々に湯船に浸かれると思うつと、感涙つ

てやつや～

「そう言えば、三日間入ってないよね？もつ三日？なんだね～意外と持つものだね？」

男連中はもう、お風呂道具を用意し始めていた。あたしも慌てて用意する。

今回は、男湯と女湯が違うと思われる。露天風呂という触れ込みも無い旅館。ホツと息がつける、つかの間の命の洗濯。そう思うと、ゆっくりのんびり入りたいなと思うあたしであった。

お風呂は「ぐく一般的な、銭湯の様な感じだった。

白いお湯が良い匂い。

そして、ここ新浜市と言う所が、水が綺麗な市として有名だと言う事を知った。

美白効果とかあるかしら？なんて焦げてしまつた自分の肌を見ながらそんな事を考えて笑つてみる。

だけど、昼間のあの思い出したくない昔の出来事を思い出し、その笑つた顔が思わずスッと引くのを感じた。

昔の思い出したくない事。でも忘れることが出来てたはずなのに、忘れてはならない事だったのだと思い、今の自分が情けなく感じられた。

あの子はもう居ない。

あたしの前から去つてしまつた。

もう一度と逢うことなど出来やしない。

もう、一度と……

そう思つと、乾ききつた筈の尻から涙が零れ落ちた。思い出せば思い出すほど涙が込み上げてくる。

あたしは、あの子がいないと駄目だった。

人を愛したのは、あれが最初で最後。

もう一度と、人を愛することなど無いと思っていた。

でも、今あたしは確實に人に興味を持ち始めている。断ち切るた

めに新しい事を見つける旅。そして、それは、あたしの中に増幅し、そして、今この時点で走馬灯の様に思い出している。

あの子の屈託の無い笑顔が脳裏に渦を巻く。

大好きだった。かけがえの無い子だった。そしてあの事を忘れてしまいたくて、人からまた離れた。生まれた時から人に关心を持たない人間に戻った。

だけどそれは、自分が傷つきたくないからだ。判っている。もう一度とあんなになるまで傷つきたくは無い。その一心で、人との距離をとる。

今年の中学生の夏休みの宿題に出された短歌。

あたしは、それを貰つたその日に仕上げた。

切つても切れない人との繋がり。それを欲しているような解釈の短歌。

そう、あたしは人に何かを求め、だけどそれを求めて傷つく事を恐れている。人の輪に入る事。それが目的ではない。かけがえの無い者を失つても強く生きる力の源を欲している。それは、都合の良すぎるあたしのエゴかもしれない。だけど、このまま社会人になって本当に幸せなのか？あの子はそれを望んでいるのか？

そう考えると、自然と人との繋がりを大切にする自分でありたいと、心のどこかで願わずにはいられない訳である。

「ごめんね。あたし、幸せを自分のこの手で掴むよ？それでも、あなたは許してくれますか？」

ボソリとあたしは湯船に浸かつたまま呟いた。

「葵っち、遅かつたんやなあ～？のぼせたりせんかったか？」

余りにも風呂から帰るのが遅かつた為か、待つたやん！みたいな表情で延光は襖を開けたあたしに向かつてぶつくさ言った。

「せつかくの湯船だもの、葵ちゃんも、気分が良かつたんでしきう？のぶちゃんそんな言い方は無いよ？」

女の子の事情をも把握してるので、隆の言葉はありがたかった。

「何？明日の予定立ててるの？」

あたしは、地図をおつぴろげている既に布団が引かれた畳の上を歩いて、その地図を見た。

「うん。 ううなんや。 明日なんやけど、今治市まで回る経路と、そのまま愛媛の県庁がある松山まで行くか？考えるのや。 地図見たら、今治結構お寺あるし周りたいんやけど、かなりな距離走らなかんのやな……それを考えると、松山まで出て、そこから内子辺りを行くのもええな~何て思つとる。 と言つ事をさつきまで隆と相談してたんやけど……」

「そうだね~」

あたしは、まだ心の整理が着いてなくて、地図を見ながらちよつと上の空。なので、今、肝心な話の内容について行けてなかつたり。

「今治は、タオルが名産らしいよ。でもって、お寺も沢山あるし。とか考えてね。葵ちゃんは、どうしたい？」

「うん。でも、大変な旅になるよね？あたしは、松山に行く方を取るかな~？」

と言いつつ、楽な選択をしていた。

「そいやな~高知を回つて、徳島までの経路を考えると、やはり、松山まで出でしまう方が得策か~」

延光はちょっと残念そうにそう言つた。

「そやう。松山まで出るのは良いけど、その後が大変なんだよね。高知まで山を越えないといけなくなるから。四国山脈つて、越えるの大変そудだし」

隆も同じ意見を持ち出してくれた。

「そんに大変なの？高知に入るの……」

「山道がめっちゃ凄い！この経路見てみー」

あたしは、その道を辿る指を見ていた。

「うわっ~山ばかり！でも、海岸線通れば良いんじや無い？かなり遠回りだけどさ？」

「それは、かなりな遠回りだよ。どのくらい時間が掛かるか……そ

れに、のぶちやんの目的のお寺は、此処だものね？」

「延光寺？ つて、延光君の名前と同じ漢字なんだね？」

「延光寺？ つて、延光君の名前と同じ漢字なんだね？」

ふとその名前を聞いた時、延光はちょっと影を落とした表情に切り替わった。何かあるのであらうか？ このお寺に？

「読み方は違うんやけどね。同じ漢字や。ま、何処にでもある名前やし、別に関係ないわ」

と言つて、延光は、肩を落としてるよう見えた。

「さて、道は決まつたし、明日はこの道を行こうか！ お寺周りは、五十一番札所、右手寺にしておくか？ 此処有名らしいしなあ？」

と地図を見てみると、道から離れた所だと氣付く。が、愛媛県のお寺は大きな道沿いには無いらしいことが判つた。有るには有るけど、東予市手前で固まつてゐる。が、延光は余り興味を示さなかつた。

「それじゃ、やつぱり」と。明日は、道後温泉で一晩明かそうね。聖徳太子も入りにきたと言つ温泉だから、興味深いし？」

という隆の言葉で、この計画は打ち止めされた。

「明日も早めに起きて、頑張つて走らないとね？ 今日は泳いだし、体がクタクタだから良く眠れると思うよ？」

と言う事で、地図は仕舞われた。

縮尺で測ると、百キロ有る事に気がついてしまつたあたしは、早く休もうと思つた。

布団は客用にちやんと清潔感のある真っ白なシーツで包まれていた。

あたしはそれに潜り込むと、五分もしないうちに夢の中に誘われた。

あの子が、あたしに笑いかける夢を見た気がした。それが少しだけ心を癒してくれた。

そして早朝から大戦争。

昨夜洗つて干しておいた自分の服を鞄にしまつと、一直線に洗顔や歯磨きをした。歯磨きつてご飯を食べてからする習慣があるので、やつ言いのはこの際無視。人前に出るのは、歯磨きしていないのはちょっと嫌だなって思つたから。

「あら、もうお出かけになられるの？朝食の用意できましてよ？」
バタバタやつているあたし達を、若女将が見てそう言つた。

「やつなんやーやつたら、食べてから出ようか？」

きちんとした食事を摂らずに出るよりまだ良い。延光の判断は正しいと思い、あたしと隆は頷いて、朝食を食べてから、チヨックアウトした。

さて、此処からは長い道のり。

途中、山も有るから今までみたいに楽な自転車旅行と言つわけには行かない。

目標は愛媛県松山市！

あたし達は、目標を定め、コンビニで昼食用のお弁当を買い込むと、一気に道を走り出した。

標識は西条市、小松町、と此処まではならかな普通の道だった
ので漕ぐ事もそんなに苦ではなかつた。

問題は、川内町に入るまで。

山道は辛い、あたし達は、ひいひい言いながら、自転車を漕ぐ。
前だけを見て。

何処まで続く道なのか？山の空氣を味わいながらそんな事を考える。遠回りしても、今治から行くべきだったか？何て事まで考へる。が、後悔先に立たずであつた。

汗のかき方が今までと違うなあーなんて思いながらも、黙々と前に進む。そして、左手に見える桜三里入り口辺りで、予定より一時間遅い昼¹はんとなつた。

「ねえ、これってちゃんと着くの？」

あたしは、不安が過ぎつた為、延光をちらり見ながら言つた。だつて、まだまだ山道が続く。下りは良いけど上りの大変さはもう勘

弁だと思つた。

「道がある限り、辿り着かないわけが無いやん。ぐつと我慢や！」

「仕方ないね。そういうことだと思つ。納得してこの道を選んだんだからね？」

それを言われると、頭が痛い。自分が言つた事なんだから、今更愚痴る事は許されない。

「さて、もうそろそろ、川内町に入る頃やん？後は下り一本。ファイトファイト！」

延光は至つて元気そのものだ。隆は飄々としてる。相変わらずの面々がそこに居た。

#16 道後温泉

そこから川内町に入るのは一時間後。かなりペースは速かった。坂道を対向車に気をつけながら下る。そして、眼下に平野が広がった。

そこからまた西を目指す。なるべく大きな通りを選んであたし達は進んだ。そして、国道三十三号線に出た。

車の往来が今までとは違つて多い。大きな道に出たのだと判つた。その道を、北上。ズンズンと進む。もう、松山市の端に到達していた。

「このまま、地図を北上して、どうすれば良いんや? どつかに細かい地図売つとる本屋なかろうか?」

なんて話していると、左手に、大きな本屋を見つけた。

「おっしゃ、あそこで、地図見させてもらおつや!」

買わずに見るのね……

あたしは、延光のそのちやつかり加減は、関西人のそれと同義だと思つたりした。

つて良く考えると、延光つて関西弁を喋るんだよね? 関西出身なのかしら?

彼の生い立ちを知らないから、そなのかどうなのか判らないけど、一々耳につく。関西弁。隆は標準語しか喋らないから、余計に耳に残る。

でも、この旅で、判る事であるし、今知る必要なんて無いんだと、この勘ぐり精神を抑えた。

本屋を出たあたし達は、真っ直ぐこの道を進む。そして、本屋で仕入れた(そこだけ書きなぐつたメモ用紙)地図を頼りに、この街を探索して、ようやく道後温泉へと辿り着いたのである。

道後温泉に着いたのは、夕方前。

その近くの格安四千円程度のホテルに一先ずチェックインして、初めての愛媛県のお寺、石手寺を目指した。

道後温泉から南東に位置するお寺。

第五十一番札所『熊野山 虚空蔵院 石手寺』と書ひつい。

線香の香りが絶えずするお寺である。

四国でも名の通つているお寺であるらしい。が、見栄え的に見ると、あたしにはどう異なつてゐるのかさっぱりである。そして、四国靈場でも、龍一の寺宝・文化財を有する名刹らしい。つて言われてもなあ～？

本堂は至つてシンプルで、階段をひょいひょい上つていぐと直ぐそこにあつて、あたし達は、普通にお参りをした。

そして、国宝と言われる三重塔を見た。これつて中に入れらるのかしら？何て思つてあたしはのんびり外からそれを見た。塔つて何のために作られたのか知らない。全く疑問の一つである。住む訳でも無いのにさ？ね、疑問でしょ？

そう言つたら、
「象徴なんだよ」

と言つ言葉が返つて來た。シンボルね～昔の人方が考へる事つてよく判らん。つてそんな事言つてると、東京タワーの意味は？エッフエル塔は？自由の女神像は？つて事にもなりかねない。色々意味があつて建てられた物。ある事を今更ながらに自分で納得した。

それから、かりていほてんどう詞梨帝母天堂を見た。その中に、鬼子母神を祀る物もあつた。延光もだけど、隆もそれに興味があるみたいだつた。鬼子母神とは、子供を守る神らしい。男の子なのに、変なものに興味があるものだ。女のあたしにだつて、まだそんな物に興味ないつてのに……でも、あたしと、延光とはまた生きてきた道がちがうからか。と、この旅で気付いてたはず。生まれた環境の違いだ。

とりあえず、安産祈願の名所？と言つ事らしい。あたしにとつては、今はまだ関係の無いことだけど将来の事もあるし？なんて軽い気持ちで見ていた。

そして、詳しく説明を見ると、妊婦さんが、堂の前にある石を持ち帰り、無事出産が終わったら、石を二つにして堂に戻すと言つ事らしい。

ふうん。だから、ここに小石が一杯積み上げられているんだな」と納得したのである。

そんな感じで石手寺を見て歩いたあたし達は、夕焼けから、七色の空に変わりつつある空の下、道後のホテルに戻り、そのホテルにも有る温泉を利用しないことにして、お風呂の準備をした。

歩いて此処、道後温泉の本館に辿り着く。かなりの年代もの。正月前には一斉に煤払いをするらしいけど、それでも、木造のこの建物は歴史という物を感じさせてくれる。こういうのもまた良いなと思う。

そして、明治をイメージするガス燈が七本周りにあって、ここだけでも日本の文化を象徴しているようで趣があり、あたしはちょっと嬉しかったり。ロマンティックな気分に酔いしれたりしちゃいました。

そして、何より、あの有名な聖徳太子も入りに来たとされている、温泉であるとか！

歴史って凄いなあなんて思っていますよ。マジで。それも言ひ伝え、伝記として残つてる所などが特に！これもロマンの一つだな～なんてね？

そんな有名になった温泉も、時々湯が沸かない時が有つたそうで。それを考えると、残せる物を大切に思う人達の願いやら、思いと言う物は、かけがえの無いものに感じられたり。そんな事を考えた。靈たまの湯と、神の湯、椿の湯がある。その中でも靈の湯が観光者に人気だとかで、あたし達はどれに入るか協議をした。値は、やはり靈の湯が一番張つてて、子供が六百円する。でも、この位の出費良いよね？一時間以内、貸浴衣・お茶・せんべい、貸タオル（石けん付）であるし。至れり勿くせりである。

あたし達は、それぞれ別行動。

女湯は、中央に湯船があつた。でも、中は近代的でちゅうとだけ外觀とのイメージと違つて残念だつた。綺麗なんだけね？

そして、ゆっくり体を洗い流した。もう焼けた皮膚が剥け始めている。余り擦らない様に気をつけた。だつて、色が剥げた皮膚ほどみつともないもの無いじゃない？そして、時間一杯ゆっくり湯船に浸かることにした。

周りの観光客もザワザワと、入ってきたり、出て行つたり。何とも普通に旅行をしてる観光客のように自分が感じられた。が、一風変わつてるんだけどね？本当は……

こう人が多いと、昨日みたいに頭の中にあの子の事が頭を過ぎることがない。

なるほど。そうか……人が居るから回りを気にしてるんだ。だから、忘れてしまう。気が張つてると自覚ができた。

そして、あたしは此処の所の旅で酷使してきた脚のマッサージを湯船で行つ。揉んで置くと気持ちが良い。パンパンに張つていた筋肉が解^{ほぐ}れて行く。でも、大分慣れてきたなと思う。この旅にも。そして、延光や隆にも。

なんて事を思つてると、時間が来た。

あたしは、ゆっくり湯船から上ると、貸し浴衣を身につけ、せんべいを頬張つて、牛乳瓶を片手に延光達と合流した。

「さて、明日からやけどー中山から内子周りと言つ事で異存なかろか？」

「それで良いと思うよ？こちらの上浮穴の方で行くと、もう、山だらけだしね？それに、高知の市内行きになつてしまつ。それじゃあ、延光寺に行くにはわざわざ戻らないといけないでしょ？」

そう言つことで、誰も、昨夜決めたルート変更を言い出さなかつ

話をした。

「それで良いと思うよ？こちらの上浮穴の方で行くと、もう、山だらけだしね？それに、高知の市内行きになつてしまつ。それじゃあ、延光寺に行くにはわざわざ戻らないといけないでしょ？」

そう言つことで、誰も、昨夜決めたルート変更を言い出さなかつ

た。

まだ、南宇和へと向かう道も有るにはある。が、かなりな遠回り。これは流石に堪える。

だから、もつと直線的な道を考えた。

中山町に行く道は確かに山道だけど、それでも、遠回りよりは良いだろう。今日の川内町への山道を考えると、力が萎えるけれどもね？それだけあの坂はきつかつたからである。

そして、この旅初めての、ベッド。

ああ、自宅を思い出すよ。スプリングがちょっと違うけど、横たわつたら、寝心地が、畳の上にお布団を引いたものとは全く異なつてて、懐かしい。そして、あたし達は、明日に備えて、消灯を早めにした。

というか、皆疲れきつて、その上、気持ちの良いお湯と、ご飯で眠くて仕方なかつたのだと思う。あたしは、夢見ることなくグッスリと眠ることが出来た。旅行始まって以来の快眠だ。

明日、大変な事が起こるとも知らずに。

朝は、今日も快晴。

また暑い日が訪れた。

あたし達は、チェックアウトをすると、直ぐに、用意万端なのを確かめて、自転車に跨つた。

ここから、内子まで六十キロ。お昼頃には辿り着くだろう。

道順としては、松前町から、伊予市を通つて、中山町、そして、内子と言う順だった。

あたし達は、街中を信号に阻まれつつ進み、そして、少し遅れたが、伊予市まで辿り着いた。

そこで、お昼のご飯をコンビニでゲットし、そこから中山町を目標す。その為、五十六号線と言つ所を走つた。

だんだんと、家が少なくなり、山へと突入する。縁豊かな山。東京で見ることのない山がそこにある。

川内町までの道でもそつたが、何となく親しみと言つものを感じ始めている自分は、もしかしたら、都会より、田舎住まいの方が性に合つているのかも知れないな?なんて思った。

山はそこに悠然とあり、川もあり、そして、蝉の鳴き声。鳥のさえずり。何もかもが心地良い。

だけど、走つていく半ば、あたしの自転車がパンクしてしまつといふハプニングが起きてしまつたのであった。

「ちょっと待つて!何か変なんだよ!」

漕いでも漕いでも、前に進まない。重くて仕方なくなり、最後には、ガタンガタンと後輪が悲鳴を上げたのである。

あたしが大声を上げたものだから、勿論、延光達は後方を振り返り、あたしの自転車の傍までやつて來た。

「どないしたん?あ、これタイヤ、パンクしとるやん!どないしよ?このまま走り続けるわけないし、自転車屋なんてこの近くに有

るわけないわ。隆！お前パンクの直し方判るか？

つて、隆に訊いたところで直せる確立もあるまいに……

「道具を思つてないから無理」

つて、道具があれば直せるのですか？隆！なんて突つ込みはともかく、困つた事態が起つた。前に進めず、後ろに戻るには余りにも進みすぎた。

「よし！こうなつたら、ヒッチハイクや！」

何故そつななる？

「歩いていこうよ～ヒッチハイクなんて～」

そんな事して、乗せてくれる訳ないでしょ？この人数に、この自転車の数！よほど大きいトラックみたいな車でも通らない限り無理！でも、

「ま、仕方ないね。歩くにはきついもの。後は天に祈りましょうか？」

ああ、隆までそんなあてのない事を！

あたしは呆然として、突つ立つたままだつた。が、延光達は、既に自転車を道の脇に寄せて、来る車を待ち始めた。あたしは、それを、恥ずかしい気分で見て、そして、同じ様に、脇に自転車を止め、車を待つた。

待つ事、一時間。

その間に止まってくれた車十台。思ったより反応はあつた。しかし、自転車が有る事になると、皆、『じめんね』と言つて後ろ髪をひかれるような感じでその場を去つた。

「あ～あ、やはり無理だよ。そんなに都合の良い車が来るわけないよ！」

炎天下の中、少し高地で涼しい風は吹くものの、日射病にかかりそうなくらい暑い。ひ弱な子だつたら一発だろ。

「もうちょっと待つてみようや！もしかしたら来るかも知れんからなあ？」

延光はまだまだ！と踏ん張つているみたい。隆にいたつては、表

情すら変えてない。

まるで一人とも、神と言つて存在を信じているかのようである。あたしは、そんな都合が良い事なんて有るわけない!-とそう思つてたその矢先、

「あ、ほらー。トラックや!」

高知ナンバーの大きなトラックが走つて来たのである。

延光はその車の前に勢いよく飛び出した。あたしは、引かれる!-と思つて田を閉じたが、トラックは、ゆっくり止まつたみたいだつた。

「どうしたん? 君達は!」

トラックから下りて来たお兄さんは、まだ二十台くらいに見えた。かなり若い。

「自転車がパンクしたんや。ソレから内子まで行こうと思つてたんやけど、歩くと凄い距離やし、荷物も多くて困つとむねん!-」

延光は、必死で今困つているとそう言つた。

するとそのお兄さんは、

「内子か~通るけど、乗つて行くか? 君等、四国の人間じゃ無さやうじやきい、大変じやろ?」

お兄さんは、そりや大変や!-って表情であたし達を見た。そして、「オレは、高知の足摺岬まで走るけど、内子まで良いのけ?」

「足摺岬?」

どうやら、その言葉に延光は反応したらしい。

「すまんのやけど、もしかして、延光寺つて知つとるか? お兄さん!」

突然お寺の事を話し始めた。よほどそのお寺に興味があるとみえる。先にこのお寺の事を聞く辺りが、もう、それしか考えてないという勢いだつた。

「ああ、知つてるよ。そこには最終的に行きたいのけ? それやつたら、乗つて行け。自転車は後方に積めるし、こんな田舎やから、荷台に人が乗つても怪しまれる事はそういうけ、オレはかまわんよ? さあ、

はよ、用意用意！」

延光の目は、嬉しそうに見開かれた。その様子を見て、あたしはそんなに思い入れの有る所なんだ。とやつと理解したよつと思える。実際の所が何かは判らないけれど。

だけど、そんな延光を見る隆の目は、少し寂しそうだった。その理由は今の時点では判る筈もない、あたしであった。

自転車を積み込み。あたし達はトラックの後ろに乗り込んだ。暫くすると、

「出発する前に、なるべく体乗り出さんように氣をつけるようにー。」
そう言つて、運転席にお兄さんは乗り込んだ。

「はい！お願いします！」

荷台に乗つたままあたし達はそつ返事をした。

自転車の旅の途中に、自動車に乗つているのが何だか変な気分。そして、延光と隆と改めて面と向かつてゆつくり話をする体勢は整つていた。

が、特別話す事が無いあたしは、山の木々を視界に入れて見守つていた。だけど、過ぎ去つていく景色が、過ぎ去る時間と同じように感じられて、あたしはまた、あの子の事を思い出した。

そして、この旅の途中、決心していた事を話す事にした。

そう、あたしの過去。そして、あたしの傷。

これを聴いて、延光や隆達がどう思つかる？それは判らない。けれど、高松の旅館で、隆に言つたことを思い出した。

自分を知つてもらうためには自分のことを話す。

それは気になつてゐる、延光の過去を聴く為の平等な代價。

この先、延光寺と言う所に着いたら、過去の事を知る事になるかも知れない。だけど、それを目にすると前に、あたしは話すべきなのかも知れないとも思った。

「聴いてくれる？これはあたしが家出をした切つ掛けとなつた出来

事。もう過去の事なんだけどさ……」

流れ去る木々を見ながらあたしは、徐に話し始めた。まるで、昔話をするアニメのナレーションのようであるかのように。

それを、何も口を挟まずに、延光と隆は聴く為にあたしの方に視線を向けた。

聴く体勢を整えるといった感じは見られない。ただ、話たい事を話したら良いんだよ?と言つ風に見ているのを、あたしは背中で感じた。

「あたしはさ、別に、家庭に問題があつて家出したわけじゃなかつたの。うちは、それなりの上流家庭だし、父は警視庁の人間。母は、専業主婦といった、或る意味恵まれてる家庭なの」

そこまで言つて、延光や隆はどう判断するのか心配になつた。でも、何も言葉を掛けずに続きを話すようにと頷いていたのが判つた。「あたしつて、物心ついた時から、自分と両親以外の人間に心を許す事ができる人間じやなかつたの。どういうわけか、他人に対して本音をぶつけると言う事が出来無いし、関心を持つ事が出来なかつた。そう言つ自分が前に小学六年生の時、一人の女の子が現れたの……」

そう、あの子と出逢つた。

春の桜が舞い散る四月。クラス替えが有つたため、あたしは六年生の教室の在る廊下を見回つた。そして、自分の名前を見つけた。六年三組の教室の前。

そのあたしの横で、このあたしの背よりも低い黒い瞳が丸々とした色白の女の子が、ピョンピョン跳ねながら必死で名前を見つけようとしていた。

「なんて名前なの?」

見た事がない女の子だった。

ま、あたしが人に関心がないから、ただ、今まで知らなかつただけかも知れない。

「海野ミサって言つただけで……」

ボソリとそう言つた。人じみの中だから、貼りだした名前が見えづらいといった感じだったのに、

「あたしが探してあげるよ?」
と言つてしまつた。

「ありがとう、見えなくて!」

話しかから察するに、小さくても元気そうな女の子だなと思った。

「あ、有るよ。名前」

あたしは見つけ出して、その子に告げた。

するとミサは、

「ありがとう、えつと、あなたもこのクラス?」
と、問い合わせてきた。

「え、うん。そうみたい」

あたしは、そっけなく応えた。

「名前は?同じクラスなら、仲良くしてね?あたしの友人って、皆違うクラスなの!」

凄く元気一杯にそう言つたものだから、それに釣られて、

「あ、あたしの名前は葵。美空葵」

「葵ちゃんだね!あたしの事は、ミサって呼んでもたら嬉しいな

」

とても人懐っこいやうだった。それに、笑顔がとても似合つ子だなとも思つた。

それからと言つもの、学校でも、その他の個人的な遊びでも、あたし達は束の間も離れるような事がなかつた。常に、一緒でいるのが自然体。まるで空気を自然に吸える感じの様に。

「今日、お泊りしていく?」

なんて事も何度も有つた。

宿題を一緒にミサの家ですることが日課で、たわいない話や、噂話をする事もあつた。何故だか、その時が当たり前のようになつて

いた。

ミサの家は、お父さんが実業家で、お母さんはパートをしながら家庭を守っていた。

その為、ミサは一人でいることが多かつた。が、友人は多い。でも、何故だか、あたしと一緒にいる時間が一番長いみたいだつた。不思議だつた。あたしは特別面白い人間じゃ無いし、人を寄せ付ける魅力などない。そう思つていたから、ミサに一度問い合わせた。

「なんで、友人多いのに、あたしと一緒にいる時間が一番多いの？あたしといて楽しい？」

そうしたら、

「何だらうね？葵ちゃんといる時が一番私らしく居られるの。だって、安心するんだよ？葵ちゃんにはそう言つ空気が有るみたい」と本を読みながら、あたしの背にもたれて、クスクス笑つた。

「そう……なんだ？」

あたしは、自分の事を客観的に見てみることなど無かつた。それに、結構突き放してると思つんだけど？それなのに、安心できる？お泊りの夜、あたしは、何気ないこの言葉にひょっとくすぐつたい気分になつた。

そして、一年はあたし達の仲を深め、過ぎ去り、ついにあたし達は中学生になつた。

中学校も一緒で、クラスまで一緒だつた。

「ほらね？何か赤い糸で結ばれてるんだと思うよ！」

そう言つて、ミサはクスクスと笑い、あたしの手を引き、クラスに入った。温かいミサの手はあたしの心を穏やかにしてくれた。

一年B組。このクラスは色々な個性の豊かなクラスメイト達で賑わつた。

「海野さんと、美空さんって仲良いのね！いつも一緒に！」

女子達はそう言つてあたし達の仲を温かく見守ってくれた。

周りから見ても、そう見えるらしい。

二人揃つて小柄。あたしは色黒だけど、ミサは色白。やつらの一人が揃つて話をしていると、仲のよい姉妹のよつて見えるらしい。何をするにも、一緒に班を作つても一緒に。

運命は、まるであたし達を温かく見守つてくれているよつだつた。

それまでは……

しかし、運命の歯車が狂う日が来た。
ミサが何も話さなくなつたのである。

あの元気で「口」口とよく笑うミサが笑わなくなつた。

「どうしたの? ミサ?」

あたしは勿論心配して問い合わせた。「こんなミサを初めて見たからだ。

「葵ちゃん? 私ね…… もつ駄目かも知れない。私がいなくなつたら、困るよね?」

ミサはそう言って無理に笑つた。そう見えた。

「何言つてるの! 居なくなるなんて…… 引越しでもするの? そんな事ないでしょ? あたし嫌だよ。そんなの!」

「だよね…… うん。葵ちゃんのためにも頑張るよ!」

はにかんでそう笑つたミサは、次の日学校に来なかつた。
その日だつた。あたしがミサの悲報を知つたのは。

お父さんの事業失敗で、家族で自殺。一家心中だつたと、そう先生から話を聽いた。

あたしは、身が凍つた。

ミサがもうこの世に居ない?

何故? 昨日まで一緒に居たのに!

最期に聴いたミサの言葉は『頑張る』だつた。それなのに……

あたし周りが闇に包まれた。そんな気がした。

あたしは、涙を流せなかつた。周りの皆が涙を流していたのにもかかわらず……

だつて、信じられないから。今までの記憶は何処に仕舞い込めば良いの？あたしじゃ、駄目だつたの？あたしの力が足りなかつたの？あたし、何もミサに自分の気持ちを伝え切れでない！

想いが空回りするばかりだつた。

「クラス代表として、美空さん。あなたが代表で、葬儀に行つて頂けるかしら？」

今まで話して聴かせていた教師の言葉が頭に入つて無かつたあたしは、

「え？」

と、疑問符を投げかけた。何を言つてるの？あたしが葬儀の代表？葬儀つて何？あたしが何をするつて？

疑問符ばかりが頭を回る。整理が何もつかない。誰が死んだというの？

皆があたしを見た。それが一番だとでも言つつかのよう。無数の瞳がこちらに向けられた。

あたしは、何も考えられなくなり、ついにその場に倒れてしまつた。

「人はね、余りに愛しすぎる人を失うと、生きる目的を失つて、大変な事になるのよね。その後あたしは、ミサの死に顔を見ることがつたの。代表として行く事ができなかつた。あたし……何も喋ることができない失語症にかかつて、一年を棒に振つたの」

そう。余りのショックで、言葉を無くしてしまつた。そして一年間私立の学校だつたため、単位を取れず留年したのである。

だから本当だつたら、中学三年生のはずなのだ。

「でもね、やつとこの旅行で、ミサの事を走馬灯のように思い出して、そして、やつと泣く事が出来たの。そうしたら、何故だか忘れる必要は無いんだと判つた。いえ、逆に忘れてはならない事だつた

の。あたしはこのことを忘れようとして、逆に自分を縛つてたんだと思う。そして、心の何処かで人を好きでいられたら良いのに思うことが出来るようになった……それってどう思う？」

あたしは、ミサの事を延光と隆について話してしまった。

「葵たちの傷は、とても大好きだった人を失った事の悲しみやったんやね。オレは、その……その、この旅を通じて、大切だった思い出を、忘れちゃいけないと思つたんやつたら、それは、葵たちが出した大切な答えやと思う。もうこの世に居ない人を思い出すことを、女々しいとか思う必要は無いわ。だって、人間は誰しも弱い所があるもんやもん。このオレやつて、強くない。それを隠すために、笑つて生きようと思つてるだけや。そして、いろんな人と会話して、そして、好きになつて……出逢いがあれば、勿論別れだつてある。旅はその典型的なものや。好きになる人間が出てきて、それを大事にする事は大切や！って思うよ？」

延光は、下を向いてそう言った。もしかして泣いてる？声が、何だか震えてるような気がした。

「ボクも、延光と同じ。人間つて、絶対一人では生きて行けないんだよ。家族と言う繋がりは、立ち消える事は無いけれど、その他の友人の別れは必然。一生一緒なんて事は無い。ボクの場合は血の繋がりのない家族だけど、それでも、家族だ。葵ちゃんは、とっても大切な友人を一時でも得られた。失った理由は凄く残念だと思うよ。ボクにはその気持ちを理解しろといわれても無理だけど。だけど、忘れちゃいけないよ？心にある思い出は、写真のように形に残るものではないけれど、凄く纖細に心に残る物だと思つて。そう、きっと、そのミサちゃんという女の子も、天国で願つてくれてるはず。自分の分まで人との係わりを絶たないでねつてね」

隆君の言つとおりだよね？

あたしの失語症が治つて、こんな風に旅をして、得ている価値と言つ物を色々心に焼き付けられている。こういうあたしを、恨んだ

りはしてないはず。もし恨んでるとしたら、顔を墓前に出してない事だ。

「うん。話してスッキリしたよ。東京に帰ったら、真っ先に、ミサちゃんの墓前に行こうと思つて！嬉しい言葉を、ありがと！」

あたしは、やつと、肩の荷が下りたよつた気がする。

もう、泣きたい時は、自由に泣いても良いんだとそう語つた。

そんな昔話をしている頃に、内子町と言う標識が見えた。

「さて、内子だよ！まだまだ先は長い、何か面白い話でもしようか？延光君、何かネタない？」

なんて温った会話はここで中断。

もうあたしは迷わない。ミサのためにも。

あたしはいつもやつて生きているのだから！

その後は、白い佇まいの家々のある道を見ながら、しつとつ合戦、や、トランプをして、道中を楽しんだのである。

#1-8 延光の傷・告白

内子から、大洲、そして、野村町、広見町と、標識は変わつていく。景色は、ちょっとした下町になつたり、山だつたり。特に大きな町と言つ感覺は無かつたが、それぞれが、独自の町づくりをしていて見ごたえがあった。

勿論会話は弾む。他愛ない事を色々話した。

延光は、あの穏やかで頼りがいのあるおばさんの、ちょっとした失敗のお話を堂々と公表したり、隆は、いつも遊んであげている、優香ちゃんや浩二君、凜君、鈴音ちゃん、涼君の可愛い話をしてくれた。

あたしの知つている人達ばかりのお話。

きっと、気を遣つてくれてるんだとばかり思つていた。だつて、知らない人の話をしても、あたしにはチンパンカンパンなのだものだから、それも悪いなあーなんて思つて、

「ねえ、延光君や、隆君の学校生活のはどうなの?」

と、今度は、個人的にどういう学校生活を送つてているのかを訊いてみた。

だけど、返つて来た言葉は、

「別に、大したことあらへんよ。ごく普通の学校生活や」
良い返事が返つてこなかつた。

その言葉に、

「友達とかの話しないよね? 何で? 仲の良い子とか居るんでしょ? あたしは話してくれても大丈夫だよ?」

気を配つたつもりだった。しかしそれは間違つた。

「葵ちゃん。ボク達はね、学校にとつて、といふか、級友にとつて招かざる者にあたるんだ。只でさえ、こういう身の上だからね」

隆は、なるべく笑顔でそう言つたみたいだった。と感じるのは、あたしがそれを聞いた瞬間、世間の冷たさを感じたからだった。

「……」

何も言葉が紡げない。あたしは、氣を遣つたつもりだつたのに、延光や、隆にとつては要らない世話をだつたに違いない。

彼等は、あたしに氣を遣つたんじゃなく、話せる事はそれしかなかつたのだ。

「ごめん……」

あたしは、涙が溢れてきた。

そう言つしかなかつた。

「別に、葵つちが悪いわけやないんやで！泣かんでや！」

あたしは、ボロボロ溢れてくる涙を止められなかつた。ミサの事を思い出してから、あたしの涙腺はかなり緩くなつていて、「ゴシゴシむき出しの腕で顔を擦る。でも、止まらない。

「あ～あ、のぶちゃん、女の子泣かせた～！」

柄に無く、隆がそんな風に延光を煽つた。

「ちゃうわー！お前が言つたから泣いたんやろ～人のせいにはばかりするなや！」

なんて、一人があちゃらけてそんな事を言い合つ始めた。それが、可笑しくて、あたしは、笑いたくて、でも涙が止まらなくて、泣き笑いを始めてしまつた。

「何や葵つち！氣が狂つたんか？」

慌てて延光は、あたしの肩に手を伸ばしてきた。

「だつて……ヒック、泣きたいのに、あんた達が笑わせてるんでしょー！」

その言葉を聴いた瞬間、延光が、

「ふん！どつちかにせえ！この男女！」

怒つて言つたのか？それとも、冗談なのか？あたしはもうどつちでも良いやと思い、

「男女で悪かつたわね！それを言つながら、隆君なんて、女男じゃない！」

隆に話を振つた。

「ちょっと待てよ！誰が女男だよ！」

とばつちりを受けた、隆は、堪つたものじや無い！って、あたしに突つかかってきた。

それからは、三人三様、喧嘩腰のふざけ合いが始まった。それは、太陽が西の地平線に傾くちょっと前の高知県の県境辺りの出来事であつた。

高知県に入つてから、ふざけあつてたあたし達の会話は、少し静かになつていぐ。

夕暮れ間近なのに、まだ先があるみたいだった。

「どうする？このままお寺に向かつたので大丈夫？」

そう、今夜の寝床の事が気になつてきた。

「そつやな～ま、何とかなるっしょ？」

つて、延光はそう言つた。

また、お寺にテント張つて寝る氣でいるのかしら～あたしは、ちよつと嫌だなあ～つて表情を見せた。

「あ、テント張らんでも何とかなるんや。心配せんでええよ？」

あたしの表情は、どうやらかなり露骨だつたらしい。

「あ、そうですか……」

見抜かれて、ちょっとしまつたと思つたけど、一体どうするんだろう？絶対、陽は落ちてるはずだよ？なんて思つ。一体この先何が待ち受けているのだろう？

延光と延光寺。

一体どういう繫がりが有るのであらうか？

それは行つて見ないとあたしには判らない。でも、さつきからソワソワしている延光を見ている隆の表情が気になる。

どう見ても、心配事がありますよ。つて言う表情だ。

皆それぞれ思うところがある為か、何故か無口になつた。そして、

あたしは、四百四号線のこの道沿いを流れる四万十川に目を向けた。

説明としては、全長百九十六キロ、流域面積一千二百七十平方キ

ロメートル。四国第一の川で、本流に大規模なダムが建設されていないことから『日本最後の清流』、あるいは柿田川・長良川とともに『日本三大清流の一つ』と呼ばれることがある。

清流と言つだけ有つて、水はとても綺麗なのかな?などと思つていたら、何と、飲めたものじゃ無いらしい……それで清流つて一体?なんて思つたけど、綺麗だから清流と言う訳ではないそうだ。ま、そんな物か?

でも、キャンプ場も有るらしくつて、あたしはちょっと安心した。もしかして、延光はこれの事を知つていてそう言つたのかも知れないと思つたからだつた。

夏の昼は長い。でも、時間が経つにつれて、もう、東の空は群青色に包まれていた。

標識に、四万十市（旧中村市）と書かれているのが目に入った時には、空はスッポリと群青色に包まれていた。

「おい、君達！自転車直してからお寺の方に行くきに？」

途中の信号で、今迄運転していたお兄さんが、あたし達に問い合わせるために一度車を止めて、あたし達に問いかけてきた。

「そうですね。これ以上遅くなつたら、自転車屋さんも開いてない事でしょうから」

隆がキッパリ言つた。あたしが女男なんて言つたものだから、汚名挽回のように男らしく。

「そうしたら、市内で探すと良いき。ちよつと、オレ、思ったより時間食つてしまつちようけ、このまま足摺岬に行こうと思つてるんやけど、大丈夫き？」

独特の訛りのある言葉だけど、言つてる事は通じた。

「ほな、市内で探します。今までありがとうございました！」

延光は、素直に受け入れた。

「今までありがとうございました！」

「元気にな」

あたし達は、四十市の中村で下車した。

「そこから、自転車屋を探す。一〇分位後、無事見つけられた。時間は八時になるからないかだった。そして、その自転車屋さんは、ガラガラとシャッターを下ろそうとしている最中であった。

「すんません！お願いや！自転車のパンク直してや～！」

延光が駆け寄つて事情を話した。

「それは凄いな。良いきに、直ぐ見てやるつへ。」

と言う事で、あたしの自転車のパンクは直った。

「それから、今度はおれがやる。」

田舎車屋さんば、そう語って心配していた。

ええ、これから延光寺を訪れる

「わが氣をひけてお行きい」

修理代を払つたあたしはお詫を言つて延光達と共に目的地

延光寺へと足を運んだ
到着二つは、元の一時、う一

「ねえ、どうするの？」と、お寺を聞いて

着いた時

「ええんが。——でもあなた達はアリバウドですか？」

あたしは、お寺の中に入つていいく延光を隆と一緒に見守つた。ま

るで勝手を知つてゐるかのような行動の仕方だった。

十分後、延光は、あたし達の目の前に現れて、「ちやー！」と言い、

お寺の中に導いた

そして、お寺の中から少し離れた所の民家に入りその玄関を開いた。
「詫びます。おノの御心に」

絶対にされ、ハニの中央ヤ

「あつ」。延光寺へ。鳴子の延光が布世話になりました。

見かけと違つた少しハスキーな声だった。

「え? はい。初めまして

あたしは、度肝を抜かれた。延光のお母さん?でも、延光は天涯

孤独なのではなかつたの？疑問符が田の前にクルクル回つた。

「と言つ事で、ここに泊まらせてもらおうや。母さん、夕飯とお風

呂あるんか？」

「よく普通の親子のやり取りだつた。

「まだ、ありますきに。ゆつくりしてき」

そう言つと、奥の間に通してくれた。

古い檀家？なのがな？これは……

床はギシギシ軋むし、昔ながらの裸電球が吊るされていた。その周りを虫が飛んでいる。それが凄く印象的だつた。

「先風呂入るんか？それとも飯にするか？」

奥の間の一二十畳近くある畳の部屋。そこに入つた途端、延光は問い合わせた。

「あ、うん……」飯にしたいかな？」

まだ、自分で整理できない疑問。それが有つたから、あたしはまじついた言葉しか返せなかつた。

「お母さん元気そうで良かつたね？のぶちゃん？」

隆は、ホツとしたとでも言つような表情でそう言つた。

「おかげさんで、よくなつてるみたいや」

一人の会話にあたしは着いていけない。

問い合わせても良いのかどうなのか憚れる。

『ねえ？どう言つ事なのがな？』

と、問い合わせたい。でも、それが出来ないでいる。

「んじや、『飯や！行こうや！』

あたし達は、居間に通され、そして、精進料理のような『飯を食べた。

「どうです？美味しいですか？」

「はい。お腹空いてたから、とても美味しいです」

あたしは、正座して問い合わせられた言葉に応えた。味付けの薄い料理。美味しいわけではないのだけど、まだ、この状況が判ら

なくて、戸惑つてご飯を食べる気がしなかった。

「隆君でしたね？いつもお世話になつてます。延光がお世話になつてるのでしょ？」

「はい。そうですね。楽しく、いつも良い兄弟でいられてますよ」

「まあ～それは良かつたきい。安心したわ」

お母さんと言う人は、隆の事も知つてゐるみたいだ。

「こちらの女の子は？」

「うん。夏休みの間のオレの家族。お姉さんや」

バクバクご飯を食べている延光は口元を拭いそう言つた。

「夏休みの？そう。また可愛らしいお姉さんなのね？」

微笑ましいとでも言つた様子で笑いかけてきた。

「そんな、可愛いだなんて事ないですよ？」

ちょっと恥ずかしくなつてあたしは頬が紅潮した。

「飯も食べたし、母さん？オレら、自分とこの部屋に戻るわ。あ、風呂は葵つちから入りい？」

と言う事で、食べ終わった瞬間、部屋に戻ることとなる。あたしは、それに従うだけだった。

「お風呂入りに行くね？」

部屋で、準備をし、そして、部屋を出た。

「行つてらつしゃーい～」

あたしは先に風呂に向かう。廊下を右に曲がつた所に有つた。中は、木造の古びたお風呂だった。

あたしは、まだ理解できない。何？このモヤモヤした気持ちは？

風呂に浸かつても、全く癒されない氣分だ。

訳が判らない。だつて、お母さんと呼べる人が居るのに、何故、岡山の養護施設にいるのか？離れて暮らさなければならぬ何か？がそうさせているのか？そこまで考へても、答えが導かれないと仕方なく、あたしはすんなりと風呂を出た。

そして、着替え終わり、あの部屋へと戻つた。

「お帰り～んじや、次は隆が入れや？」

「うん。判つた」

あたしが風呂に入つてゐるうちに、お風呂の用意をきっちりしていた隆は、直ぐ様この部屋を後にした。

あたしは、疑問渦巻く頭をどうにかしたくて、延光をちらりと見た。すると、延光も話す事があるからーといった表情であたしを見ていたのである。

「ビックリしたやろ？」

「あ、うん……」

肯定した所で、疑問を投げかけても良いのかと思い、言葉を編もうとしたが、先に延光が話し始めた。

「オレはな、大阪生で産まれて育つたんよ」

「うん」

「でもな、オレの母さん病持ちで、オレとは一緒に住めなかつたんよ。で、親父と暮らしてたんや」

延光は思い出すよつこひつと右上方に向いて田を向けた。

「うん」

「だけど、オレの父は、五歳の時に病氣で亡くなつてしまつた。それで、離れて住んでた母さんと一緒に住もう。といつ話になつてな、一緒に住んだんや。この家で……」

なるほど、それでこのお寺の中を知つていたのかと理解はした。でも、どうして、また離れて住むことになつたんだろうか？それが判らない。

「母さんな、この寺の一人娘でな。寺の切り盛りをしながらオレを育てるのに無茶してしまつたんや。で、その頃から病院通いが始まつて、入院退院を繰り返したんよ。だから、オレは看病しなくちゃならなかつた」

「お祖父さんやお祖母さんは？」

「おりん。とつぐに亡くなつてた。高齢出産の一人娘やつてん」

「……うん」

「でも、オレ当時小学一年生やつたから、世話をしながら学校通りなんて出来んかった。それで、親戚の方と話し合いして、母さんの事を任せた訳やねん」

「うん」

「父さんと母さんは高知で知り合つて駆け落ち状態で直ぐに結婚だつたらしいわ。当時は凄くもめたらしい。うちの親類つて、父方は元々居なかつたし、母方は、子供の面倒まで見れるほど裕福ではなかつたわけ。んで、オレは、岡山のあの施設に自ら志願して入つたという訳や」

「うん」

あたしは相槌を打つことしか出来なかつた。

「オレの母さん若いやろ？ 実は十六の時にオレを産んでな。元々体が弱かつたのに無理したん。それも双子をお腹に抱えてて。初産で、年が若いために、双子の一人を流してしまつたんや」

水子地蔵の時の言つた言葉が蘇つた。

『可哀相にな。生まれて来ること適わんかつたんやろ？それを考えると、オレらは幸せなんよな……？』

だつたかな？

あの時の言葉をきちんと理解した。

「うん」

「多分、母さんは無事産みたかつたんやと思う。でも適わんかつた。その心労もあつたんやと思う、疲れ果てたん。精神的に不安定やつたんやろな？」

延光はそしてこの時笑つた。

「……オレ、母さんに、酷い事言られてな。一瞬ショックを受けたん。実の子供にそれを言つんか？ ってね……」

「何を言われたの？」

気になつた。何を言われたのか？

「どうせなら、二人とも死んでくれたら良かつたのにつーてな」

あたしはゾッとした。実の母がそう言つことを言つのがど。

「精神やられてたん。オレは、ちゃんと判つてた筈なんやけど、傷つかない訳ないやろ? どんなに死くしても、精神的に不安定を状態をオレで埋めれんのは、きつかった。もしかしたら、オレ自身がもう限界やつたのかも知れん。だから、母さんから離れたつて言うのもあるんや。否、逃げ出したのかも知れないなあ~」

「……」

頷く事さえ出来ない。

「だから、意地悪のつもつやつた。岡山に行つたのは……オレの存在を否定した母さんに思ひ知らせたかったんや」

セリフまで言つて、延光は深い溜息をついた。

「このひこのを懺悔。って言つんやろな? 意地悪をしたオレの懺悔。今、母さんは立ち直つてゐる。オレはどつすれば良い? もし、あのままでやつたらもうどうでも良いと思つとつた。でも、違つんや。ちやんとオレと接するこじが出来る状態になつとる。……」

あたしさ、神様じや無い。懺悔と言われても、何もその道しるべをしてあげられない。

「あたしには判らない。だけど、延光君の想つ通りにしたらこいつ思ひよ? ……どつしたいか? 何が自分に必要か? 那を考へれば良いんじゃないかな……?」

ああ、何言つてるんだろ? 「んな一者折一なんてあたしには重すぎる。

「どつしたいか? かあ~そつだよな? どけりが幸せか? ジヤなくつてなあ~」

延光は考へ込むように下を向いた。

「今夜考へてみるわ。ありがとつなく聴いてくれて……」

そうして、延光はちょっと苦笑いをした。

「役に立たなくて、ごめん……」

あたしさ、それしか言えなかつた。

そんな時、隆がお風呂から上つてきた。

「出たよ~

すると、延光はスッと立ち上がり、

「早かつたなあ～気持ち良かつたか～？」

いつもの延光に戻っていた。

あたしは、今夜下す延光の結論が気になつて仕方なかつた。

#19 延光の決断・隆の涙

「ちゃんと聽けた?」

あたしは、隆に問いかけられた。

「うん。聴いた」

その後、あたしは隆に問いかけた。

「ねえ、隆君は延光君がどうしたら一番良いか? 判る?」

隆と会話が出来る。と思つとホッとした。だって、多分隆は知つてこるだろうから。

「お母さんと一緒に住むのが一番良いと思つてる。だって、血の繫がつた親子だしね」

無表情にそう言つた。何を考えているのか全く読み取れない。顔

だつた。

「それで、隆君は良いの?」

「良いも悪いも無いんじゃない?」

「だつて寂しくなるよ? 延光君居なくなつたら一団山に一緒に居たいでしょ? 一緒に居たい筈だよね?」

あたしは、此処に来るまでに何度も寂しそうな隆の顔を見てきた。いつも言つ事になると知つていたからだ。そうでしょ?

「寂しいかも知れない。だけど、お母さんを選ばないと、ボク、のぶちゃんを殴るかも知れないなつて思つ……」

そんな……殴るだなんて……自分に素直になつてよー。

「そんなの変! 選ぶのは、延光君だよ? それでも殴るつてこいつの? あたしは、今にも泣き出しそうだつた。

「これから有つた物は有る筈だと、それを当然だと思つでしょ? ボクには何もなかつたから、その気持ちは判らない。葵ちやんだつて、ミサちやんを亡くして、辛かつたんでしょう? のぶちゃんはそういうことをちゃんと判つてる。だから後悔しないよ! 、多分お母さんを選ばなきやならないつて思うんだ」

「そんな……」

「鬼ヶ島の話覚えてる?『鬼は寂しかったんだ』って言ったの。それはのぶちゃん自身を鏡に映して見ていたんだよ。鬼として、お母さんを苛めてしまつたと思つた。じゃないと、あんな言葉は吐き出せない」

それはそうかも知れない。だけど、隆君の本当の気持ちはどうなの?有つた者を無くしちゃうんだよ?それは、隆君にとつて初めての経験となるものかも知れないじゃない?そんなの悲しいじゃない!あたしはついに涙が零れた。

「葵ちゃん。ボクは覚悟していたんだ。この日が来るのを。だから、泣かないでくれる?」

そう言つて、静かに笑つてから隆は障子の向いの外の景色を眺めていた。

夜は眠れなかつた。

明日どうなるのか気になつて仕方が無かつた。眠れない夜。窓の外の月の光が静かにカーテンの端から差し込んで、冴え冴えとしている。綺麗なのに、冷たい。夏なのに寒さが体に走りそうだった。

眠れる呪文。そんなものがこの世に有るならば、唱えてしまつた。そんな事を考えて、

隣で寝ている延光や隆を布団の隙間から見た。疲れてるせいか?グッスリ寝ているみたい。

一番関係の無いあたしが眠れないのに、何故あなたたちは寝れるのよ!毒づきたいけど、そんな事は出来なかつた。

ああ、もう、知らない!布団を思いつきり被つた。だけど結局、一睡も出来ずに朝を迎へてしまつた。

朝は、少し靄がかかつた感じだつた。

というか早朝過ぎたから、霧が有つたのかもしれない。

延光のお母さんが、あたし達を起こしに来てくれた時には、もう、夏らしいギラギラとした太陽が昇っていた。

朝御飯を食べる。眠れなかつたあたしのお腹は心とは裏腹にグウグウ鳴つていた。それを延光は聞いて笑つていた。あたしはこの夜にどう決断付けたのか知りたくてウズウズしてるとこに、全く暢気なものだ。

そして、旅立ちの時間が来る。

あたし達に、先にお寺の方に行つてやと言つた延光。あたしは何も言えなくて、相槌だけ打ち、そして、隆と共にお寺を見て回つた。

「ちゃんと眠れた？」

「え？」

あたしは、何でそんな事訊くのよと思つて、ちょっと膨れた。だつて判るでしょ？この顔を見たら！

隈を作つた顔。どう見ても寝てません！つて顔だろひつ。

「寝たわよ！」

ちょっとイラつきながら、あたしは逆の事を言つた。

「そう」

隆は、そう言つて意味ありげに笑つた。そして、

「ほら、『第三十九番札所、赤龜山寺山院延光寺』だよ。見て回ろう！」

と、お寺の中を散策し始めた。晴れ晴れとした表情で、一点の曇りも無い笑顔を見せた。

あたしと隆は、タベ見られなかつたこのお寺を見て回る。このお寺は南国情緒ある豊かさを秘めている感じだった。

そして、広い。あたし達はくまなく歩くと、一つの龜の上にお寺の鐘みたいなのが乗つている像？を見つけた。

「これがのぶちゃんが言つてた、竜宮から持ち帰つたと言われている鐘か～」

きっと、延光から詳しく述べてるのであらう。かなり興味

深く見ていた。

「よつ！ 捜したやん！ 此処まで来てたんか～！」

そんな時、延光は後方から慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「お母さんと、話をちゃんととした？」

「ああ、ちゃんとしたわ。……オレ、やっぱ、ここに帰る事はだけへん。岡山の方で暮らすことになったわ」

そう言って、延光は笑った。あたしはホッとした。隆が泣かずに済むと思ったからだ。

しかし、その言葉を聴いた隆は、右こぶしで思いっきり延光の右頬を殴つたのである。

ズザツと、延光は地面に転げてしまった。あたしは驚いて、延光の体を起こそうと駆け寄つたが、隆はその倒れている延光の体に馬乗りになつて、もう一発殴つていた。

「ちょっと、やめてよ！ 隆君！」

あたしは、こんなことになるなんて想像も付かなかつた。確かに、隆は昨日、殴るかも知れない。って言った。それを実行するなんて……

あたしは悲鳴に近い声を張り上げた。こんなの無いよ～仲の良い二人なのに～って気持ちが先走つっていた。そして、その声に気が付いた隆は殴るその手を止めたのである。

「冗談や。冗談。もう気が済んだか？」

延光は、殴られた勢いで口の端を切つて血を流していくが、クスクス笑つて言つた。

「嘘や。一度岡山に帰つて、そして、荷物を纏めたら、ここに来る事にしたんや。何発か、隆に殴つてもうつとこつ思つて、言つただけや。だから、もつ気が済んだやろ？」

何？ どう言つう事？

隆に殴らせるつもりで、あんな事を言つたわけ？ そんなこと何故しなくちゃならないのよ～

所詮、女のあたしには判らなかつた。

「バカ！のぶちゃんなんか……嫌いだ！」

そう言つて、隆はボロボロ泣き始めてしまつた。

もしかして、隆は、本当は……

本当は、延光との別れを切り出されるのが怖くて、そして、自分の本当の気持ちをぶつける所を見つけられなくて、ただ笑つてさようならを言つつもりで……いたのかも知れない？泣く所なんか見せたくなかつたんだろう。

それを、延光があんな事を言つたものだから、訳が判らなくて、そして、手が出てしまつた。

男の子の友情なんて判らないあたしに想像出来る所というのをここまでだつた。

でも、殴られたかつた。と言つた、延光の心境は？

「隆つて、本当に心と裏腹なんやもん。困るわ……お～痛てて。マジ殴りよつてからに……」の貸し。忘れんなや？」

そう言つて、延光は隆を抱きしめた。

あたしは、何故か判らないけど、頬に涙が伝つた。ああ、じうじうのも悪くない、さよならなのかも知れないと……

「さてと、今日は、一気に自転車で走るで～覚悟しちゃ～」

お寺を出て、自転車に跨つたあたし達は、その延光の言葉を聴き、

「え？」

と言つた。

「オレ、小学校の時から行きたかつたんや～室戸岬～知り合いで、高知の室戸岬にある少年自然の家つて所で星を見たつちゅう奴がいてな。それが凄く綺麗やつたつて言つんや～それ聴いて、めっちゃ行きたかってんよ～やから、今日はそこでキャンプや～お寺参り無しの変わりに、それで決定！」

ああ、頑固一徹。無邪気に自分をアピールしてるしさ～でも、あたしもそんなに言つ星空を見てみたい気がする。東京の星は、地上

にあるだけで、もつ夜空では殆ど見られてない。それに、延光のプラネタリウムを見てから、星に興味が湧いた気がする。だから、「しようがないなー付き合いましょー！」

「はいはい。のぶちゃんらしいよ」

あたしと、わざわざまで泣き崩れてた隆は笑つてそう言つた。

室戸岬まで、八十キロ近くある。

地図で見ると、凄い、距離。高知の西と東って感じ？ 端から端まで走ると言う感じである。

まず、昼は、高知市内で食事を予定。その後夕食は、買いだめ弁当をコンビニでゲット。そう言つ感じでスケジュールは組まれた。

早速自転車に跨ると、走り始めた。

昨夜、徹夜した体とは思えないほど軽く感じた。

四十町を抜けて、世界一広い海。太平洋側の海岸線を走る。あたしは、この海岸線を走れることが凄く嬉しかった。

ミサとの出会いの時の会話で、こんな事を思い出したからだつた。「葵ちゃんつて、苗字が確かに美空だったね？ あたしは海野つて言うの。海と空だなんてステキだね！」

うへん。どうだらう？ なんて思った。別に、ステキだなんて思わないけどな？

あたしはその頃、かなり冷めてたから、その事に興味を示さなかつた。でも、今なら言った意味が判る。

海と空は向かい合つててずつと平行線を辿つてて、交わる事のない物。だけど、どう？ 水平線上で、綺麗に交わる。一直線に。遠い水平線上。きっとそこは、相対してゐるかもしけないけれど、またそこから水平線上を見ると、重なり合つ。その繰り返し。

海の碧さ。空の蒼さ。どちらも同じだけど、微妙な違いがある。だけど、この遙か先の光景はとてもキラキラ輝いて綺麗。

ミサつて、そんな風景まで想像していたのかも知れないな？ 可愛くて、そしてロマンチスト。女の子らしいそして、感性豊かな女の

子だつたんだな。と改めてそう感じた。

今、凄く気分が良い。

この太平洋を見られて、感じられて、まるでミサを身近に感じる。この旅と一緒に来れて良かつた。ありがとう。延光、そして隆。あたしは、前を走っている一人を見て、笑顔で自転車を漕ぐ。まだ続く旅。あたしは何を感じるだろう？それを考えるとワクワクした気持ちは留まらない。

天気は、西から少しづつ変わりつつあつたそんな事を知らずにあたしはそんな事を思つていた。

高知市内に着く前に、久方ぶりのにわか雨。後少しで着くというところで、あたし達は、雨の中、走り続けた。汗をかいてるものだから、ちょっとぐらい濡れても平氣だと思い、先を急ぐ。

そして、ついに高知市内に辿り着いた。

「ふえ～雨なんてついてないなあ～」

なんて話しながら、お手軽なレストランに入つた。
びしょ濡れなので、服を乾かす事も出来ず、暫く店のクーラーの効いている所で乾くまで待つた。

「は、は、ハツクシユン！」

クーラーが効き過ぎて、肌寒い。そんな気がした。

「葵つち、平氣か？タオル足りんようやつたら言えや？」

あたしがクシャミをしたものだから、心配して延光がバッグからタオルを取り出した。

「グズつ。平氣。それより雨。何時、止むんだろうね？」
足止めを喰らつて、ちょっと気分が萎えた。

「多分通り雨だから、直ぐ止むんじゃないかな？」

「止んでくれんと！星を楽しみにしてるのにい～」

あたし達は、大分乾いてきた服を見て、大丈夫と思つた頃に、席

に座った。

「雨、止んだら直ぐに出発や！それまでにお腹の足しになるもん食つとこな？」

延光の言葉に頷いて、三十分ほどそこに滞在した。

そして、また、走り出す。

本当に、通り雨だったみたいだ。

あたしは、ホツとして自転車を漕ぐ。でも、ちょっと、体がだるいかな？あんなに軽快な走りをしてたのに、体がちょっと重い。それに喉がイガイガしてる感じ？なんて思いながら走った。

でも気にしてるから、そう思つだけであつて、あたしの思考はスッキリしている。

だから、気にせず走る。前を行く一人に負けないよう……

室戸岬に辿り着いたのは、夕日が沈む頃だつた。
わずかに太陽が、地平線に隠れる頃だつた。

あの太陽が、地平線に沈むのを見るのは、現実リアルでは初めて見た。凄い！闇のような海にオレンジとも朱色とも言つような大きな太陽が静かに沈む。

あたし達は、室戸岬の海岸でそれを目にし、言葉を失つた。余りにも綺麗。

じわじわと沈んでいく太陽。まるで、スローモーションの映像を見ているかのよう。

それを心の中に止める。そして、時間はゆっくりと過ぎ去り、あたし達は、今日寝るためのテント作りに勤しんだ。

ちよつと山に入ったところで行動に移した。

テントが出来上がつたのは、一時間後くらい。その中で、あたし達は、コンビニで買つておいたお弁当を食べた。

味氣ないお弁当なのに、お腹が減つてるから、とても美味しく感じられた。

延光にいたつては、食べ終わつても、まだ何か無かつたか？なん

て言つて、鞄の中をゴソゴソ探し出す始末。お腹が減りすぎているらしい。食べ盛りだものね？あたしはその行動が可笑しくて、クスクス笑つた。

旅を始めて一週間くらい経つたのかな？思つたより早く此処まで来れたものだ。

あたしは自分がしているこの旅を振り返る。

色んなことをしたなあ～あつたなあ～

それらを心の中で反芻し、そして、心のアルバムに仕舞い込む。記憶と言うアルバム。誰にも見せる事は出来ない、貴重なモノ達。もう時間は、九時近くになっていた。

#20 夜空のカルテット・そしてヒュローグ

「さて、諸君！天体観測のお時間です～」
クラクションの『パフパフ～』なんて音が聴こえてきそうな延光の、号令。

あたし達は、延光に連れられて、もう少し山の方に足を向けた。
小高い丘。そこまで来ると、延光は、「さてご覧あれ！これが、綺麗な夜空なんぜよ！沖縄まで行かなく
ても見れる光景や～！」

なんて言つて、あたし達は空を見上げた。
そこには、数えきる事の出来ない星が瞬いていた。
あたしは、こんな星空を見た事がなくて、

「うわ～～

と、言葉が漏れ出した。

凄い。こんなに空には星が有るのか？と思えるほど、何処を見て
もキラキラとした星が広がっていた。

「冬の夜の方がもっと凄いんやろうナビ、夏の星空も、またイカシ
てるよな？」

「うん……」

隆も惚けたように、今にも落ちてきそうな星達を見上げていた。

「ほら此処！一等席やで？」

延光はそう言つて、座れる所を確保して、そして、寝つころがつ
た。

その横に、隆も寝つころがつた。そして、一人して、夜空を見上
げていた。

「葵つちも来いや～氣分ええで？」

「うん！」

あたしも、その横に並んで寝つころがつた。

見上げと、東京では見れない小さな星までくっきりと見える。周

りに明かりがないためにとてもくつきりと。

「夏の大三角形！見つけたで～」

と言つて、延光は夜空を指差した。

「え？ 夏の大三角形？」

あたしは何処かで聴いた事がある単語を口に出した。

「白鳥座とわし座と、こと座のことだよ」

隆が補足してくれて、ああ～つと思いつ出した。

「凄いね～こんなに星が見えると、どれがどれだか判らないや～！」

と言つて誤魔化しておいた。

「白鳥座は、デネブって星が一番大きい。で、わし座は、アルタイル。こと座はベガ！」

延光は、それらを指差して、三角形に点と点を結ぶようにまるで夜空に線を引いてるようだつた。

「何処何処？」

「葵つち、無知～天高い、今の時間は丁度上や！」

そう言つて、あたしの目にも判るように手を使って指した。

「あれが、デネブ。んで、これがアルタイル。で、それがベガ！」

「なるほどね。判つた気がするよ」

あたしは、こうやつて教えてもらえてフムフムと頷いた。

「白鳥座つて凄く大きいんだよね～」

「そうそう！ 隆は良く判つてるやない！」

そう言つて、延光はケタケタ笑つた。

「夏の大三角形は、有名だもの？」

そうですか。あたしが無知で悪びれございましたね。ちょっとだけムツとした。

暫く眺めていると、

「オレ等みたいやな？」

「どうして？」

あたしは何に対してもう言つたのか判らないので、延光に寝つこうがつたまま問いかけた。

「三つの星。それが人。で、今は夏。さしづめ、こと座は女の子の葵つちで、白鳥座は優雅な隆。んでもって、一風変わったわし座はオレ」

なんのこいつちや？あたしは頭を捻りそうになつた。

「離れた所でも、こなたは星座として自分達と言ひ形をとつててな、いつまでも空にあるんや。それらは過去の遺物かも知れへん。でも、共鳴してゐる。ずっと、この宇宙そらにある」

あ、なるほど。離れても、自分達はずつとこの地球に居ると言いたいわけね？延光つてば、遠まわしにロマンティックな事を言つて、あたしはクスリと笑つた。

「あ、気が付いたんだけど、確か……こなたのベガは七夕の織姫で、わし座のアルタイルは牛飼いだったんじゃない？で、白鳥座はその天の川の架け橋となる星座でカササギの橋……だったよね？ふふん。のぶちゃんは、知つててそんな事言つたのかな～あ？」

「え？」

隆は意味ありげな事を言つた。

「何でこんな奴と！」

あたしと延光は、一緒に否定した。あたしの頬はちょっと高潮してたかも知れない。

「あつやしい～つて、ま、ボクは客観的に応援してるよ～」

なんて言つたものだから、延光は、隆の頬をつねつた。

「痛い～！」

「この口が言つからや…」

全く～ロマンチストも、子供じみてるとちよつとかつこ悪いかも。

「さて、こと座のベガさん？何か歌つていただけるかい？」

隆は、まだ延光とじやれあつてゐるが、話をあたしに振つた。

「音痴だから嫌！」

「んじや、オレ達も歌うわ～」

「え？マジですか？」

「マジマジー！」

「うんうん」

なんて事で、三人で、合唱。まるで、延光の言葉を借りれば、夜空のカルテットって所だ。

「遠くきく山に陽がおちて……キャンプ場なんかで歌われる歌を歌つて、あと少しの旅を盛り上げる。そう、今夜はお祭。思いつきり騒ごう……この時を忘れないために……」

「ヒック・シユン」

夜のパーティーは盛り上がった。

でも、あたしの体はちょっと異変が出始めていた。

「大丈夫なの？葵ちゃん？」

テントに戻る時、隆が心配してあたしに問いかけた。

「らいじょうぶ。ちょっと鼻風邪みたい……寝たら治るよ。きっと……」

テントに戻ったあたし達は、直ぐ様寝る準備をした。勿論歯磨きもしたからね。

「おやすみ～」

消灯して、眠る。

そして、あたしは、徹夜の疲れも有りグッスリ休んだ。

次の朝、大変な事になるとも知らないで。

「葵つち～まだ寝とるんかい？おきいや～」

耳元で延光の声が聴こえた。でもあたしは覚醒できない。喉が痛くて、ガンガンと頭に響く。何これ？気持ちが悪いよ～

「なんやこれ！熱が凄い！どうしよう～隆！」

耳元で、雑音混じりに延光の声が響く。

そしてバタバタとした足音が、耳に響く。

その後のあたしの記憶は無かった。

田を醒ましたあたしの田に映ったのは、お父さんとお母さんだつた。

「葵ー大丈夫?」

お母さんが、あたしの顔に手を寄せた。

「あれ、こには?」

あたしは見た事のある天井を見上げた。

「そうだ、あたし旅をしてて……?」

記憶がぶつ飛んでる。変だな? 何でここのお父さんとお母さんが居るんだろう?

「良かつたわ。葵ちゃん三日も眠り続けてたのですもの……こには、須藤さんのお宅よ? 葵、あなた旅で無茶して肺炎起しがかけてたのよー。」

お母さんが血相を変えて喚いてくる。

「延光君達が、須藤さんのお母さんに連絡を取つて、家に連絡してくれたの。全く人騒がせな子……」

あ、そんなんだーあたしの頭はまだちょっと覚醒しきれてなかつた。

「ちゃんと、お礼を言つのよ? 病院まで運んでくれたって、大変だつたみたいだわ」

とお母さんは涙目でそう言つた。

「ん~と……延光君と、隆君は?」

「今、下にいる。ちゃんと反省をする事!」

お父さんは、怒りたい所を我慢しそうだった。

「呼んで来てくれるかな? あたし、一人の旅の邪魔しちゃつたんだよね? ちゃんと謝るよ」

あたしが此処に居て、信光や隆もいると言つた事は、旅はその時点で終わつたと言う事かも知れない……ああ、楽しみにしてたのに、ぶち壊しちゃつた~はあ。

父とは母は、一階と一緒に行つた。

その後、一分くらいで一人が部屋に入ってきた。

「あ、元気になつたんか？」

延光は、心配そうな顔で笑つた。

「あの後どうしたの？旅続けれなくて」「めんね？」

「のぶちゃんが、タクシー呼んで、病院運んだんだ。それから、熱が引いたから、葵ちゃんおんぶして、汽車で高松まで出て、岡山の此処まで運んだんだよ」

あ、凄い迷惑掛けちゃつたんだ……

「ごめんなさい。延光君……」

あたしは、恥ずかしくなつて布団を少しずりあげた。

「謝らんでええよ。葵っちゃんくらい軽いもんや。保険証無かつたから、実費だつたけど、何とかなつたわ。マジ心配したで？オレ等がもつと氣を遣えれば良かつたんやし……」

延光は、自分を責めている感じで苦笑いをした。それを見てあたしは自分を恥じた。

「そんな……体調悪いのに気がつかなかつたあたしも悪いのよ。謝らないで！……それより、自転車は？」

そう、旅で使つた自転車はどうしたんだろう？

「運送屋さんに運んでもらつたわ。その辺りは隆がしてくれたんよ。運送屋つて手もあつたんやな？」

そうか～旅はあそこで終わつちゃつたんだ。

「そつか……」

すると、隆が、

「お母さん達もいらしてるんだし、もう少しお話したら？帰つても話せるだらうけど……今話しておく事つてあると思つよ？」

「こには、自分達より、家族で話をしたら～と隆は持ちかけた。

「うん。やつする……ありがとうね。色々と……」

「良いつて事よ～んじや、今日のところはこれで～」

延光達はそのまま去つた。

そして、お父さんと、お母さんは再びこじの部屋に戻つてきた。

「話は終わったの？」

お母さんは問いかけてきた。

「うん。話した。そして、謝ったよ？」

あたしはこの気持ちをどう説明すれば良いのか迷った。が、謝る事にした。

「家出なんて勝手な事してごめんなさい！」

それに関しては、お父さんが、

「全くだ！この親不孝者が！」

と言つて、怒っていた。でも、

「自分で納得行く旅が出来たかい？」

今度は優しくそう問いかけてきた。

「うん。良い旅が出来たよ。自分自身を知るには丁度良かった。色んなことが有った。それが、今後どう自分に結びつくか判らないけど、今までの事を振り返れだし、身に着いた事もある。本当に良い旅が出来たって思う」

あたしは珍しくお父さんと向き合つて話してゐる気がした。

「それは良い事だ。その年で見たり聞いたりすると、一生の価値だ。お父さんは、今後その成果をどう葵が生かすか？それを見たいと思う。とにかく、休みなさい。此処に帰りの運賃と、お世話になつた分のお金をしておく。使いなさい！」

お父さんはそう言つて、緩やかに微笑んだ。

「あ、お父さん？須藤さんへのお金は、あたしがちゃんと返すから良いよ？これはあたしの事だから。だから、運賃だけにしてくれるかな？」

そう、旅行で使つたお金は、自分で返したい。

「そうか。わかつた。好きなようにしなさい。体が完治したら、帰つて来るんだぞ？」

「はい」

お父さんは、世間体を気にするかと思つたのに、あたしの意志を汲んでくれた。

「ありがとう。お父さん……」

あたしさ、お父さんに微笑んだ。

「あのねお母さん。心配掛けで」めんなさい。あたしがミサチヤンの事で失語症に掛かつた時、お母さんの言葉で色々立ち直る事が出来たつて事も話してなかつた気がする」

そう言つて、あたしは過去の話を持ち出した。

「喋れなくて、家に閉じこもつてた時、お母さんの顔を見る事が出来なかつたんだよ。でもね、夜にお母さんこつも泣いてた。それを見て、早く立ち直らなきやつて思つたの。

そうしないと、お母さんが駄目になっちゃうと思つたんだよ。そうしたら、少しずつ回復して行つてね?そして、話に耳が傾くようになつて話が出来た。ありがとう」

そう言つた瞬間に母の目から涙がこぼれた。

「もう良いのよ?今、元気に話せるようになつてる葵ちやんを見て、いられるんですもの。お母さんは、それだけで十分よ……」

今が大切。つて言いたいのだと判つた。

「さて、そろそろお暇する。一人で今度は帰れるな?」

「うん。もう一人で何でもやれるようにならなきやいけない年だからね?あ、帰つたらね、お母さん。料理の仕方を教えてもらえる?」

「ええ、良じわよ。早く良くなりなさいね!」

そう言つうと、お父さんとお母さんは須藤家を後にした。

あたしが、病氣から完治して、この家を出るのは三日後だった。

「葵ちやん。おついに帰つても、元氣で居るのよ?もし、ひかり来る事があるたら、是非足を向けてくださいね?皆、待つていますからね?」

おばさんは、旅行から帰つてきて、帰省するあたしに玄関口でやう言つた。

「はー!それから、旅行の代金も必ずお返ししますー。」

「葵おねえちゃん、きつとだよ?」

優香ちゃん達もそう言つて笑つて見送つてくれた。

「延光と隆は、一緒に岡山駅行くつて言つていたから、外で待つて
いるわ。道案内してもらひなさいね？」

最後の最後まで、色々迷惑掛けちゃつて。あたしは苦笑いす
るしかなかつた。が、

「よう~早くせんと、列車出ちまうで?」

玄関から出たところで、延光は自転車に跨つてそう言つた。

「のぶちゃんの後ろに乗つたら良いよ~」

二人乗りはいけません！

なんて思つたけど、最後くらい羽目を外すか？

「宜しく~」

あたし達は、一気に岡山駅へと向かつた。

「元氣でなくオレも、三日後には高知に戻る事になつてるん。でも、
また逢えると思うわ！楽しい時間ありがとうな~」

プラットホームにJR西日本のアナウンスが聴こえて、あたしは
新幹線に乗り込んだ。

「ボクは、岡山にずっと居るから！手紙でも書いてね？のぶちゃん
も、住所ちゃんと渡しなさい！持つて来てるんでしょ？」

つつ突かれて、延光は口焼けした顔を染めて白い紙を手渡してく
れた。

「うん。手紙書く！じゃあ、元氣でね！」

あたしは、閉まるドアに向ひつて、手を振り続けた。また逢う事
を誓つて。

旅もこれで終わり。此処岡山に辿り着いた事は、ある意味幸運だ
つたのかも知れないな。なんて思う。あたしは、一般車両の座席に
着いた。ああ、これから東京に戻つて生活をする事になる。

あの慌しい毎日は心の奥に仕舞い込んで、あたしは、荷物を肘に
置いた。

すると、何処かで聞き覚えのある声を聞いた。

「お譲りちゃん？隣、良いかな？」

あたしは、良いですよ。と囁つてしまつて頭を上げた。

「あ~~~~~！」

そこには、あたしの財布とカードを抜き取つて行ったあの、おじさんが居た。

「返して！あたしの財布とカード！」

あたしは、この奇妙な偶然を、神様の贈り物だと思つた。今は新幹線の中。もう、この人の逃げ場所などありはしない！

「げっ！」

つと退くおじさんの手首をあたしは鷺掴んで、しつかりとしがみ付いてやつた。

「勘弁！もうしないから！」

おじさんは、周りの乗客の視線が自分に注がれている事を確認して、しょんぼりと、あたしにお財布と、カードを返してくれた。

「もう絶対しませんよね？誓いますか？そうしたら、あたしは警察には通報しません。言つておきますが、あたしの父は警視庁で働いてますよ？」

につこり笑つてあたしはおじさんを見た。

おじさんは、『もうしません』と言つて、そそくせと違つ車両に去つて行つた。

「さてさて、どうだか？」

あたしは、これからのおじさんの行動を想像して呟いた。ちよつとだけだけど、あの間抜けなおじさんに感謝していたりしていれる自分がいたりしてね？

新幹線の中、あたしは品川までずっと車窓から外の景色を見ていた。

実家へ戻る前に、あたしは、ミサの眠るお墓を訪問する事にした。色々話したい事がある。

そして、謝りたい事も。

ミサのお墓は、あたしの家から南に位置する少し小高くなっているお寺の傍にあった。

そして、お寺の住職の方に案内して貰って、あたしはミサの墓前に立つ。

「不幸な出来事でしたよ。娘さんまで道連れにして。ええ。本当に

住職さんは一礼し、あたしに一言添えて立ち去った。それから、あたしは此処まで来る間に買つた白い百合の花を添えて、手を合わせた。

「今まで一度も来てあげられなくてごめんね。ミサ……怒ってる？
今さ、話したい事が沢山あるんだよ。あのね。あたし、ミサの事を忘れないと思ってた。だって、凄く辛かつたんだよ。ミサがこの世に居ないって事を信じたくない……でも、違つてた。延光や隆と出会つて旅をして、気付いた。あたしは、ただ逃げてただけなんだつてこと。そんなの虫が良すぎるよね？幻滅する？かな……やっぱり。だけど、今は違うよ？鮮明に、色褪せないミサとの想い出を胸に焼き付けて、これから生きて行きます。ミサの分も。ミサがやりたかった事。感じたかった事。それら全部を、あたしは変わりに体験してあげる。そして、全てを今日から日記にしたためます。それは、ミサへの天国への手紙。見ていて？あたし頑張るから！」

あたしは、堪え切れない胸の奥の涙を押し止めて笑つた。ミサの前で泣いちゃだめ。きっと、心配するから。

「今日も天氣が良いね～空が綺麗だよ～海が見えたらもうっと良いのにね？知つてた？海の碧さは、空の蒼色が反射してるんだつてこと。あ、ミサは知つてたのかもね？あたしは、知らなかつた。そう、あたし達はちゃんと繋がつてる。だから、絶対忘れないーーここに誓います！」

あたしは、ニッコリ笑つて、何も返事をしてくれないお墓に向かつて宣言した。

もう一度と、泣かない。そして、ミサの事を忘れない。
やつと、新鮮な空気を吸つた気がした。肩の荷が下りた感じだつ
た。

「じゃあ、また来るね。うん！」

あたしは、しつかり地に足を着けて歩く。帰つて色々な事をしな
くちゃならない。

学校の宿題も残つてゐるし、岡山の須藤さんに送金もある。
現実世界を感じて、そして、生きていく。そう、これはあた
しの人生なのだから、自分で切り開かなければならない。頑張ろう。

そうして、家に帰つてましたこと。

押入れの奥に仕舞い込んだアルバム。

心の奥に封じてしまおうとして、一度も開く事の無かつた物。

その中の一枚を取り出して、フォトスタンドに入れた。

六年生の時の運動会の写真。

確かに、あの時あたしは後ろの方に並んでクラスの端で興味なく映
らうとしてたつけ？それを、ミサが、あたしの腕を掴んで中央に入
るようについて引っ張つて行つた。

驚いて何するの？って問い合わせたけど、

「ほら、優勝に貢献したクラスの立役者！笑つて笑つて！」

と言つて、押し出した。あたしは、立役者という大げさな言葉に
可笑しくなつて、大きな口を開け笑つた。ミサはそれを嬉しそうに
見ている。

その瞬間のクラス写真。

それを勉強机の上に飾る。

「良い顔しているじゃない。あたし！」

貰つた時は、変な顔つて思つた。でもこうして見ると、幸せな顔。
あたしはそれを見て、真新しいノートに日記を書く。
ミサへの手紙として。

それから七年後。あたしは社会人として Lをしながら、施設団体のボランティア活動に参加している。

「おい、葵つち！明日は時間取れるんやろ？飯作って！」

そう。どう言う訳か、延光は東京の大学を受けて上京してきた。「自分で作りなよ～人にばつかり頼つてさ～自覚足らないんだから～もう、君も大人なの！」

「あはは～もう結婚したら？殆ど同棲してるような感じじやん！」

そして此処にも見知った顔。隆である。

「誰が誰とよ！」

「誰が誰とや！」

同時に言い放つた。

大人になつてもまだまだあの頃のように子供染みたあたし達。でも、判つてる。大人になつても子供の頃の心で居られる幸せを大人は持ち合はせているのだと。

そして、いつでも子供時代を懐かしく思う心があることを。

いつしか時は流れ、あたしは延光と結婚するだろう。隆も今の彼女と結婚することになると思う。

あたしたちは幸せな家族を作る。

そして、人はまた初めてと子供を産んで、さようならと、死んでいく。

出会いと別れ。その両方は絶対にある。
まるで物語の始まりと終わりのように。
だけどそれは人生の旅なのだ……

人生は 旅を重ねて 出会いと別れ それを知つて またぞ旅する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100c/>

夜空の三重奏

2010年10月8日15時08分発行